宗匠志宗庵中谷閲

釣雪人乳山編

俳諧提要

博文館藏版

緒言

一此書は余の俳句附合稽古に發心したる頃より二十餘年の間斯道の先生に就き聞き得たる俳事或は俳書より拔萃して附合提要に編たるものなり

一此書を編次する所の不順序なるは唯筆に任して書留たるなれは事の前後を撰はす編たるにつき見る人其の心してよ

一此書中に大同小異の俳事俳書を編て置きしは斯道の證引にして所謂人も知り我も知りてこそ風雅に樂みあるを人知らす我知りて語たるに何の樂みかあらんやこゝを以て斯道の樂みに知らしむるの微志なり

一此書に載する所は其最も必要とする事を取り疑はしきは之を省きて編まず蓋し誤りを傳へことを恐れてなり

明治三十六年七月　　編者識

67-271

俳諧提要目次

一發句の事……一
發句と附句の事……一二
堅題横題の事……一五
落題詞書の事……一七
姿情と情俗の事……一八
換骨の事……二一
同巣の事……二二
等類の事……二三
雜句の事……二五
祝言句の事……二六
一發句切字の事……二七
切字五答の事……三一
一發句十八躰切の事……四八
一發句眞行草の事……五五
一親句疎の事……五七
二つ物の事……六五
一賦物の事……七二
一夢想の事……七七
一即興の事……七八
一挨拶の事……八〇

一兼題の事……八四
一當座の事……八五
一皮肉骨の事……八七
一序破急の事……八九
一脇附方の事……九一
一五體の事……九四
一大小の事……九八
一第三の事……一〇七
一韻字留心得の事……一〇八
一第三異體の事……一一七
一四句目五句目等の事……一二二
一折はし裏移心得の事……一二七
一名殘の裏の事……一三一
一揚句の事……一三三
一月花定坐の事……一三六
一月の座の事……一三九
一飜れ月の事……一四二
一隱見の事……一四七
一月の名所花の事……一四八
一花の事……一四八
一花櫻の事……一五一
一打越花の事……一五九
一戀句附合の事……一六二
一戀に上中下の事……一六八
一平句戀句の事……一七二
一俤附句の事……一七三
一名所附の事……一七八
一前句附の事……一八八
一指合の事……一九〇
一折合の事……一九八
一去嫌の事……一九九
一同字別吟の事……一九九
一去嫌早引……二〇六
一打越の事……二一四
一附句案やうの事……二四二
一執中の法……二四四
一遁句の事……二四六
一伸句の事……二四八
一遣句の事……二四九
一二句一意の事……二五二
一附合の事……二五七
附合體用の事……二八一

目次

附合虚實の事……二八三
附合自他の事……二八五
附合新古の事……二八九
一附合四道の事……二九〇
下の句作の事……二九五
附合疊字疊語の事……二九六
一懷紙式の事……二九八
一懷紙用捨の事……三〇三
一句數去嫌の式……三〇五
一句所に寄て名目ある事……三〇九
一會席作法……三一九
一宗匠判者執筆亭主連衆心得の事……三二八
一俳諧修行敎の事……三三七
以上

終

俳諧提要

雪中庵雀志閲
五乳人釣雪編

發句の事

定家卿の敎へに歌の上の句と發句とはかはるへし發句は脇わるものなり有ましとても夫には拘らす一分の體を專らとす歌の上の句は下の句をうみ出す冠ゆへ上の句はかりの一分體には作り難し發句に二つの心得あり一は唯まかせて作れる句は餘意なくとも切留むへし一座の會をして巡吟を催す一は發句は切字留は有なから餘意有て詞の殘る樣に作るへしとそ

風体と云は一句の姿也氣象といふものなくては發句に非らす發句の氣象を定むること大切なり（梅の鎖耳　底記）

發句は第一時節違はさるやうにすへしいかにも長高く幽玄にすへき也或は時節の寒温山水花鳥虫獸庭園居宅の美景文學の修行等何に寄らす句と所と相かなふをよしといへり尤も禁句放埒平懐を嫌ふへし猶發句に於て花實五義六義十體三十體なとゝいふ事ありて可習知（寄垣集）

發句を作るに畫句圖句といふ事あり畫句は活物にして取るへく圖句は死物にして捨へし

譬へは畫句と云は絶景を見て其景の微細を捜さす見定置て眼を閉て心を以てこれを畫くか如く其景を捨て別に案する也

圖句は筆意も捨て其景を細かに生寫しにする也發句も是に同し句の事を忘れて其風景のみにからまりたる句也

畫は見定置て其景を離れ畫法にて書く故に活るなり圖は畫の事を捨て唯正うつしにする故圖にして畫なき故に死する也句も全く是の如し故にかくはいふ也古說に龍頭抱尾といふ事あり上と下とつり合わしく譬へは上にいかめしく云たて丶下の句さまてなく留る體の事也蛇足といふこともあり

是はたとは丶五七にて句と丶のふたる時坐の句は云染す可をいらぬ者を取てひそかに添へなとする體なるへし

芭蕉曰發句は十ヲある物を七つ現はし三つは餘情に餘る物なれは其三つをもて脇を調る事よろし云々

發句畫に對して句をなすに讃と畫題との差別あり讃は其畫を褒て其畫に止らす畫題は其畫を題にして句をなす也畫題の句ならは何某題と書へし

發句は大悟の立つ所脇は大悟の收る所故に脇は少しも跡へ心の殘る所なきやう云ひきる也聊か次へ運ふ心あるは脇にわらす平句なり是れ芭蕉規矩準繩の一つなり以上師說錄

發句案し方の事に芭蕉曰發句は頭よりすら〳〵と言下し來るを上品とす物一つ二つ三つ取合てなすはよからす黃金を打延したること く作るへし

芭蕉曰發句は取合せもの也題に物一つ取合てよく取合すを上手といふ

芭蕉曰題の內より案してはなきもの也題の外を尋れは有るものなり

芭蕉曰發句は一物の上にて仕立る事はかたき物也

毛衣につ丶みてぬくし鳴の足

一物のうへにて仕立たるとなり

芭蕉の詞加樣に其人によりて一筋ならす彼と是と工夫して偏執をはなるへし

芭蕉曰發句は落つかされは發句に非す

君か春蚊屋はもへ黃に極りぬ

越人か句すてに落つきたりと見へしか又此重み出來たり

月影朝ぼらけなと丶置て蚊帳の句とすへし替らぬ色を君か代にかけて歲旦となし侍るゆへ心重く句奇麗ならす

芭蕉曰句を作るに作り過て心の直を失ふ也心の作はよし詞の作は好ひへからす

芭蕉曰句は七八分に言つめては遣やすし五六分の句はいつまても他す但かくいへはとて案し方を五六分にせよとにはあらす案は十分にして作を五六分にせよと也

芭蕉曰發句は大方物語のやうにする物なりとかく主人公をたて丶いかにも句になるやうに作配可然主人公なきは繪にか丶れぬ物也繪か丶れぬは發句にわらす

發句の題に動く動かぬといふ事功者の上には論なき事也其物より案し入て案りより生み來る詞なれは動くへきやうなし初心の句作するは其題の本情を見すして其場に生來らぬ物をしはりのわきまへなく詞をきりつき柳にやせん櫻にやせんと跡より取付る故に何にも成へく見ゆる也其本情より入らぬ故也

嵐雪論す雷電の謠に菅公大に怒り給ひ御前にありわふ柘榴をかみくたき妻戸にくはつと吹かけ給へは火燄と成てと書し文勢此御前にありわふもの饅頭羊羹ならは火燄となる文勢しはらしきはめて柘榴の外なし物の本情慥なる故に動く事なしと申しぬ

芭蕉曰發句案る時和歌の三十體つかまへ方より案し力なりいかにも發句の心得に成るへしよき句は自然と三十體のうちいつれになりとも叶ふもの也

幽玄體　行雲　廻雪　長高　高山　遠白　有心　物哀
不明　理世　撫民　至極　澄海　麗體　存直　花麗
松體　竹體　可然體　秀逸體　拔群　寫古　面白　一
興　景曲　濃體　見樣　一節　拉鬼　强力

連歌に句難をいふ事あり俳諧にも有るへし心敬僧都云凡俗なる句姿の凡俗心の凡俗也姿の凡俗は聞へ安く心の凡俗は少わきかたくやわらん道に心理を思はぬ人の句に其わやまち有物なり景曲の句には大かたなし有心なる句を作るに用心すへし

他の句を聞事大切の習ありわが好方を胸中に定ては人のき聞かたしわれをはなれて其句の天性を見るへし打聞くより能く感する句あり是は人をしてよく感せしむる句也

又深切に聞されは聞へかたき句あり意味深長の句なり强てまかりて聞て漸聞たるは誠に聞ゆる句にあらす其句の入ほか也聞く人正しけれは是を咎る也已くらき時はともに作者の邪路に入て是を聞とりたりとす心淺く境に入らぬ輩幽玄の心おはろけにもさとりしるへからす

句を見る事大やう一句の成就と不成就と新古糟粕等類同巢又古事古意等の寄せ扨其上好惡と見る也位絶勝に至ては判者の力つく也

同巢と等類とは別也作例亦別なり

句を判する事物を鏡に移すことし此故に名師ならされは判者となし難し　以上直旨傳

句ひの句といふ事歌に上品也發句又然り古人定家卿の歌を評して云朧月夜に仙女の俤かりに顯れて消失たらん匂ひなるへしとなり　全傳

芭蕉曰發句は無念想のうちに一念を起す是を起といふ無念想とは胸中に一物なく立向ふ時花時鳥月雪に對して趣向起るを起といふ

是に自在の句作を添へて「てにをは」定め發句となる又初に磯の苫屋社頭の鶯とも趣向を思ひ寄せ後に千鳥初花と景物を設く故に題動て發句と成る事なし是無念有念の境

にして發句を論するの基なり猶花實を正さは千句萬句の上に當くとも發句の姿更に動くことあるへからす

和歌には遍序題曲流の五品あり「五情五義とも云」發句には序題曲の三備あり

題　序　曲

元日に　田毎の日こそ　戀しけれ

題　序　曲

秋の夜を　打崩したる　はなし哉

傳に曰序は物のはしめにして元日に月の田毎を思ひ寄せ其後日こそ戀しけれと曲を求む

秋の夜の閑寂なるを嘶しに打崩したるは序也曲也此三つの境に欠けたるは發句と云へからす

發句は感を第一とす

發句の調格は略〻和歌と相似て聊か變れるあり和歌は姿を本とす

姿とは初句より結句に至るまて吟聲するに一點の滯るなく優美なるをいふ

感とは其物其時其場所に應して如何にも左もあるへき事と覺へす歎息せらるゝを云

姿の優美なるに此感の具備したる者を完全の歌とし名歌ともいふ也

發句も姿と感の具備せる者は論の限にあらすと和歌は三十一字にして詞に餘裕あり發句は僅かに十七字なれは其餘裕なし故に歌より一層區域を弘めて俗言平話を交へても嫌ふなき也

かゝれは姿は第二とし感を第一とす詞の優美なること芭蕉も成るへき丈は然かせんと思はれつらめといかにせん姿をのみ大事とすれは詞に餘地なき故に感情の薄らくるゝは自然の道理也故に姿よくて感情薄からんよりは寧ろ姿おくるゝとも感の深きにしかすと思はれし者と覺ゆる也

枯枝にからすのとまりけり秋の暮　芭蕉

雛のさま宮腹〳〵にまし〳〵ける　其角

黄菊白菊その外の名は無くもかな　嵐雪

是姿は亂れたるか如しされとかく字あまりにいはされは是程の感情あらんや是らを打吟し試て感情を第一とする者なるを曉るへし

發句は雅致にして卑俗なるへからす

發句は古人の妙所に眠を着くへし眞心を思ふまゝに云ひ出るを眞の發句なり

發句は眞心を以て詠すへし人を感動せしむる是れ發句の目的なり

發句は眞情を主とす

發句は感を主とする事和歌に異ならす

發句は野卑なる調を用ゆへからず

發句は人の精神を吟詠する者なり

發句の大事は語勢の自らなる妙にあり
發句の切字は語勢を助け句を調和するの具に過きす
發句は作言を求て感情に遠さかるへからす
發句は多く讀て其惡きを捨つへし
發句に動不動あり
發句の詞は聞へ易きやうに詠むへし
發句に用ふる今日の雅言は昔の俗言なり
發句は志想を述る道なり
發句の感あるは亦熟練の巧に依る
發句の感なきは句にあらす
發句の材料詩歌より取るへし
發句は誠心より出つへし
發句の解し難きは斯道に無用のもの也　以上俳句作法

發句は屏風の畫と思ふへし己か句を作りて目を閉畫に准らへて見るへし死活をのつから顯はるゝものなり此故に俳諧は姿を先にして心を後にするとなり都て發句とても付句とても目を閉て眼前に見るへし心に思ひはかつてするは見ぬ事の推量なり目に見て附ると心に量て附ると自ら他門のさかひ紙筆の上に盡しかたし諸集の附合を見て工夫すへし　三十五ケ條ノ中

發句と云は姿を先に見て情を後に案すへし其の姿といふは辯舌口才の人赤躰にて玄關に畏り侍らんに何の使者か務り侍らん綾羅錦繡を身にまとひしたるしたる人の耳うと

く舌短き風姿ありて風情なきたとへなるへし花と咲葉と落日は春秋の姿と見て寒暖は風姿と知るへし此餘は山館野亭より送り表色に至るまで姿をとゝのへさるはなし

梅が香にのつと日の出る山路かな　芭蕉

冷〳〵と壁をふまへて昼寢かな

前句は餘寒の姿と見えて後句は殘暑の姿と云ん然らは餘寒の發句にして梅を趣向といひ殘暑の發句ならんには昼寢にて其句の趣向といはん句作は其時の働にして趣向を隱す手つま也意外の餘情は爰に知るへし

發句の一作切字には及はす筥と五七五のテニヲハのまはし樣大事によりてすら〳〵と耳たゝぬやうの心得要用なるへし其内より心の切とて出來やうに出るを作意の傳と云事なり知らぬ人を此道にすゝめんとするには切字と云を知らせてひはすことなり切字とてわとのつゝきよきテニヲハなれは一作の心得までの事なり芭蕉後集

發句は格に入て格を出さるはせはく格に入らさる時は邪路に走る格に入格を出てはしめて自在を得へし大鏡序

道はたの木槿は馬に喰れけり　芭蕉

古池や蛙とびこむ水の音

格中格外のことは分ちかたし其大むねをいはゝ格中とは其句ものにくらへて解所十人か十人なから思ひよる所也此前句も槿花一日榮といへるよりおもひ取て猶し道はたなとにある木槿ははかならむと句に當る所如此又格外と

は彼を是に當へきものなし古池の句にて禪悟有りしなといへれとひか〳〵しき事也此句に限らす句の神さへ定まらは一以貫之へし禪のみにかきらんや此句の大いなる所格外たるへし格外辨

發句は寂しをりを第一とす詩歌文集を味ひて心を向上の一路にあそび作を四海にめくらすへし千年不易一時流行他門の句は彩色の如く我門の句は墨繪の如くすへし折にふれては彩色なきにしもあらす心他門にかはりてさびしをりを第一とす名人は他をよく調へしうへに折にふれてはあやふき所に妙あり上手はつよき所に面白みあり等類作例第一吟味すへし

古今の撰集に眼をさらすへし我門の風流を學ふ人は鶴の歩みの百韻冬の日春の日曠野ひさこ猿蓑炭俵等を熟覽すへし大綱序

發句は時代〳〵をすへし初心の時は句數を好むへし夫より姿情をわかち大山を越へて向ふの麓へ下りたる所を案すへし六尺を越むと思はゝ將に七尺を望むへしされは心高き時は邪路に入安く心低き時は古人の胸中を探ること能はす

てにをは專要なり夫我邦はテニヲハの國なれは先哲の作を味ひ一所も疵末なることなかれ句の姿は青柳の小雨にふれたるか如くにして折々微風にあやなすもあしからす

附心は薄月夜に梅の匂ひる如くありたし情は心裏の花を

も尋ね眞如の月をも觀すへし北枝傳

て留の發句の事

さらしなや月に歌人の與添て見る

所謂下に言葉を添て聞樣にすへし此内にある見ると云字を添て聞也又に留め留ぬ留の發句も皆如此心得へき者也

發句に詞書の事

草庵の留守をとひて

衰老はすたれもわけす庵の雪　其角

總て詞書のある句は詞書と句と照らし合せて解すへし句の光りをかゝけんか爲に詞書は添るもの也詞書なくても有ても同し力の句は詞書を添るに及はすと知るへし此句なとは詞書なくんは其意遙かに迷ふへし衰老は老衰と同し年老おとろへたりといふ事也能もわけすとは香盧峯の雪は簾をかゝけて見るといふ白樂天か句のたち入にして句意は此面白く降る雪に庵主の風情もなく能もわけす戸障子も建籠たるはいかにや扨は老衰の至極なるへしと内に入て見れは左はなくて留守にてそありけるよされは此雪に風狂して何地へか雪見には出られし也といふ句也と聞くへし此句詞書なからんには晉子か自己の老衰を述懷する句と聞ゆへし然らは自他大に相違たるへし芭蕉翁の草庵を訪しなるへし猿蓑さがし

發句を扇子なとに書やうの事

扇子なとの書やうも季に及はす大方鳥を書たり花を書た

りするものなれば其畫を考へ侍るべし何にも知れぬ繪ならは見立にて一作働くへし芭蕉後集

賴山陽或る時畫に題するとて此は行書に書かねばなるまいと獨語せり門生聞き咎め題畫の字に行草の別を立てねはならぬ秘蘊あるものにやと質問しけるに山陽書し了るの後足下能くこそ質問したれ畫躰に眞草行の別あるは書躰に眞草行の別あるか如し其畫の體に依て其躰の字を題するは勿論の事なり足下等此事を知らさりしならは今後は此の心得なかるへからすと戒めける

想古錄卷一

發句と附句の事

發句も附句も我家の汲には趣向と句作の差別ありて趣向を先にし句作を後にする事はたとへは花の題をとりて雪かと見るは趣向にて袖打ち拂ふと姿をつけ志賀の山越と詞をまはすそこを句作の上手とはいふ也

發句と附句との分別は極て物數寄有るへし

鼻紙を扇子につかふ女かな　信德

是は盃はしかぬるかなと云句に附句也もと附合の道具なるを珍らしとおもへるは未練なるへし

河舟やみよしかくるゝ蘆の花　中翁

是は水邊に附合の句なるを一句に優ありとて發句に直せし也蘆間かくれに乘越す舟工夫に落すしてひゝきたしか也

趣向にかゝはる人はすへて發句成かたし風景を知る人思ひ出多し

寢られぬ夜思ひ出せし句を書とめて朝に成て吟し返して見れは句のふりも聊かはりて心も互ひあるやうに覺へぬるは陰氣陽氣の間か句の浮き沈み覺束なし莊子に陽の字を喜ふ陰の字を怒ると訓せしも一氣のはこひ成るへし

物思ひとは誰教へけんと詠まれし夕へ〳〵の思ひせめて哀深し起て今朝また何事をいとなまんとよみし朝烏心の動靜にかけて句ことの起點を働らきぬへし前略木曾路の秋を語けるにも壘の上にては面白からぬけしきを言出けりすへて景に合せては情負る故情をこらして扨景を尋ぬるか此道の手成るへし富士を見ては發句のちいさく成ぬるは心の及はさる故也

發句附句ともに句の主成るへき事得かたき也萬歲扇に名をはるやうにて作者の名毎にあれとも一躰を立されは其名しかと定かたし只持扇のやうに名を張付すして慥なる句の主といはれん樣に心得へしすへてありていなる句にて秀逸なるは妙を得し上手也

自性といふ題にて

安心の僧も悲しや秋の暮　枳風

或僧難して云安心の上に悲みなし悲しめ秋の暮といはゝ物我の隔なく天地一己の自性を云る句也 其角雜談集

發句竪横並狂句仕立の事

縱句　五月雨をあつめて早し最上川

傳に云口中に曲を含む事勿れ心中に曲を捨ることなかれ譬へは

あなたふと八幡の森の時鳥

といふ句は口中の曲なり杜鵑といへるは心中に曲あり此句もあつめてと虛なし自然と其趣味顯る是れ談笑也最上川は閑清也曲流は一句の中に隱れて表に顯はさす五義備る者也竪の句は言葉分て吟味すへし祝儀佳節其外衷立つ時皆是縱をよしとす縱の本歌を引くに

まかなくに何を種とて萍の

波のうね〳〵生しけるらん

横題　すゝ掃や又この茶屋も不挨拶

傳云句躰作の時は上の五文字に其句の題を顯し心持にて流を含み序に曲の心を包み篇にして押へ綴るなり譬は

萍の何を種とてまかなくに

生しけるらん波のうね〳〵

如此五義篇序題曲流と全くつゝけて云に限らす頓倒しても常躰の句には句中に五義を備へ侍るを第一とする也

狂句　景清も花見の座には七兵衛

傳云題を七文字に置き上下に篇流と備へ篇に序を含み題に曲を綴るを狂句の句といふ此類右備れる句のみに非す曲流序篇題とも綴ることは作者の器量によれるへし譬は

まかなくに生しけるらん萍の

波のうね〳〵何を種とて

如此自在に綴らるゝなり幼住庵著書

竪題横題の事

題に竪横といふ事あり月雪花時鳥雁鶯鹿紅葉の類皆々竪題なり是れ本歌の題なればなり

歌連歌にせぬ題はみな俳諧の題なり角力踊ゑひす講の類是をは横とはいふなり

近年世上みたりに題ならぬものを句作り芭蕉流の發句とていたす人あり是れ以ての外なり總して題は芭蕉の時荒増極りあり紀行、挨拶、或は即興の句は格別の事にして草の發句なり口傳

落題詞書の事

題の歌の第一の難也たとへは、山花といふ題にて花は讀たれと山の心なきか落題也されどこれらはあまりなることにて初心といへともこれらを落すことはまれなるへし、山の花盛とも侍るに山花まてはよみて盛の心を落したるやうの事はある也まして彼の結ひ題の内に眼目とよむへき文字を落すたくひ初心の歌には常のこと也よく心を付へき也

八雲御抄に經信酝池月といふに岩間の水とよみて用池、俊頼は雨後野草といふに淺ぢふとよみて用野たり野亭はすゝのしのやなといひつれはあり山家を軒端の杉なと讀るはその景色を思ひやる也あなかち題をよみいれん

とはせす是を聞て歌心得ぬもの落題は一定ありぬへきこと也よく〳〵思ひわきくまふへし八重垣

詞書の事

詞書の歌は題の歌とは聊か心持かはれり然る故は題の歌は題の上に合せて題をそらさぬやうに讀也

詞書はその歌の子細を詞に書て歌の心を詞書に讓り又は歌の心を詞書にてたすくるやうにする也但しそれも詞書の中に題あるは題の歌の詠格也

詞書の中に題あるとはたとへは新古今に詩をつくらせて歌に合せ侍しに「水郷春望」といふことをかやうのたくひなり

詞書の歌とはたゝその歌の故を詞に書たるやさて又詞書には、梅花とありて歌には花とはかり讀たる類多したとへは新古今に

二月まて梅花咲侍らさりける年讀侍りける

知らめやかすみの空を詠つゝ

花も匂はぬはるをなけくと

是詞書には梅とありて歌には花とはかりあり又古今集に

やよひのつこもりの日雨のふりけるに

藤の花折て人につかはしける　なりひらの朝臣

ぬれつゝそしぬて折つる年の内に

春はいくかもあらしと思へは

是詞には藤の花とありて歌には雨も藤も花もなくぬれつゝそといふに雨をもたせ折つるに藤花をもたせたりこれを詞書にゆつるといふ是則詞書の歌の一体なり

されど初心の歌にかやうに讀んとせは一首ぬけからになりて落着しかたき歌になるへし能々心つくへきこと也此外時にとりての即興景望の歌人の許に遣す歌なとの題にてよまぬ歌はみな詞書たるへし尤其時の興景氣は即題なからなに〳〵と題を定めて詠るとはことかはるへし凡て初心の詞書は歌に讀へき趣向をこと〳〵く書あらはせるゆへに歌は詞書の再釋のやうに聞へ詮なきことになる也能々心つかひすへきなり八重垣

落題詞書の事　落題詞書といふは題發句には落題あるへからす若し秀逸に落題の句ある時は前書あるへし證句あり

臘八に

はらわたを探て見れは納豆汁　許六

是落題なり此發句最初は

臘八や腹を探れは納豆汁

といふ句なり芭蕉に呈す芭蕉曰是秀逸也然れとも臘八にては句の勢ひぬるしとて句作り直し給ふ是落題詞書の格なるへし、又炭俵集に大根引といふ事をと前書して

くら壺に小坊主乘るや大根引

此前書は大根引といふこと題になきゆへ後世の嘲りを恐れ給ふて也是より大根引は題に用ふ又

甲戌の夏大津に侍りしをこの
かみの許より消息せられけれ
は舊里に歸り盆會をいとなむ
とて

家は皆杖にしら髮の墓參り

是前書にて題を入られたり

題にも又季にも節にも用ひかたしよつて前書を加へて盆の句とは成けり是にて盆參りは扱ひにて秋になるなり又

深川にて月見の興を
催して

蝶鳥のしらぬ花あり秋の空

これ前書にて月賞翫を聞かせたる句なり

歳且無季格

明る夜のほのかに嬉しよめか君　其角

君か代にあふや狩野家の福壽艸　許六

これ等皆落題なりいつれも前書にて斷りたるものなり此習をしらす當世新味なと丶て題を入れす謎のやうに句作りて聞えぬを手柄とおもふ族多し以ての外の事なり師說習を聞かぬゆへなり歌にも落題はいつれも前書あるよし諸書に出たり先の大根引の句は前書にて題を極め其餘は前書にて題を聞せたるものなり能々考てめつたに致さぬこと知りたまふへし奥儀秘洞集

姿情と俗情の事

姿情の事　古より論多し姿を先きに情をのちにすといへるも初段のことなり情をさきに姿をのちにすといふは尤いはれなき事也姿情は天地の如し前後の論にまとはすもの丶姿と己か心と相合する時を一句にむすひて例の自己のもの丶姿と己かこ丶ろと相合する時を一句にむすひて例の自己のたのしみとすへし

もの丶姿と己か心と相合する時を一句にむすへとハ俳諧の出る雅境をしめされしならん心得へし

偏到とは情のみによるを情到といふ是俳諧の風情のみにいふに同し又姿のみによるを景到といふ是俳諧にいふ風姿なり

姿を眼前に見るかことくにい丶なすものを風姿といふ

餘情は深さにしくはなし一句のよしあしもた丶に餘情の淺深によれるなり通情は尤句々にこもるをよしとす親子明友の情はさらなり春の花のはなやかに夕の露のもろきなんといつれか通情にあらすといふ事なし情はあし丶といふは己のみの情にして聞人なきをいふ情をさらふ證句末にのす

情とは言外にあふる丶の意をいふさひしきといはすしてさひしき事かきりなく凉しきといはすしてす丶しきおもむきをいふ

すへて句を案するには趣向より入るはよしとす詞道具より入るをあなかちきらはす又好むへきにもあらすいかんとなれは情薄けれは也

俗情の事　俗情といふはこゝろのきたなきをいふ外面は釋迦孔子をも奴僕のごとくに思ふ形容にて口にまかせて人をのゝしり内心は色に耽り妻妾のほたしに苦しみ金銀をむさぼるを專一となす虎皮羊實のもの是也これらの人口才を以て言つゝむとも終には俗情を吐出すものなり

詩歌連俳ともに思ひを述るものなれはつゝむにいとまなく十七字の上にてわか俗傷を見透かさるるハはつかしき事にあらすや

竹窓三筆云榮名厚利は世の同しくわらそふ所也これを求めて得へからすこれを退くるも亦得へからす求めて得へからさる事は人よくこれをしる退くるとも亦得へからさる事をしる人はまれなり若これをしる人は俗情をまぬかれん

あの雲は稲妻をまつたよりかな　芭蕉

鹿の音に人の顔見るゆふへかな　一髪

かくのごとく妾情の前後にかゝはらさるを知るへし

谷川や茶袋そゝく秋の暮　益青

今植し竹に客ありゆふ凉　柳居

これらにて風姿を知るへし風情の句は次の句に見るへし

枯枝にからすのとまりけり秋の暮　芭蕉

寂しき情かきりなし

渡りかけて藻の花のさく流かな　凡兆

すゝしき情かきりなし

野さらしを心に風のしむ身かな　芭蕉

捨身掛命の行脚をおもひ立たまひし時の句なりこれら皆通情にしてきく人腸を斷なるへし

秋はまた七日の夜の明やすき　猿雖

中〳〵に子をこそおもへ秋のくれ　蕭山

これらの句にて通情を知るへし

うらやましおもひきる時猫の戀　越人

去來抄云芭蕉伊賀より此句を書贈て曰こゝろに俗情あるもの一たひ口に不出といふ事なしかれか風雅こゝに至りて本情をあらはせりとなり

たとへ通情なりとも俗情をきらふ俳諧寂寞拔

換骨の事

換骨とは詞同しくして句意のかはりてあるをいふなり

ものいへは唇寒し秋のかせ　芭蕉

唇や蓼喰ひしあとの秋の風　許六

これ換骨をしるへし

塩鯛の齒くきも寒し魚の店　芭蕉

聲かれて猿の齒白し峯の月　其角

其角曰此後反轉して猫の齒白しとも海人の齒白しともあれ發句の一躰を備へたらんには等

類の難ゆめ〳〵わるへからす一句の骨を得てあまさ味ひになつむへからす

人の親のからす追ひけり雀の子　鬼貫

雀子を巣へもとしけり人の親　丈馬

これらもまた換骨なしたる体也

人の親の焼野の雉子打にけり　曉臺

是は前の鬼貫の句に反轉なしたる体にて換骨ともかはれり寂栄拔

同巣の事

同巣とは趣向は同し意にてたゝ形容をいひかへたるまてにて手柄なき句をいふ

葛の葉のおもて見せけり今朝の霜　芭蕉

朝顔の裏を見せけり風の秋　許六

去來曰同巣の句なるへし

桶の輪やきれて啼やむ蟋蟀　昌房

石くえて鰍啼やむ月夜かな　居行

これらの句はものにうちおとろきて啼やみたる趣は同しこゝろ也たゝかたちをいひかへたるまてにてこれを同巣とも又同窟ともいふ兄よりうまれまさらむ事かたかるへし

したらくに寢れは涼しき夕かな　宗次

此句は自の句也したらくなる姿にてのけさまにいねて四躰をあらはに出したるさま也これを他より見て別に魂を入れて一句となすときは

人醉て蚊にくらへとの寢さまかな　柴居

かくいへは形容は同し事なから自他のわかちにて句意天地懸隔なれは同巣反轉の類をまぬかるゝなり

等類の事

翁曰野明か方に殘したる

清瀧や波にちりなき夏の月

此句に似たる句この頃園女か許にて

しら菊や目に立て見る塵もなし

と作りぬれは清瀧の句を案しかへたりとて

清瀧や波にちりこむ青松葉

去來曰和歌に作例を證歌に引るゝと聞ぬされと等類は是を憚る俳諧には等類は云に及すかの作例も事により用捨あるへし

猿簑撰の時

面楫よ明石のとまり郭公　野水

此句は師の野を横に馬牽向よと同し先師曰野水か句は明石の郭公を吟す等類遁るへし答曰明石の郭公と云へる分にては和歌に詠する所とひとし一句たゝ馬と舟とかはり侍るのみ是を俳諧ににらみたる場は面楫よと乞たる船中の眺望に有是また師の牽向たる馬に蹴出されたり句主の

手柄なし先師曰句のはたらきに於ては一歩もはたらかす明石を取物にして入れは入なん撰者のこゝろなるへしとなり終に除き侍る時

月雪や鉢敲名は甚之丞　越人

此頃伊丹の句に

彌兵衛とはしれとあはれや鉢叩

といふ句あり越人か句入集いかゝ侍らん先師曰月雪といへるあたり一句働き見えてしかもすかたあり、しれとあはれやと言下せるは格別なりされと鉢叩の俗躰を立て俗名を以て句かさり侍れは尤遠慮有るへし

桐の木の風にかまはぬ落葉かな　凡兆

其角曰此句は先師の樫の木の花にかまはぬの句の等類なり師の樫の木は多く風景を見盡しねり出したる一句なり凡兆の一句はやう〳〵樫の木にとりつき指頭に拾ひあつめし句なり凡兆曰ことはつゝき似たるのみにて心かはれり去來曰等類とは言かたし同巣の句なり

許六曰

朝顔のうらを見せけり風の秋

といふ句せしを丈草にかたりけれは翁の面みせけりの葛の葉の句の作例たるへしといふ予思ふに翁の句は葛のうらといふ古歌の詞をかへしてはしめて葛のおもてとはいはれたり是をのつから別なり葛の裏といふ事古今歌俳諧共別なし予の句くすのうらに對してわたらしみを言たる句なり曾て翁の句に類することなし

外郎買に荷は先へやる

といふ句せしに退て思ふに不玉の縱尾集の俳諧に

荷は先へやる堂のちか道

といふ句ありこれ等類なり荷は先へやるといふ字にて下はいかやうにも成るなり此句の魂は荷は先へやるといふ事なり

舟のたよりに荷は先へやる
丁稚をのせて荷は先へやる

支考曰順德院の御製に

ちくま川春行水はすみにけり
消て幾日のみねのしら雪

心敬僧都の連歌に

水青し消て幾日のはるの雪

といへるは淺間敗等類とのみ思ひ侍りしか澄は情なり青しは姿なりと連歌師の申されし蕉門俳諧語錄

雜句の事

雜の句に三ッの義あり

一ッには二季兼たる句、二つには當季のもの二ッ三つ取合せていつれの季を題とも分ち難き句、三ッには當季一ッにても其季を題とせす其所を題としその事を題として其季はあしらひものに仕立たるとなり名所にもあれ何事にもあれ其題の爲に寄たるは雜句にあらすして題詠の

格にはへる

雜の句と無季の句世上都て同事に思へり差別ある事を知るへし

無季の句戀旅名所離別讃等には稀に有るへし態と好てすへからすいかにしても季の詞入かたき時は此格も然るへし以上師説錄

祝言句の事

祝言の時發句脇第三の句なとに仕樣のことは、櫻、花、梅、柳、松、竹、花を待、花開、めくむ花、花遲し、木の芽たつ、若葉茂る、牧の屋、莹重なる、軒のつま〳〵、門道の行來絶えぬ、里の行かひ、駒放ち置此の如き類然るへし祝言の時松は千代千年なと丶限りを定めさるかよし去なからかたつくへからす、花を植添る小松うへ添るなと然るへし末をか丶へることよし、夕暮、夕霧、雪消、露落、花散、木葉散、加樣の事とも然るへからす

朝露、明方の雲、今朝、朝、加樣の事にて然るへし

祝時の時上の句に匂ひの心得あり發句脇第三同前宗祇云祝言の發句に「かな留候はんに脇のはしめの詞しきしまの道なとやうの事すましき也かなしとき讀つ丶けらる丶故也

又脇の留りにうれしきなと留候へはかなしきと文字ならひてわしく候すへて玉柳なと詞心すへき也、玉やなきといふにもまれ候へはなり是にて萬つ心得忘るましきことはら成るへし以上俳諧埋木

祝言の發句　芭蕉曰祝言の發句に忘れても千とせ千代なと限りたる句わし丶多くわる事なり師説錄

發句の切字の事

發句に切字のこと諸家まち〳〵に論して初學の惑ひ少なからす假にも切字なきは發句にあらすと頑にをしふる輩あり て切字の入れ所なきをも押て切字を入むと却て句の意を損ふものあまたありとそ當時は大抵その心を得たれとも先予か聞傳へたる切字の口傳をあらまし爰にしるす大鏡

新々式に切字の事は初心を助る爲なれは宗匠憐みて早く傳授すへしと云々

先發句は混沌の間より太極の一氣の動き出たれと陰陽の姿の分れされは發句に切字を用ゆる時物二つになれは初めて天地陰陽となる事なり切字を用るは物に對して差別の義なり切字といふは發句のたけ高からむ爲に切字を用ゆ平句と姿を分んか爲也中　畧

切字といふは切る事にはあらすキレ字にてなくセッ字といふもの也蕉村か斷字といふもよからす「蕉村嘗ていふ我門にては切レ字とはいはす斷字といふとなり」切字といふ譯は至て重き大事なれはあらはに書あらはしかたし深切大切なといふ詞にてもさとるへし婚姻祝義の句に必す

セッ字を入へしセッ字かなければ陰陽か分らす彼と是とを合せて夫婦合躰の事なれは一本立にては濟ぬか故也

夫婦婚姻はと重き事のなきに切字か入らねはならぬといふを師弟は三世の縁なれは切レ字を入ぬか芭蕉の微意なりとはあまりにつたなきいひ事なり夫婦に切字を入るれは切れるといふて一本立の句をするやいかに初心の輩かやうな妄言を努々誠と思ふへからす同書に又曰連歌本式傳に切字は格字なりとあれは切字のなきはしかるへからす切字は發句の格なれは必あるへし芭蕉の常言に格は守るへし格中に居るは狹し格外に走るは法外なり格を得て格外に遊ふへしと

何丸考此論をいかゝ心得て斯はいふそ格といふは切字格字の格とは大違ひなり格字といふは假令は格目格子なとの類にて定りたるを打やはらけてセッ字を格字とは謎言なり格中格外の義は發句附句によらす一座々々の捌きの上にある事なり必是と混すへからす巳上大鏡

世に切字といふ事まことの童蒙を導く爲こそあれ元來いといふかひなき事也其切字といふ中にはテニハもあり又テニハならさるもありて法としかたき事とも也されと多くはテニハなれは別にこれか切字とてしるにも及はす

（俳諧天爾波抄）を能く見てテニハたによく働らかは自ら切字の用たりぬへし切字として教る事童蒙の爲とはいへとも其故あり其故は初學の者きれ字はなくて是非叶はぬ事と思ふより強て切字をたち入るゝ時はかへりて心ならぬ詞も出來るものにて後に至りても其くせやみ難きなり只々句のきるゝといふは一句の心の首尾する事をいふなれはゆめ〳〵文字詞なとかたちにかゝはりてきるゝにあらす古人もしかあれはこそ所謂切字と稱するものなき句あけて數へ難し今之をさとさむ爲に七部集中切字なき句二三句を掲くてに波抄

梅若菜まりこの宿のとゝろ汁　芭蕉
有明のはつ〳〵にさく遲櫻　史那
年の暮たかひにこすき錢つかひ　野坡

切字は助字也咄しにも切字あれとも一句の壺梅を知らす切字とて極めて用ひていろ〳〵の俳諧といふ物に書たり尤も初心の爲なりこの了簡まいらぬうちは俳諧の成就にあらす此境偏に大事なり俳諧秘記

切字は和歌のテニヲハと異なり發句に限りたる一派の句格也

發句に切字と唱ふる者あり云々のや文字云々のかなの類是なりこは發句に限りたる一派の句格にて歌なとの用格とは異なる者なれは昔より唱へ來れるまゝに切字と云て事足るへし

（中略）我御國の調は靈妙不可思議の活物也後世にテニヲハと唱ふる者は自ら其詞に備りてある故眞心のまゝに云出れは知らす〳〵自らに叶ふ者なり若しことわりに違ひ

て逆さまにいふ時は其語意聞へぬものになる其聞えぬ詞かテニヲハに外れたる者なり聞える者は皆テニヲハにわへる者なり然るに此テニヲハといふ者を除りに大事かりて之に叶へん〳〵と深く拘泥する時は反て詞の活動を失ふへし云々

一體格といふ名は天地碎けぬとも不變の物をいふ名なり格に變わらは格に非らす此遁辭を設けたるにても盡くは格に合ふへき者ならぬを知るへし故に歌の中にも眼の聞ける人は此テニヲハなといふ事はさはかり大事と思はぬ樣也

近來玉緒八衢なとの說を答めいへる書とも世に出來たるは靈妙の言語に定格を云ひて活物を死物とせるひかことを遁れかたきを知るへしといへるにも其一班を思ふへし歌詠みすら此の如し

況して發句の大事はいかてかテニヲハにわらん大事は只語勢の自らなる者の妙にわるそかし決して彼の死則なとに拘泥すへきものに非らす

古池や夏草や梅さくやなとの文字は玉の緒にいへる疑ひにもわらすやすめにもわらす云はゝ呼かけのよにかよふやと云はゝやゝ近き者と聞ゆれと夫とも定かたき者なり又哉と云詞は歌の上にては皆歎息の意をこめて古言にかもといふ者と全く同しけれと發句の方にては必しも歎息とは定めかたき者多しもと發句の切字といふは一種格別に設けたる者にて歌と同樣に論すへき者に非らす云々は語勢を助け句を調和するの具に過きす故に切字といふより外に名もなき者なるをよくもさとらすして彼の玉緒なとのせめ道具に拘泥し其格に叶へんとするは杓子定規も甚しき者にて笑ふへき事なりかし 以上作法

切字五答の事

芭蕉翁切字五答

嵐雪問	芭蕉答	切は盡也	
野坡問	仝	切は節也	
支考問	仝	切は一句成就也	
去來問	仝	切は寄也	
惟然問	仝	切は四十七字各切字也	

切字は論といふへからす問答と云ふへし切字皆問答の心なり一句も問答なり

切は寄也の寄の引歌

なかれてはいもせの山の中に落る
よしの川のよしや世の中

口訣になかれてはなからへてはの中略也妹背山は二ツの山の名なり其中を吉野川の流るゝと云ことなり寄所は必す別るゝ切也天性の理也爰に別ありて夫婦の別論ある道理也天地も合して天なり地と下る日月萬象又々如斯天は清くして上り地は濁りて下るといへとも人なき時はいかんそ此理を知り弘めんや此人よく切の理に

かなふ深意思ふへし

切字の事はテニヲハのとゝのひは皇國のならひにして歌にまれ發句にまれさらぬ詞にもおのつからそれはかりて定かになんわれは詞の本と末とをかなへ合るを近き頃初學ひの輩らテニヲハといふへきを切字とのみいふめり切るゝといふは其意の留る所をいふされは留るといふも切るゝといふも同しことなりそか中に餘情をふくめて「なくに」「なしに」「して」「にて」「かに」「て」「ましかは」「ものを」「物をの」意のを「りせは　なとにて留りたるを切るとはいはす餘情をふくめて留たりといふ余情をふくめて留れるはおのかまゝにいひ殘すことならされは歌の例を以て歌は詞長きゆゑ切るゝ格重なるは常におほかり切るゝ格いくつ重なりたりとも意は下へとほりて切るゝ所はたゝ一と所なる也發句は言葉みしかき故切るゝ格の重なることはいとすくなし是も切るゝ格かさなりたりとも意は下たへとほりて切るゝ所はひと所なる物也切るゝ格くさ〳〵あれとも切るゝやは多く句つめにあるものなり句つめとは

歌は一遍□　□二序□　□三題□　□四曲□　□五流□

□發句は　□序□　□二題□　□三曲□　□

此□印の所を句つめといひ此□印の所を句の中間といふ也歌は遍序題曲流の五ッ發句に序題曲の三ッにて歌の三十一字の意を發句十七字へこゝれはかならす意の殘る物なれは脇を遍流とす脇は發句の餘情を付るものなれは發句のテニヲハとゝのはされは余情聞かたし歌も發句も句つめにて切るゝしらへさまなるものにて句の中間に切るゝはまれなり

切るゝやは切字を上に受てやといふ切れ字とは

くすむ　じつ（學）　ぬ　ふ　む　ん　ゆ　る　り（過去）　き（現在）　し

是を切字といふ也此切字を上に受けて

くや　すや　すや　じや　つや　ぬや　ふや

むや　んや　ゆや　るや　りや　きや　しや

といふを切るゝやといふ歌には切るゝやを「とと受て下へつゝきたるか多くて切るゝやにて切たるは少なし歌と發句とを引合て見す切字は「外よりかゝる時のむすひ詞なるもの也

くや　應〳〵といへとたゝくや雪の門　去　來

是は下より上へうちかへす意にて「雪の門應〳〵といへとたゝくやと切たりかく打かへすを廻りテニヲハといふなり

新古今おのか妻こひつゝなくや五月闇

神なひ山のやまほとゝきす

是もうちかへして「五月闇神なひ山の山時鳥おのか妻こひつゝなくやと切るゝ意也

すや　狼の　跡　ふみけすや濱千鳥　史　邦

是も濱千鳥狼のあとふみけすやと切たり

貫之集霜かれに見へこし梅は咲にけり
春には我身あはんとはすや

是も上にけりと切る丶格あれとも意は下へつゝきて「すやと切たり歌は切る丶格重るはつねに多かり發句は切る丶格重さなれるは稀なり

ずや　枯はて丶霜に耻すや女郎花　杉風
じや　老か身にちるをはみしやけしの花　關夕
つや　我等しきが宿にも來つやけさの春　貞德
ぬや　うつり香の花もちりぬや衣かへ　麥雨
ふや　ひと聲の江に横たふや郭公　芭蕉
むや　順禮もよ所にをかむや鶏合　其角
んやは發句みえされは歌のみをのす

古今集波のうつ瀬見れは玉そみたれける
ひろは丶袖にはかなからんや

此「んやといふは「波のうつせ見れは玉そみたれけるひろは丶袖にはかなからんやは其玉をひろふとてもはかなくもあらじとうらへ意のかへる「やはの意也すへて「んや「ましや「めやといふは皆うらへ意のかへる「やの意なるもの也

ゆや　駕舁の肩に覺ゆやころもかえ　乙由
るや　霽の雨しるや土筆の長みしか　閤指

此句は句の中間にて切たりいと珍らし此しるやと切る丶「やの上に受る「るは「つる「ぬる「ふる「むる「くる「する「ける「あるなとの類ひの「るにはあらす切る格の「るは

知ル　見ル　降ル　散ル　契ル　守ル　移ル
歸ル　渡ル　光ル　鳴ル　照ル　折ル　宿ル
樵ル　回ル　取ル　賣ル　遣ル　配ル　語ル

なとの類ひ字のみに切る丶格の「るを持たる「るとも心得へし此類ひの「るを「りといふはつ丶くる時也「此るはつ丶きもす切れもすと心得へし又「る丶といはる丶「るを

流ナカル　亂ミダル　別ワカル　思オモハル
隱カクル　顯アラハル　賴タノマル

といふときは切る丶格の「る也是を「る丶といふ時はつ丶く格也

るや　氷よりさきへなかるや初こよみ　蓼太
是も「初こよみ氷より先へなかるやと切たり
りや　前うしろありや火桶の撫こゝろ　存義
きや　枯尾花まねく力もなかりきや　勇音

此過去の「きは「けりの反の「きにてなかりきやはなかりけりやといふ意也「けりと留むへき時一字あまる時は過去の「きにて切へしそも又上よりのかゝりにしたかふへし

過去の「きは元祿の頃の發句に相見へすすへて發句にはいと〳〵少なし

しや　ひよろ〳〵と　中　猶　下　霧けしや女郎花　上　芭蕉

猶といふ詞の里語「ヤッパリ「イヨ〳〵の意也又といふ意にはわらす

歎息のやのこと歎息とハめてたき事にも悲しき事にも能きにもわしきにも歎息することわれは其心にて歎息の意につきてやと切る意と心得へしすへて歎息のやにて切る丶は「やの「やなの意とみるへし

歎息のや

行秋の猶たのもしや青蜜柑　芭蕉

是は行秋の青みかん猶たのもしやと切る丶意なり此行秋「のといへる「のに心をつくへし青みかんといふへか丶る「のなり歌にも此例あり是ホの「のを味ひてみるへし

すむ月や髭をたてたるきり〳〵す　其角

是も髭をたてたるきり〳〵す其髭まて見ゆるはすむ月やなと歎息の意につきて切る丶意なり

名月や桔梗刈萱をみなへし　史登

是は桔梗は桔梗と見へかるかやは刈萱と見へ女郎花はをみなへしと見へわたる名月やな〳〵と歎息するの意につきて切たり

捨かぬる世のありさまやすゝ拂　蓼太

是も「すゝ拂ひすてかぬる世の有さまやのと切たり是らは世の有樣といへるが歎息の意也此やを歎息の

意につきて切丶るやとしらさるものは「やとのみいへれは切る丶と思ふ故誤ることいと〳〵多かりさなかむるやはよひ出しのやともいへと歌も發句も詠めをもと丶すれはなかむるやといふへし

歌のなかむるやは國郡名所地名又古くいひ來れる例を以てす

發句のなかむるやは賞する意なるもありて歎息のやにまかひ安けれと詠むるやは切さる物なれはその下には必らす切る丶所あり又詠むるやの下に動かぬ詞にて留りたるは十八十九二十の格なる物也詠むるやには此△印をつく

行年や親にしら髮を隱しけり　越人

是はなかむるやにて切れされは下はをよりか丶りたれは外のか丶りにてりと切たり

六月や峯に雲おくあらし山　芭蕉

六月やあらし山峯に雲おくときれたり是も外のか丶りにてくと切たり

名月や海も思はす山も見す　去來

此は賞するなかむるやにて外のか丶りなれはすと切たりかくの如く切る丶格重なりたるはすへて下のすにて切る丶也

十九てにはの句

名月や池をめくりて終夜　見る　芭蕉

是も賞翫のなかむるやにて外よりかゝりて夜と留りたる下へ「見ると二字入てテニヲハを合て聞く意にて十九の格也

動かぬ言にて留りたるは一字二字三字迄に限りて言葉を添へて聞く意なる物也これを心の切ともいふ也

芭蕉俳諧秘記の中に

十七字のテニヲハは常也十八十九といふは發句の跡へ一字二字入て聞意也尤も心の切ともいふ也とあり十八といふは十七字へ一字入るれは十八といふ十九とは二字入るれは十九となる發句の跡とは十七字の意の留りたる下を跡といふ又まはりテニヲハにて上に語のつゝかざる所あるは

疑二十の格

山や花かきね〳〵　の酒はやし　龜洞

是は下より上へ打かへして聞く意なれは「かきね〳〵の酒はやしは山や花〇〇〇ならんと三字入てらんとテニヲハを合せて聞く意にて二十の格なり余情も四字の詞はとゝのはさる物としるへし

變格　枯枝に烏のとまりけり秋の暮　芭蕉

是も秋の暮枯枝にからすのとまりけりと結ひて切りたり此脇は「鍬かたけ行霧の遠里の人といふ此發句はしめは「枯枝にからすのとまりたるや秋の暮といふ句也然るをある夜の茶話に季吟素堂桃青三人りして「枯枝にからすのとまりけりと詞をつゝめてあらはよからんわきも人といふても「鍬かたけゆくといふに人はあるへしとて「鍬かたけゆく霧の遠里と言葉をつゝめたりといひつたへぬ是より正風のおこれる也

十九格　是は〳〵と計花のよしの山　貞室

是もはかり花とはつゝかさる所に心をつくへし「花のよしの山是は〳〵とはかりなりと留る意にて十九の格なり以上饒舌錄

十九てにはの格

眉掃をおもかけにして紅の花。　芭蕉

是はてよりかゝりて花と留りたる下へ「さくと二字入て「くとテニヲハを合て聞く意にて十九の格也然るに此句をうひ學ひの雅十八の格とて「にしての下へ「やと一字入て聞く意といへれと意のつゝく間へ詞を一字入るゝことは例なき事也俳諧秘記の中に發句の跡へ一字二字入て聞意にて尤も心の切ともいふ也と有

眉掃を俤にして。紅の花

と見る時は「てやとうたかひのやを花と動かぬ詞にて結ふ意にて花と留りたる下へ又詞を添て聞く意也「うたかひのやを添ふといふことは例もなしことわりにも不及ひかこと也是はやとのみいへは切るゝも

のと思ひておのかまゝに「やとあらはよからんと何の差別もなく「やとせる物とおもはる是は上へ「何とてといふ言を加へて其意をしる歌あるをわしく心得てつゝく意の間へ「やと入るゝはテニヲハのとゝのひをしらぬ人のいたつらことなるへし

目に青葉山ほとゝきす初鰹　素堂

是は目に青葉ヨシ山ほとゝきすヨシ初鰹ヨシといふ意也此句ばとく〳〵の句合の左の句なり是に自らたはふれに判の詞あり

左の五文字はの字なくとも目に青葉耳に時鳥口に鰹初とは聞へ待るへし」と

あれはこゝにはバの字を畧せり句意は卯月の空うらゝかにのとけき日影の折からのけしきを余情にふくませたりされは鰹と留りたる下へ「よしと二字現在のしを合て聞く十九の格也此句を聞書といふものに三段切とある故うひ學ひの輩はいとむつかしきやうにいふめれとも歌には二段切三段切といふことなし右の句切るゝ格三つかさねたれとも切るゝ格なから意はつゝきて切るゝ所はたゝ一ッなり歌には切るゝ格をいくつもかさねたるは常に多かり

古今　君やこし我や行けんおもはへす
　　夢かうつゝか寢てかさめてか

「君やこしとうたかひの「やを過去のしにて結ひて切や行けんとうたかひの「やを「けんと結ひて切「おもはへすと切

切るゝ「四つ重ねたれとも五句のつめにて「覺て「かと切たりかくの如く切るゝ格重なりても切るゝ格なから意は下へつゝきて切るゝ所はたゝ一とつなり是はなそらへて切るゝ格重なりても上よりのかゝりにしたかひて「詞の「本と「末とをかなへ合する時は嫌ひなしと心得へし此歌切るゝ格を七つ重ねたれとも切るゝ所は只一つなり發句に十八十九二十の格あれはいかやうにもいはるれは是らになそらへてしるへし

新古今　夜や寒き衣やうすきかたそぎの
　　行あひの間より霜や置らん

是は疑ひのや三ッあり是らになそらへて知るへし

切字の事切字は深切と云こと也發句の眼目にして一句の魂を分明に聞へさせる語絶の文字也切れる切れさると云事に非らす切字十八字を父母と定む事は神代の昔男神の歌も十八字女神の歌も十八字佛道には眞言宗に悉曇の十八章に數多の文字を捌く是らを證據として十八字を切字の父母とせしなり左れとも十八字の切字あつて後に發句出來たるものには古哲の發句に自然と語絶の文字是は是れあれはあれと見出して後人の敎の爲め先哲の集られたるもの也　櫻の戸

切字十八字とは

かな　もかな　や　現在のし　未來のし　はね字　かけり　よ　そ　つ　せ　すれ　畢ぬ　へ　けかに

右十八章諸抄異說多しといへとも正して是を用ゆ

切字十八字の外に

かもな　けりな　もなし　やは　かはなり　こそ　いつ　じ　わりたり

かなには

治定のかな　貯心のかな　褒美のかな
嘆息のかな　願のかな　當意のかな
時節のかな　吹流のかな　返かな
てにはかな

傘におし分け見たるやなさ哉 治定の哉
野さらしを心に風のしむ身哉 貯心の哉
白露をこぼさぬ萩のうねり哉 褒美の哉
色々のこと思ひ出すさくら哉 嘆息の哉
黄菊白菊其外の名はなくも哉 願の哉
梅か香にのつと日の出る山路哉 當意の哉
春立てまた九日の野やまかな 時節の哉
杜若かたるも旅のひとつかな 吹流の哉
吹流の哉とはいひ流して心の殘らぬかな也

蓮の骨わはれは美女の尸かな 返哉
返る哉とは心のかへる哉なり
木からしの身は竹齋に似たる哉てには哉

やの事

名所のや　とかむるや　やすめや
口合のや　願のや　はさみや
疑のや　捨や
名所のやとはいひ切て切字にあらすといふ說あれとも
切字也尤も名のやは稱美也
笠島や　みよしのや　をはつせや
須磨の浦やの類也これを呼いたすやと云
名所を二ッ重ねたる中のやは口合のやなり
かつらきやたかま　すまやあかし
秋しのやとやまなとは名所をふたつ重ねたれは口合のやなり
とかむるやとは
闇を見よとやの類
やすめやとは
やすめたるやなり是は言葉のやすみに置きたるはかりにて心なきやなり
露けしや　さすや夕日　ふるやあられ
立やけふりの類也
口合のやとは

物二ッいはんとて中にやと入て口合ひたるやなりたとへば

花や紅葉　月や花　すまやあかし

五文字より三ッめは口あひのやなり

願のやとは

聞はや　見せはやの類

捨やとは

やと願ひて言ひ捨たるや也

しらせはや　世をすくさはやの類

はさみやとは

とやともいふ

疑のやとは常にやと疑ひて下にらんと留る類也

花や散るらん　人や見るらん　春や立らん

宿やからまし　君やこし　秋や來ぬらしの類也

片疑のやとは　疑ひのやは大かた下にらん、らし、まし、かも、けんなとのかゝへ字あり

片うたかひのやは　やとうたかひてかゝへの字なしたとへは

ちりぬれは匂ひはかりを梅の花

ありとやこゝに春風の吹

白妙の雪や高ねの花さかり

重疑のやとは疑のやをふたつ重ねたるなりたとへは

君やこし我や行けん　夜や寒き衣や薄きの類也

疑ひ捨るやとは　人は知らすやの類也

をしはかるやとは　われなれや、人なれや、いとまわれやの類、なれやはなるや也、われやはわるや也、花なれや、月なれや、水なれや此や切字に用る也、なれやは成哉までに通ふ

すみのやとは　角のやなり三つめは隅のやなり、おもふやと、しらぬやと此や五文字の角にある故なり切字にならす」

右七つのやの事は連歌の卷にも左の如くあり

五文字より三つめは口合のや、五つめは切るや、八つめは中のや、四つめは角のや、五つめは八のや、また五つめは疑のや、韻のやは捨やなり

三世のしの事　三世とは過去、現在、未來也

過去のしは　ありし、思はし、なかりし、見し、聞しなとの類なり夕に通ふしは過去なり不切也　現在のしは　ふかし、とをし、多し、白し、青し、さむしなとの類なりイに通ふしは現在也切字也未來のしは　あるへし、なかるへし、あらし、なからし、見るへし、聞くへし、ちきるへし、なりぬへし、暮れぬへし、思ふへしなとの類也

濁りたるしは　ぜし、やらし、しるまし

言殘すしは　戀し、ゆかし、うれしも同し義也
重ねしは　久しゝ、珍らしゝ、うれしゝ
はなし、ものはなし、もなし、花もなし、影もなし　發句のもなし一物を云切る也第三もなしは治定せぬ心なり、かし、曇れかし此外散にし、出にし、花をし見れば
の類切字にあらず皆助字也以上俳諧秘記釉珍抄埋木等

ぬ留切字の事

不のぬとは「ず」の一轉にて無の約りなる也「咲かぬ「散らぬ「聞かぬ「道あらはれぬ「行やらぬ「花さかぬ「拂はぬ是の類不に通ふを不のぬといふ切れぬなり
畢のぬとは既に成畢へる也「なりぬは成往「たえぬは絶往「しりぬは知往「花ちりぬ「鳥啼きぬ「月晴りぬ此の如きにて切れる畢のぬといふ
かくれぬとは「さえぬ「おきぬ此の如きの類は兩方へいはるゝをかくれぬといふ
エケセテチヘメレ此類不のぬ畢のぬ分かたし句意に心付へし
「きえぬ「消ぬ「うせぬ「はてぬ「寢ぬ「經ぬ「とめぬ「とれぬ「來ぬ「居ぬ「見ぬ「干ぬ「似ぬ此十三のぬの字不ぬ畢ぬ紛はしき也

證句　古足袋を四十に足を踏込ぬ
山寺の涅槃を過ぬ花さかり
また過ぬ峯の千部の蟬の聲

○
雪ふりて道あらはれぬ冬の山
雪きえて道あらはれぬ春の山
是は畢ぬとて切りたる也ぬの分別あるへし又言葉によりて切れさるもあるへし以上櫻戸、釉珍抄

一字はね切の事、

西行の庵もあらん花の庭
蕊の來て染つらん草の餅

如此ウに通ふは皆一字はね也「あかゝらん「はやからん此類いか程もあるへし又らの字付て聞分かたきものもありおして知るへし「らんは推量疑の詞也行末をおし量りて疑ふ詞也直ちに其事を疑ふには上にやの字等の指辭あり其詞を結ふ也「けん「なん「せん「みん一字はね是には切字なくても不苦
さしのらんとは治定したる所をはねるをいふ也「物を見つけ「聞つけたる所をはねる也「霜やみん「あすもねん「花を見ん此はね字切字也「霜とみん「花と見ん「山と見んなとゝ體にはねたるは不切「花とみんする「霜と見んするといふ故也
三字はねは多く連歌にありて初心の好ましき也「てん「ては助字にして心なし「けん治定して詞をゆるめたる也「れんれうと治定したる詞也「せんはせうといふ心也、やらは「やらんの略也「ならはならはの略言也全書

發句十八躰切の事

發句十八躰引てには幻住庵俳秘

挨拶切　中之切　自他切　無名切　玄妙切
二字切　三字切　二段切　三段切　に廻し
を廻し　大廻し　下知切　心切　句讀切
押字　抱字　重字切

挨拶切　いさゝらば雪見にころふ所まて

右挨拶は他に對するの一にして挨を天とし拶を地とし
ていさゝらはは天也雪見にころふは地也すへて此類上
下の言葉主客の隔てを以て一句の切とす是れ挨拶也

中の切　猫の戀やむとき聞の　朧　月

右猫の戀やむは言明也朧月は立春後にして物と物との
七文字の中にて心言葉ともに替るを中の切といふ也

自他切　人に家を買はせて我はとし忘

右自他は物々皆自他なりといへども就中事隔りて人に
家はと轉する所際立たる躰にて自他なり

發句に自他切なくて自他の違へるを嫌ふ

世を捨て樂しき菊の翁かな

此句に翁といへるは己か上とは聞へす菊作りの翁を
他より見てよめると聞ゆ然らは樂しさうなりといは
ては聞えす樂しきとは自らの上ならてはいふましき
詞なれは自他の混合せる者也又

足もとの蛇みて寒し茶摘妹

此句も茶摘妹を他より見ていへる者なれは寒けなり
といはては叶ふへからす二句は作法抄

無名切　咲き亂す桃の中よりはつ　櫻

右無名は一句の立所なく何を切字とも用られすして吟
聲に切あるを無名といふ其心は咲亂すも咲終るなるへ
し終ると五文字に置て坐の句初櫻と綴るは理に落ち作
意薄かるへしさるを亂すと心を隱くして無名となれり

玄妙切　春もやゝけしきとゝのふ月と梅

右玄は玄也妙にして心言葉も及はす詩に云歡見庭前梅
與松なとかへして謂る心や含る是玄妙也

連歌玄妙の發句に

松白し嵐や雪に霞むらん
水寒し山や雪より詠むらん
月細し桂や茂り隱すらん
名そ高き月や桂をおりつらん

右しそやの分別と云是也はね申す内に切字三つあり
現在のしやの字らん留り以上三つあり又その字入に
てもやと切りはねても同玄妙の發句なり是によりて
しそやのてにはとは申す也

きのふより山の端遠し霞むらん（過去・現在・未來）

此發句も玄妙也以上連歌句中（現在・下知）

二字切　秋冷し手ことにむけやうり茄子

右現在未來の隔ありて此二つ等しからす冷しは現在むけやは下知にして未いたらす此類二字切といふ

折る人は花にうらみん風もなし
花や引かへる袖みぬこかけかな

右發句うらみん、もなし、これ二字切なり又や哉是二つ同前

三字切　子供らよ蜂貝咲きぬ瓜むかん（過去の下知）（現在のぬ也）（未來也）

右子供らよは呼終て過去の下知也蜂貝咲きぬは現在のぬ也瓜むかんは催して未た至らす此時は過現未各心替て現在を切となし過未を粧といふ總して過去は切れす一つの未來は切に用る也

かいて見よ何の香もなし梅の花

梅花清香の外汚穢の匂ひなきといふ心也たとへは見渡せは雪はと黑き物はなしといふと同意也雪の白きに對する物なきといふこと也二字切三字切の格也秘記

二段切　櫻かな小町か姉の名は知らす

右櫻に小町と決定の二ッを哉なくしていへは花櫻小町か姉の名はしらすと心詞分るへし是二段切也

元日は嬉し二日はおもしろし
是も意二ッに分る作なり必切字あるなしに抱はらぬなり

三段切　目に青葉山ほとゝきす初松魚

右目に耳に口にといへる心を五文字に含て三段の切となれり句意此三ッに働く

梅若菜鞠子の宿のとろゝ汁

梅白く若菜の青き色立也偖鞠子にはとろゝ汁も有て旅中の景物を數へたる句意也風物多き中にとろゝ汁とは俳諧の寂也深く味ふへし（葛藤の卷）

連歌に三名切とも云

花はひも柳は髮を時津風
さみたれは峯の松風谷の水

此柳と時津風と正しき物二ッ入るによりて五文字ともに三段の切字とは申なり又峯と谷と五文字ともに以上三つなりさてこそ三段切とは申候はめを廻し　あをくてもあるへきものを唐辛

右此切は心に赤くといへる餘情ををの字に含て下の唐辛と轉する所少なけれとも上へかへして切侍るなりを に底心なけれは切れす殊に裾枯なといへる病句也

を廻しは上にさへといひて下にをと押へ侍る也二ッ物をくらへて云ふにてとまる也一つにてもとまるは心に今一つ用ひてする也秘記

に廻し　柚の花に昔をしのふ料理の間

右に廻しはものゝ餘情の強く餘りて一句止らす冠へ戻るをにと押へてしかも其にの假名にてことを廣くもてなすたとへは

桐の木に鶉啼なる屏の内

といへる句同し

大廻し連歌にあなたうと春日のみかく玉津島

といふ句を出せり然れとも今來上手の沙汰に證句に不叶といへり其故いかんとなれは上五文字より中の七文字をのけてあなたうと玉津島とまはり又下より玉津島あなたうともまはる故に大廻しといへり然れとも中の七文字下の五文字へみかく玉とつゝく故に今來の好士先輩何れもみな〳〵不叶と難せられたりとかや俳諧には

たまりはせぬたまりはいたさぬ花の露

あれを見てみかく詩歌の月の顔

右はたまりはせぬ花の露花の露たまりはせぬあれを見て月の顔月の顔あれを見てとまはるなり中の七文字を隔てまはる故に大廻しとは云小廻しといふ切字ある故に大の字を付たる也

を廻し切字の事小廻しとも云

兎口さへえくぼに見るを花の顔

戀に泣我さへあるをしかの聲

右中の七文字より上の五文字へまはるなり故に小廻しと云殘してにおはといふは切字をいひ殘すを添て聞くなり

散る花に狂句もあらは寺の庭

右は狂句もあらはいかに面白からんと入て聞くなりみな〳〵如斯なるへし

積りやせぬ積りやはせぬ花の雪

つもりはせぬ花の雪とまはる也大廻切不好事也

下知切　むかし聞け秩父殿さへ角力取

右下知は聞け云へ取れ等の類頭立る氣色にして切れり貴人高位の人に對して綴る事なかれ

出よ　染め出よ花の木のめの春の雨

つくせ　染め盡くせ紅葉むらこの片時雨

まて　匂ひ出てはらふ袖まて雪の梅

ふけ　吹け嵐花なきはるの夏木立

こほれ　飜れたゝさなから上に水の雪

思ふな　咲かぬ間と思ふな花を春の雲

め　梅か香をふかは身にしめ朝の風

ちらせ　見よ　かすめ月

心切　秋かせに折れて悲しき桑の杖

右心は物々に移るといへとも秋風の冷しさに仙居の桑の杖我なくしてもろきかたち心詞分れてしかも睦ましき是心の切也此類多し

十七字のテニヲハは常にして十八十九テニハといふは發句のあとへ一字二字入て聞く句也尤も心切ともいふ也秘記

句讀切　わすれすは小夜の中山にて凉め

右句讀は未來の物を現在に取越し無き物に指南して吟聲等しき假名にて轉する所を句讀の切といふ

句切れ歌といふ事あり季吟俳諧の句に付句背まあをなはたゝ松はかり紅葉して

句切れ歌とは後人の名目なり歌にわかれテニハといふものなり秘記

押字　何の木の花ともしらす匂ひかな

右押字はのとのゝ狹に紛はしき切なり是は上にて押へ下にてうき一句切けり

抱字　夕顔や秋はいろ〳〵の瓢かな

右此やは切也併し五文字の言語ふかひ無ふして答へすざるを秋はと抱へて一句分るへし哉は浮やにて切れす秋の句なり過去の花を思ひ出て一面に白かりけるもと今日を生すされはや哉の法又正し芭蕉の掟に

霧や海空に舟とふ一葉かな

花や咲句ふ雲降月夜かな

此兩句疑ひの。やに非らす霞のことを言て空の海花や咲雲のふる理更に不可叶是を捨やといふへし初心の人すへからすと也

重字切　奈良七重七堂伽藍八重さくら

右重字は島根に吉野によしのゝと言葉重古代は重說の切ともいへり以上幻住庵俳秘

發句眞行草の事

發句に眞行草あり眞の發句は第一題を撰ふへし竪題「和歌題のこと」なるへし言葉書前書等もなく題を詞入て一曲秀逸さひ細味備はりたる句を云ふ尤も正確体なり横題「俳諧題のこと」の句にも又眞の格あり是れ行の眞なるへし行の中の眞あり行の中の行あり句を以て爰に辨す

眞　振賣の雁あはれなりゑひす講横題

象潟や雨に西施か合歡の花

象は百獸の長西施は三千第一の美人也是を以て是に對し能女の少しなやめる形を書しを思合せ眞の体とす余情誠に紙毫にあまる

滑稽傳に一代の秀逸は題を撰ふと書けりしも眞の發句のことなり

川音寒しみよしのゝ春

かね遠き岩のかけみち暮そめて

心詞のかけ合たるを眞といふ一坐の内に其心得あるへし袖珍抄

行　ゑひす講酢賣りに袴着せにけり

振賣の雁は芭蕉の本情より出て正風至極の城郭なり此哀れを見出されたるは眞の句也

又酢賣に袴着せたる流行にして眞の都を飛ひ出て伏見大津遊迄も出張してせられたり是行也

たとへ横題たりとも眞の句あるへし眞の竪題の句なりとても行の句あるへし眞行の境工夫あるへき事なり

道端の木槿は馬にくはれけり

人の庭院なとへ生せはかゝるわさも有まし鯨濱牛道の片鄙に生るゝ人と京師に育つ人等その生涯の得失を感す是則行也

我身の上と更におもはす

閨にふる雪にわられの音なくて

大かたはり合たるを行といふ眞行草一坐の内に其心得あるへし袖珍抄

草　此わたり目に見ゆる者は皆凉し

此句はかり聞く時は凉の題なり然れは皆暑しとも寒しとも動くなりかやうの句を同て師説なしの出放題をいふ族世上に多し此句は美濃國長良川にて十八樓の記を書たる其文の留りに置き給ふ句也故に皆凉しの詞よく居りたり是草の格也能く熟考して眞草の境を知るへし

景清も花見の坐には七兵衛

草は走にしてはしるの象句も意も共に草也

あしたの雲の跡をこそとへ

はなれたるこまの渡りの里の名に

趣向はかり付たるを草といふ袖珍集

草の格といふは題を撰はす季節の言葉を入ていひ流す句なり

紀行挨拶の類は皆々前書詞書を以ていひ述ふ季節の詞の働をかまはす其場を題とする故也或は文なと書て其留りに發句を置く類皆々草の格也

宗養云心詞かけわひたるを眞といひ趣はかりを付るを草といひ大かたよりわひたるを行といふとかや埋木

親句疎句の事

歌に親句疎句の二体あり又連歌にも同しとそ是に應して俳諧にも又然り偖連歌と俳諧の差別を分るに連歌は親句俳諧は疎句なるへきか其親句体といふは詞やさはみえんにのとやかなるを云とそ疎句長高くはゝかるいろ色見へす姿詞に拘らす有のまゝなるを云とそされは貫之萬葉集の中に此二歌を撰らひて秀歌とかけり獨稽古

日くれたりいざ歸りなん子なくらん

その子の母も我をまつらん

酒かめに我身を入てひたさはや

ひしはいろにはほねはなるとも

又疎句の歌とて

鷺の居る池の汀の松ふりて

都の外のこゝちこそすれ

又連歌に

これやふせやにおふるはゝ木　と云前句に

いなつまの光りのうちの松の色　と付たり

親句の躰連歌に

氷のうへに波そ立ぬる　と云前句に

さゆる野の月のかけ野の花芒　良阿

是等の姿を云とそ猶委しくは奥に親句疎句と分たる所に申すへし但姿の親句心の親句姿の疎句心の疎句有るへし今こゝにたとへをとりて云は連歌俳諧を親疎に分るのみ

親句は有相、色相なり、近なり、文字なり、方便なり、淺なり、權なり、教なり、法門なり、音聲なり、事なり、輕なり、世諦なり、有爲なり、有漏なり、煩惱なり、迷議なり、生死なり、輪廻なり、

不了義經　是は三藏教の中に眞如實相中道等の實義をわかす阿含等の經なり又は半字經とも云たとはゝ嬰兒に文字を教るに偏と作りとを片々つゝ教るか如し

親句は有門小乘なり疎句は空門大乘なり而かはあれとも初心の時は淺より深さに入いたりては深きより淺きに出る是佛法諸道の用心肝要と云り

有相の歌道は無相の法身の歌道の應用也方便の權實おろそかに思ふへからす木の形像は大智より發る紙墨の經卷は法界より流るゝといへり一大事の因緣は小乘より出るともいへりされとも有所得の法を說て人を化度するは三千界の人の眼をぬくよりも科なりと說まことの道は有にも無にも親句にも疎句にもとゝまらす佛の御心のことく成へしとそ但かくいへは連歌ととたるやうに聞く人もあるへけれとも左には非らす唯姿をわくるのみ也

俳諧は放埒凡俗の物なりと嘲弄する樣やからもありそれらは皆道にいたらす不堪の人と云ところ成るへし今の俳諧はもと連歌の法式をかりて其味ひを父母として守ることなり猶耳ちかにたとへいはゝ連歌は能、俳諧は狂言其の能太夫堪能ならは尤可なり又狂言師堪能にて其能太夫不堪ならは能とて世にたてる程は有まし狂言と云とも堪能に於ては諸人心をよせて用ひましきや兎角連歌はいかいものとは一つにして今かく名の二つに分れるうへは連歌は連歌の意を守り俳諧は俳諧の姿を忘れさることよしとすへし何れの方にも外穢内淨外淨内穢と云事あるへし句は教、意は權、理は實、道に執ふかき人心をよせて猶深きことをさとりわきらむへし云々獨稽古

按るに親句は所謂眞の句作り也題中を離れすして寄くさり正しく云ひかためたる方也師說錄

親句と云は親しき詞にて五句をいひつゝる也猶正の親句、響の親句とて二種あり八重垣

正の親句と云は親しき詞にてつゝきたるをいふ譬は

わかれいぬるとつゞく山の峯とつゞく生る松とつゞく

立わかれいなはの山の峯に生る松とじき

かは今かへりこん

響の親句とは前の如く親しき詞にて續きたるにはあらて五音にてつゝきたる也是にも又二樣あり

五音相通　五音連聲是也

五音相通とはたとへは

みえぬまで　たちかくしけり

タチツテトの相通也五句の中いつれの句も同し

こゑすてふ、は山かくれのさはしかも

ハヒフヘホの通用也

音通の親句に

あら涼し鹿島の海の笹小舟

連聲のつゝきといふは譬は

はの〳〵と　をちのと山

トの假名を長くひけはヲの假名いつる也

是又五句のくさりいつこにても同し

連聲の親句に

元日やはれてすゝめのものかたり

正親句は言葉つゝきの縁をもて仕立る句法なり本歌の傳に同し幻住庵秘記

俳諧に

何の木の花ともしらす匂かな

此の如く綴る事なり又響親句は五音十聲の通ひをもて綴る也是も本歌に同し

聲すてふ葉山かくれの掉鹿も

はの〳〵見ゆる武藏野の原

○

松風のにほふとつみや濱の宮

いろあさやかに御手洗の蓮

俳諧に

むつかしき顔は家老に極まりて

正響合躰の時は上五文字を音通に綴り下を連聲にも綴る也又上を連聲にして下を音通に仕立ることもあり是は一句わからさる時の事と知るへし譬へは

はたかにはまた二月の嵐かな

右三品は奉納法樂のみに限らす祈禱夢想賀移徙此音通連聲なきを用ひす尤も連聲は大昔の格にして綴り難し名人たりとも能く心を付くへし以上全書

親句と云は神佛へ奉納又は祈禱新宅夢想幷に旅立等都て慎わる發句脇迄はアイウエヲの五十字を結ふへし是ゆゝしき也句の五七五の結目三節にあり一に意二詞に三に文字の響也

第一　意の親句

よしの山岑のさくらの散しより

花はわたなるものとこそしれ

かやうに山といひ峯と云櫻と云ひ又花と極む加樣に候は六義に非らす相通に非らすといへとも能歌なり

發句に　象潟や雨に西施か合歡の花

斯の如く百獸の長たる象といへる文字に三千第一の美人

をかけ合能女のなやめる姿に合歡の花の雨を帶たるを思ひ合彼の西施か吳に送られし愁を余情にふくめり又象潟は合歡の木多し是心の親句なり

第二　詞の親句

うつり行雲にあらしのこゑすなり
ちるかまささきのかつらきの山

此歌上は皆ひゝきの親句也まささきのかつらといふはいにしへよりのつゝき詞也依て響をとるに及はす是詞の親句也

第三　響の親句

よそにのみきかましものををとは河
わたるとなしにみなれそめけん

是響の親句也

俳諧の證句には

あなたふとをこの初日を御膝元
元日やはれてすゝめのものかたり
奉納
あら凉し鹿島の海の笹小舟
初午や田なら畑なら鍛冶やなら
首途
からたちのやかて其まゝ枳殼哉

是心の親句也からたちの花のやかて枳殼に成るといふを唐國の御進發目出度歸國有へしと響かせたり幽齋の名句也さるを譯しらぬ京童の季なし發句也とて其身は頓てきこく哉といひ傳侍る大なるひか事也下のつゝきてきこく哉と連綿して出陣には不吉の句也惣して祝儀の發句又脇の續き等皆假名にして讀つゝきて見るへし是一の心得也

恵方へと鶴ものしたる旭かな
敗居際から投るとし玉

右かなしきと脇へ續ていまはしき也親句の發句脇は

うたかふなうしはの花も浦の春
吹よる影もその月日貝

是は芭蕉翁二見文臺出來の頃裏書にし給ふこれ道の祝義の發句也近頃松村氏此文臺を得て開の賀莚に此脇あり首尾相調ひ秀吟たる故此證句とす

疎句は無相、空相なり、實なり、性字なり、遠なり、理なり、深なり、禪默止なり、工夫なり、正躰なり、宗なり重なり、義諧なり、無爲なり、先漏なり、菩提なり、悟なり、心なり、涅槃なり、遊戯なり

疎句は了義經　是は別教等の眞如實相中道等の實義を明す方等の諸教なり又は滿字經とも云嬰兒に文を教るに偏と作り一字になして教るか如し佛智見をあらはし給ふこと了義とは云なり不了義是に翻して知るへし

疎句は夫を取崩してゐふなく作りたる草体の句なり今平生に皆作する所なり尤も蕉門の平生に作する中にも眞の句体もあれと夫はやはり取崩して作する中にて眞の句体に

出來たる分也

今なす所は草体常にて中に取しまりけるものゐるは大方は行の体也眞の句は當世善惡を見分る人さへなく更に好て句作する輩もなし世の下りたる事かくの如し師説錄

疎句は平生躰の句也されと古人の言葉に疎句は親句に增れりといふ事ゐり是意は聲は人の許訪んに袴ならては參りかたし抔いひて日數經り不沙汰にならんよりは内々のさまにても不取敢訪侍れは其眞實先へ通し威儀調ひたるにおとらす發句もかくの如くたとへ連聲音通の句ならすとも取わへす眼前躰には神佛も納受まし〳〵眼に見へぬ鬼神をも和らくるといふも此事なり禮之用和爲貴といふ聖語もこもるへし口傳

親句は他流にいへる五音連聲等の事正風に子細なしたゞつつきからを思ふへしたとはゝ

露清しぬれて　梅か香や今朝は

なとの類ひはゐしゝ神祇奉納のみならす歳旦暮祝の吟皆此こゝろ得なり奉納にゐらさる神祇は其用なし釋教も奉納になすときは神祇と同しくつゝきからを思ふへし常々の釋教は其用なし

祝、贈答、餞別、留別、哀傷は尤も自他親疎をわきまふへし

祝贈答餞別留別哀傷すへて人に對しいふ句になそらへ句いひつかはすに子細ありたとはゝ

猶いく代長濱おゆめ春の鶴

かくいふときは正に其人を鶴にせし也

鶴とともに長濱おゆめ春の風

かくいふときは鶴に比して其人と鶴と別なりこれ蕉門のおしへなり一理萬通すへし寒栖

三ッ物の事

三物解　發句より第三迄を三つ物といふ脇に五体第三に二躰ゐり師によりて學ふへし

發句脇第三起定轉合の習ひゐり各詩の格式也起とは四時の景物に對して一物なき處に情を起し十七字に結ふ是れ發句也

定とは聲へは發句梅にせよ鶯にせよ其物に打添て或は場を定め時節を合せ發句に云殘たる所を補ふ也よつて請定るの心也

轉とは發句脇を一連の前句となし天地より人の生して萬物始たる如く又是より一起すれは附を微細にせす二句の懷ゆるやかに遠をよしとす

四句目は合の場なから百員歌仙の續きものなれは詩の格と違て爰に習ひゐり

詩の起定轉とは

薄暮層巒雲遶腰　傾盆一雨定明朝

老翁八十眉如雪　立拔溪邊獨木橋

此句の心は夕暮方立ならひたる山々の腰を雲のめくる風情なりよつて盆を傾けた程の雨か明朝降ふとなり是れ發句と腰の一情也第三は此山の日和癖を見覺たる八十の翁なりかくの如く發句腰の情を轉して景情二句つゝかは人に替り人情二句來たらは風景時節時分等に一轉する也猶古人の三つ物に工夫すへし

春　發句　脇　第三

若菜　春の雪　歸鳥

蒟蒻にけふは賣勝つ若菜かな

吹上らるゝ春の雪はな

歸る鴨かへらぬ鴨をさはたちて

梅　雉子　家普請

梅の香にのつと日の出る山路哉

所〳〵に雉子の啼たつ

家普請を春の手透にとりつきて

蕊　禮者　藪入

蕊に朝日さすなり竹格子

禮者うすらく春の靜さ

藪入の土產似合にこしらへて

夏

題知れす　水鷄　雨

そらまめの花さきにけり麥の緣

畦の水鷄のはしる溝川

上張を通さぬほとの雨ふりて

夏の月　門涼　時節

市中はものゝ匂ひや夏の月

暑し〳〵と門々の聲

二番草とりも果さす穗に出て

秋

蜻蛉　芦の穗　霧

蜻蛉の壁をかゝへる西日かな

潮落かゝる芦の穗の上

霧の外の鐘を隔つる松こみて

きり〳〵す　秋夜　居所

灰汁桶の雫やみけりきり〳〵す

油かすりて霄寢する秋

新畳敗ならしたる月影に

初茸　谷川　替地

初茸やまた日數へぬ秋の露

青き薄に濁る谷川

野分から居村の替地さたまりて

冬

初時雨　木の葉　旅人

蕊の羽もかひつくろひぬ初時雨

一と吹風の木の葉しつまる

股引の朝から濡る川越て

霜　橋　景情

霜に今行や北斗の星の前

笛の音こはる曉の橋

ひと番鶴の來て寢る松經りて

四句目より揚句までは三つ物と違て附句千變万化すること也 附合小鏡

歳旦三つ物　芭蕉曰天地人の三つ也歳旦は天意尤もよし脇尤地理也第三尤も人意也此を心得たる上はいか樣とも自由あるへし歳旦に限り三つ物といふ三の數火の形即ち陽を貯る祈禱也 俳諧祕記

三つ物先つ發句は元日なれは其ひゝく所をちらりと見付て脇は十五日までの季節なるへし又三ヶ月に渡る季節もあるへし柳、霞、陽炎の類なり一曲一作なくてなるまし只ぬらりとしたる句は尋常の俳諧になる歳旦は格別働入る事也

又第三の事大率三月の季節を心得へし必す早春の季節つかふへからす是非三月の季つかはれぬ時は三ヶ月に亘る季節にて凍解、春雨等の類其外いか程もあるへし

脇は句をかしこく働き第三はのひ〳〵と景曲あるへき事なり若し發句に景曲ならは第三世話事なるへし只三句に百韻千句の働とは此事なり勿論らしき所を專一と案するなり總して尋常の俳諧にも初春の發句に初春の第三はせぬ事也是第三句目打越す故也他の季之に准す 奥儀祕藏

歳旦三つ物脇てには留の句

着衣始うらを探らす大夫殿

俵かさねてなか戻りする

此脇にて文字ありて留りてにはなり第三むつかし

歳旦發句の習同三つ物の事　芭蕉口傳云く歳旦の句と云ふは元朝一天明初る時初ていふ句也二句としては歳旦ならす抑々日本は神國なれは神道一教を守るへきことなれとも片寄らぬは又和風の風儀なれは尤も有かたき事也秘密神道の奥儀は天子御一人しろしめし行せられは四民の末々は心ろに道に入るへき國風こそ尊とけれされはとて神道も廢れす正月元日より三日までを神代の風に祭りて家々の行事あり三ヶ日のうちは全く神道なる事顯然たり昔より俳諧歳旦の發句は自身の上を祝ふ事とはかり心得才覺に句作り禮を知らす非道をのみおもふ神は非禮をうけす必す不吉をいひ出して凶事にあやまり神罰を受る事恐るへし是正風體に非さる故也

當流案方の大事といふは先つ神國なる事を思ふ精誠穢を拂ひ心を正して其身一人の神となるへし中臣祓にも神と人との元の心とあれは其古へに精神なる所を見るへし屋を秡ひ衣服を改め躰を清め心を淨めて先つ第一に天下泰平國土安穩を祈るへし一天下の治世民安全の心を先と案して强ち秀逸を好むへからす只新らしき句をすへし少しにても古き句はめてたからす壁へは隨分結構なる扇にても持古したるは用ならす麁末なる御寺扇なりとも新らしきを正月物とするか如し只發句は手垢なくやす〳〵と句作り糎土器のことくわるへし是正風體也

五老井篇突集曰當時歳旦の格式しれる人稀也次第に師説もうとくなり行くこそ口惜けれ

只初春の季を入る迄にてはかつて歳旦にならぬ句のみ多し歳旦の字意をよく工夫し待らは仕損しなし歳旦の句二つ三つ記し出す族あり又歳旦帖に子の日二日三日なと題して出す人もあり師説いかゝ聞き證き侍る覺束なし遠國の歳旦なと交て出にも遠慮ありたきことか大津繪等の前書後代歳旦の格式是にて分明なり季の詞を結ふなとも時代の考へあるへし元日やといふうち平めたる詞抔は四五年過去たるへし歳旦道具等猶以て新古の差別あるへしと書けり此事見まかひあるへけれは荒增爰に註を加ふ歳旦の字意をよく工夫し侍らは仕損しはあるましと書けるまては右の師説にて明也歳旦二つ三つ出す族もありといへるは一とせ千那季由歳旦帳に子の日七草左義長の類を一句つゝ立發句にして出すへき旨相談に及ふとき師曰く無用なり時節あらさる句を前方より出す事せぬもの也歳旦の句年内に極め出すことは元日より早々板行なりかたき故に是非なくすることなり遠國の句交せて出す事遠慮ありたきことかと申されたり又大津繪等の前書をは

空の名殘をしまんと蕉友の
來ゝて酒興しけるに元日の
雲まて臥して曙見はつしけ
れは

二日にもぬかりはせしな花の春　芭蕉

二日は歳旦にならさるによりて充分の前書なり又

三日閉口題四日

大津繪の筆のはしめは何ほとけ　仝

是も題を前書にて斷りたり元日より三日までは神道なれは何佛の發句四日に題せられたり僧衆の禮も四日より始まるなり

歳旦は元朝明け初めたるより明はなれて迄なれは此所をいひ課せんとするに盡るなりよつて題を極る凡二三十もあるへし此題を以てするに皆歳旦に相叶ふ題なれは昔より題なしにはせぬ也然るを近年題なしに初といふ字さへ入れは歳旦と心得たるこそ口惜けれ又元日やといふ五文字平めなる詞故いひ古して一作なくてはつかはれす第一元日は一日に渡る題也其辨ひもなく元朝やとする句なとにも元日やとあり尤も師説をも知らぬ故也

元日に田毎の日こそ戀しけれ

田毎の日とは一作なり大曲なり信州姨捨山に田毎の月あり是を元日にかけ合されたり

元日や板倉殿も御めいにち　許六

板倉内膳正殿天草にて元日討死したまふこの句手柄なり句意口傳

元日や工夫して見るへその穴　孟遠

人に九穴あり皆々其役目あり予西國行脚の時豐後國日田

に年を迎へ終日隙にて元日一日は寢たりされは九穴の外腑はかり何の役目なけれは申出たり惣して一曲一手柄あらは過去といふ事あるへからす毛頭古きことなし奥儀秘蘊外或集拔

三物　是は千句の時乘日に發句より第三までを極め小短尺十枚に書つけて會席便宜の所に掛おくなり是を三物の短尺といふなり歳旦の祝義に發句より第三までつかうまつりて三物といふは件の義によれり今三物を三組九句有を三物といひ五組あるを五ッ物七組を七つ物なといふは來由を知らぬ俗說なり幾組ありとも三物といふへし俳諧名日抄

賦物の事

賦物の事昔は發句より揚句迄言葉に緣故を取て致せしか近來面はかり其後は第三迄當時發句はかり花の發句ならは「賦何鰹」とす是下賦と云花鰹とつゝく言葉鮪ならは壺也鰹の發句に「賦花何」とせは上賦と云　賦何鰹俳諧の連歌と書くへし蓬齋漫錄

上賦は山路を何路と取る也

下賦は山路を山何と取る也

一字露顯は　香を蚊　日を火　名を菜

二字反音は　花を繩　畏を繩　夏を綱　水を罪

三字中略は　あやめを雨　霞を紙　桂を唐

四字上下略は　鶯を杭　玉章を松　苗代を橋

ひのかな逆へとも此類苦しからすくひとは取かたし訓

あしゝロ　受

五字中三字略は　杜若を肩

三字上下略は　あやめは矢　霞を酢

上賦下賦の外俳言無くてもかまひ不申かまひ申といふは重秘を知らぬ人のいふこと也秘記

賦物の事六義風賦比興雅頌の一也則賦物の字を心はると讀む百韻の企體此一字より發る去る程にむさと取るへからす長頭丸も發句花なれは「花連歌俳諧」月なれは「月連歌に端書するなり

是も一字露顯の心持なり但し賦物を取る卷には其賦物を取ける面を可嫌又賦物の字五ヶ條の内下にありならは體を嫌ふへきなり

俳諧には五ヶの賦の字取る事稀なるへしさて其外賦物の文字收る事は千變萬化なるへしたとへは

賦何路連歌　俳諧なれは　賦何俳諧と置也此何の字置く心はなそ樣の心樣也と知るへし又發句に嵐と云字を思ひ入たらは其文字に隨ひ、賦山何連歌、俳諧には、賦何俳諧と置く也始は山路とつゝくやうに取る故に何の字上に置く是をうはふことを云なり

但し追善夢想の連歌俳諧には賦物なし其時は追善の連歌、夢想の連歌なとゝの文字を入て置へき俳諧には追善

の俳諧、夢想の俳諧と設てよし右の外一字露顕なと何にても思ひ寄の字を取るへし何の字大方上うはふなるへし五ヶの大事と云事は

山は伊勢　路は住吉　木は春日　船は玉津島　人は人麿　是なり 翁の掟

賦物　連歌の諸抄物に其品委しく見へたり俳諧には賦物を用ふる事なければ今是をしるさす經文名號は賦物の類なから俳諧にも用ひ來れり端作の書やうかはりめあり 名目抄

六義の事 六種とも云

俳の六義は連歌に預からす歌道六義也

風、賦、比、興、雅、頌

風雅頌を經となし賦比興を緯となせる、詩歌に六義といふ事は漢土には詩經に起り我朝には古今集に廣まり連歌も俳諧も其跡をおへり六義の説は和漢ともに分明ならす云々

風雅頌の三經には世界の人理を諷諭して關雎に哀樂をとゝなふるか如く王侯士民の心をはつかしめ

賦比興の三緯には眼界の景物を朗詠して論語に文質を交しゆるか如く鳥獸草木の名を知らしむるに其地に其人を得る時は遊山翫水の風をとゝなへ理世撫民の優情をのふれは詩歌は王者の弄ひにして天下の治りとはなれるなるへし

俳諧の六義には地利と人和の二用より詩歌の名目をゆり合せて其名に其用を知る時は引句引歌によらす六種に六色の當用は和訓のあやに知るへき也

風はそへ歌也よそへよめるなり定家は色の見えぬを其品よせてあらはるゝ也と云

風はそへうた也定家郷説には風といふ物はその色見えす物によせあはせて其品あらはるゝためし也

先いはへ梅をこゝろの冬こもり

風は諷諭、風言はやり副歌と訓す、風は多く里巷歌謠の作より出て男女相共に詠歌して各々其情を謂ふ周南召南は親しく文王の化を破る云々然れは其國其人の風俗の善惡を風謠はやりに依副そへて差しむる故に風化と云

風化風俗上所化曰風、下所習曰俗以風化下、下以風刺上

俳諧には諭言さとしとも訓すへきや

賦は本意なり、鋪なり、故に賦をかそへ歌と云ふなり賦は畳る也

賦はかそへうた定家郷いふ心を一扁にとゝめさるの義也心をくはる也かそふる也つくす也

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁

賦は鋪なり畳也算言算へ歌とあり眼前の物を算へ並へて直地に姿情を演るの謂なり

定家郷の釋文にも賦は歌人の本意なりと四季に月雪の變相を詠し花鳥の優游を知れとなり

賦は殊に文章の惣名なり

比はなずらへ也たくらへとも、物の物に似たる也、譬喩也たとへなり、そへ歌とは顯藏の違ひあり、似たる事にて少違也

比は比喩準言（ならへ）（そへ）準へ歌なり托物比興と詩人歌人の優情を拵へて鳥にも木にも物を言はす類なり比と興とは姿情に先後の心得ありて比は物を取て其姿に準へ興は物に托て其情を起す物を催すと物に催るゝと自他の差別を知るへきなり

比はなそらへうた定家郷はくらへ歌ともよむへき也

いさめるや心の駒のかけをとり

興はたとへ歌なり蓮心院殿聞書にそへうたはかくれ、たとへうたはあらはるゝ也

盆のところ月はくまなく花さかり

興は誘引の義、誘と言喩歌と訓す興の一字は和漢ともに分明ならす論語の陽貨篇に子路に詩經の風流を勸て詩は以て可興（シレ）とは四季の月雪花鳥に誘れて優游の情を興せとの謂なり興は決して遊興の興と註すへし

雅は物の成就して調ふたる體なり、たゝこと歌也、言雅意雅なり、意雅は治定なき體なり、言雅は言葉にあらはして、一句を作るなり、雅は正しきなり

雅はこゝことうた定家郷説に思ふことを少しもかたまることなし只一筋に始より終までいひ下す也

春雨のけふはかりとて降にけり

雅は正なり眞なり、正言（たし）と訓す歌には眞言（こと）（たと）歌と訓す風雅時二體は詩經の成る所にして風は虚を以て天に起り雅は實を以て地に止る故に俳家に風雅虚實の二用と見て風に懲惡の虚を用い雅には勸善の實を用れは雅には正直の意を汲て公け言とも訓すへきや異名同體の例

頌はいはひ歌なり世を譽め、神に告るなり、祝儀なりつき出して褒美したるは讃頌の躰なり、只神明に告る心、奉納發句に入躰也

頌はいわゐうた定家郷説に神明につくる心ある也

たい〳〵や小判ならへて菊の花

頌は稱なり美なり祝言と訓す祝歌と訓す詩序には雅頌は一體の樣なれと雅には國家の諷諫を含み頌には君父の壽量を祝して神に告る意は勿論にや雅頌の二用たる外には姿「莊密」を備へて内には情「和寛」を含みて詩歌の優美を調へし云々

夢想の事

芭蕉曰夢想の俳諧に呼かけ附とて嫌ふ事あり哉留の發句に敗島と付る類せぬ事なり「かなしきと呼かける故也又玉柳忌むへし「魂やなきといふに通ふ故也わたまし其外賀の俳諧此心得あるへし

夢想の俳諧には夢といふ字をせさる古來の傳へなり帝に

門宮にみやこ戸に上戸歌に短冊を嫌ふの類のさもあらんか伊駒に馬、むまに鞍馬は連歌に面を嫌ふ故俳諧には七句なり七句とは同し折にての事なり折かはりては七句の物も三句なり一坐に四の物もとより一とつ二つの物は皆折をかへてよし七句の物は五句五句は三句にゆるし二つの物は四つなりといへとも輕重あるへき事也餘はなすらへてしるへし

大全はなひ夢想とは夢中に得たる句をいふ夢想ひらきの會は習あることなり名目抄

即興の事

即興とは（遊山翫水月見花見に則座の興を詠するを云ふ）

或は題を出しても詠し又は題なしに眼前の景望面白き心を詠する也題の歌ならは常の題歌にかはることなし但し目前の景氣の其題に叶ふへき題を出すことなれは隨分目前の景を寄てよむへき也

題なしの歌ならは猶以目前の景氣より外の事詠へからす

題無き歌はいつれも詞書あるへし總て題の歌も題なしの歌も山に遊ひて詠せは其山の面白き心野ならは其野の面白き心をいか程ともいひはやすへし其山に居なから外所の海山を思ひ遣るやうの事あるへからす但し夫れも、春の山の花を見るに其山の花を擧てよし野初瀬も及はしといひ、須磨明石の月を見て姥捨更科も及はしなといふは苦しからす此山を捨てかしこの山を擧るやうのこと有ま

しき也

名所の山ならは勿論其名を詠すへしたとひ其所にいひならはしたる名ありとも古歌に詠したる證例なきは俗名所とて詠まぬこと也只山ならは山の景氣川ならは川の景氣はかりを詠すへし

神社佛寺にて詠するには其社其寺の外他の寺社詠すへからす

譬へは北野に詣うて法樂の歌奉るに外の御神を申やうの事なり北野にては其御神の神德をあふき御めくみを忝くするよしをいひ諸願成就を祈り奉るよしを申也北野とも詠し又北野と申さてたゝ神垣神のみむろみつのひろまへなとはかり申ても苦しからす

松梅神木なれは寄て詠すへしいつこにても此詠格也又佛寺はたとへは清水に詣て詠せは大悲の御惠をあふき又普門品の中の要文の心なとにて詠すへし

又人の亭に至て其庭の月花の興をいふにも其庭前の面白きを擧るを肝要とす外の海山の事をいふへからす又主への挨拶の心專とすへし祝儀の心あるは猶よしとす（挨拶の註別にあり）又さしあてゝ挨拶の心なくとも月花の面白き心を詠めは其宿の花やとの月を擧るなれは自然に挨拶こもれり隨分即興の歌は早きを專とす面白からすとも先そうそくに出すへし遲けれは無興なる也望たる人も迷惑なる物也

挨拶の事

挨拶句とは（即興に誌せる如く人の亭に至りて其庭の月花の興を云ふにも其庭前の面白きを賞るを即興の肝要とす外の海山の事を云ふへからす又主へ挨拶の心專とすへし祝儀の心あるは猶以てよしとす）前にも誌るす如く人の亭に至りて即興を詠するに或は花の興あらは幾會か此宿の花に心を染めて外を求めす詠らんとも又は花見にと此やとのこのもとに立よる人も主とをもに幾會なれ見んとも心あるやとの花は春ことに問人絶えすみはやせは花も嬉しと思ふらんとも又月の興ならは千々の秋月に主も面かはりせてなれみむとも又なくて澄月影も此やとからいと丶光そふなとも詠へし其外なに事も其時の興に隨ひて相應の挨拶を外すへからす總して挨拶當座の時宜和歌の肝心とする事也

いか程の秀歌秀句なりとも時宜にそむきて不挨拶なる歌發句は詮なし古來の先哲も挨拶を忘るへからすと呉〳〵釋し玉へり

業平朝臣か人の前栽に菊うゑける所にて

うへしうへは秋なき時やさりすらん
はなこそちらめねさへかれめや

此歌挨拶深き歌にて挨拶の事には引出さる丶歌なり又挨拶と云にも大躰程よきかよし餘りにめにたち耳にかゝる挨拶は却て慇懃卑陋とて嫌ふ事也能く思ふへき事とそ

又人の亭にて興行不時に一會備すをいふなとあらんには兼題當座或は兼題はかりにて當座なき事もあるへし兼題は祝の題又は折に觸れたる景物の題もあるへし其時の興行の樣によるへし

祝の題ならは打まかせて其やとを祝ひ主を祝ふ心もよし又松竹の題ならは其やとの松竹になして祝の心を詠へし或は月花ならは其やとの月花を賞る心又は只月花のうへはかりをおもしろくよみはやすへし所詮其時の興行のさまにより題の趣きによりて心遣ひあるへし

當座は十首十五首二十首三十首の組題なるへしされは其やとのことのみは詠かたけれはかけはなちに外の名所又野山の景物をも詠へし常々の會の如し爰に大事の習ひあり

兼題は挨拶を詠せさすへき爲に或は祝の題松竹の題を出せは右に誌す如くとり〳〵に挨拶の心あるへし

當座は挨拶にかゝはらさる組題なれは挨拶の心あるへからす軸の歌にて挨拶はする也

又春の組題なとにて題の中に花あり幸其庭に花もあらはこれらにいさゝか心得あるへしされと軸の歌は其座宗匠又貴人なとあらは其人の詠する事也又軸なとにあらねとこと題にても挨拶を詠するは其日の上客又ハ賞翫の人なとのする事也然るをさしてもなき題にて末座の人なとの

さしいてかましく挨拶したるかたはらいたき物也吳々も加様の心遣ひ大事也

又兼題も當座も隨分禁忌のこと亭主方へさし合のことなきやうにすへし、ねたゆる庭、人とはぬやと、淋しき庭あれたる庭なとかやうの類故らに多し心をつくへし其外亭主かたなとふとさし合の事なとある物也

昔其ためしなきにあらす中納言行平芹河行幸に大たからひの役にて花やかなる狩裝束なと着して出られしとき

おきなさひ人なとかめそかり衣
けふはかりとそたつも鳴なる

其時行平の年老ぬれは我身のよはひを思ひてよみ給へとも帝御年五十七になり給へは御身のうへにきゝおはせまし〳〵みけしきあしかりしとなんされは今以老人の亭の會にて老なとゝいふ事心遣ひ有るへし

又禁裏御會に行路柳といふ題にて定家卿

道のへの野原の柳もへ初て
哀おもひのけふりくらへや

此歌不吉なりとて勅勘ありしと也

人の新宅の會なとに「火」「煙」「いつる日なとやうのこと詠まぬやう心得あるへし

又西三條逍遙院殿定家卿正筆の天福本のいせ物語を今川氏親へ遣はされし時

これをたに今ははなれていせの海士の

舟なかしたるこゝちこそすれ

といふ歌をそへられたり是は古今に伊勢か七條后にをくり奉りし時の哀傷の長短の詞也後に聞給へは氏親の母は北川殿といひて京の伊勢守の娘にて其比尼にておはしけれはいせの海士の舟なかしたるかた〳〵さし合のことなりとて一生御後悔ありしとなり

今以曠かましき興行の會には其家の家識名字等まて心をつくへきこと也かやうの例かす多し古來の先哲たに如此まして此比の人よく〳〵心をつけさりせは不挨拶の事多かるへし

挨拶切の發句に

いざゝらは雪見にころふ所まて　芭蕉

右挨拶は他に對するの一つにして挨を天となし拶を地としていざゝらはは天也雪見にころふは地也すへて此類上下の言葉主客の隔てを以て一句の切とする是れ挨拶なり

挨拶の發句に

わかれたり逢ふたり春は霞んたり
燕のくせに狂ひこそすれ　龍師

此脇の「のゝ字要用也此發句「別れたり逢たり春は霞んたり春は霞んたりと「てには重なりてかろくて重き句なれは此脇は又「てにはに輕るかよしと也さてまた燕もとか燕はとか有るへきを燕の風とせしは燕のやうに狂ふといふ事にして此「のの字要用也「ものとか「はとかすれは

燕の脇になる也此さかゐ考ふへくさて此「のの字にて此句脇の位に成たりいさゝかのてにはに脇の信魂つまひらかなる事可感なり話十二夜の三

兼題の事

兼題とは會の數日前より出す題なれは兼題といふ各一題にて詠す是を通題といふ宗匠の批判をうけて後いつれも懐紙に認むる也、認めやう流にならひあり尋きくへし紙は地下人はいつれも小應に認むる法也、女の懐紙は薄葉一かさねにちらし書也書樣習ひあり耕雲口傳に云當座出題の時は餘念に渡らす是を案するによりて中々よろしきこといてくる也八重垣集

兼題の歌は餘日あるを頼みて何時にてもと覩法して打過る程に期日近付て慌ろき案するによりて當座の句よりをとりたるあり故只題を取りたらん初め當座の思ひをなし能々案したくむへきにこそと云々八重垣

兼題書方の事　會を催さんとしては兼日に題を作者に分ち遣す也其の題の書方五首十首二十首までは短冊一枚に二行又三行にも認むるなり二十首より多きは短冊に及はす短冊は三つに折て二行の内に題を書き一折に左右に分て會日と亭主の名を書く也

一首題は折目へかけてかくへし米三日基定亭

二首題は二行に書くへし題の並ふは嫌ふなり

又一折に一題つゝかきたるもあり

三首は三行に書くへし五、七、十、二十首までは一紙なり

右の如く書て三つに折短冊に添て杉原にて上包をして出すへし近世勸進の短冊上包に何懐舊何月何日取重なとゝかくは更に無稽の至りなり上包を白紙にして出すは作者に名を書すへき爲なり、上包は題書したるものは下の折に作者名をしたゝむへし但異例なり千鳥の跡

當座の事　運座とも云

當座運座は會席にのそみて則坐に詠すれは當坐と云ふ十首題十五題二十首題三十首題五十首題にいたる迄人數に合せて但題を用ゆ各短冊に認むる也

當座は則席の歌にて程なけれは強よく案すへからす強ゐて案しぬれは案しまとひて出來せす當惑するもの也先わしくともさら〳〵と詠すへし早く出來たりとも人より先に詠草認むへからすまして出すへからす達者顔なるもいと見苦し又題をとりてその儘書つくるは兼て識當たる中の句にやとも思はれ又さそ句わしかるへしと推せられてかたはらいたき物也尤心つかひすへし

嘖りましき會には歌いてきなはたとひ其座に宗匠ある會にてもあれ先内々にて功者の人にひそかに見せ合すへし句の善惡は時によることなれはいかゝせん若正體なき事

か又其座にさし合あるかかた〳〵卒爾なきやを能々吟味して其後清書して宗匠にみせて批判を受へし衆議の會には此心つかひ猶以て也

衆議とは宗匠なくて衆中歌合評議するを衆議と云

人の新宅の會祝義の會興行の會なるには不吉の事禁忌の詞亭主方に不挨拶なる事無樣に心つかひして人にもみせ合すへしいにしへもみせ合て難をのそきたる例おほし無名抄に數〳〵しるされたり

當座短冊は大躰探り題なれは（探題とは短冊を硯ふたに並へて人丸影前にあるを次第にさしよりていつれにても探りあたれるをとる也）さしよりていつれにても探り得たるを懐中して座にかへる也短冊を影前にてひらきみるへからす取かゆへからすさて座にかへり料紙をとり硯をなをして後短冊を懐中より取りいたし題をみて詠草のはしに題を書付て詠草の折目へ短冊をさし入詠草を下に置き上に硯を置て句を案すへし

當座の卷頭卷軸は一座の宗匠又は貴人先輩の人詠すること也よつて探題の時も卷頭卷軸は別に短冊を並へたる上に又二枚ならへて横さまに置く事もあり探題の時上の二枚はとるへからす又當躰の會には卷頭卷軸ともに一つにをしませて重ぬる事あれは若し取り當りなは宗匠か又は其坐の貴人先輩なとに詠せしるへきよし難く辭退すへしさらぬ躰にてをしたまりゐるへからす若し宗匠なとの其儘詠すへきよしさしつ再三に及はゝ詠すへし以上八重垣集

卷頭卷軸讀方の事

卷頭卷軸の歌は隨分安らかに長高聊もうれはしき詞述懐懐舊なとの心なきやうに心つかひすへしたとへは

うき　つらき　かなしき　なみた　さひしき　物思ふ
わひしき　くるしき　はかなき　世をいとふ　さた
めなき　われたるやと　ねたゆる　なとの詞さるへし

卷軸の歌は題大かた祝、神祇、松、鶴、龜、竹なとの題なれは自ら祝の心を詠する也尤禁忌の詞等さるへし卷頭の如し又時によりて述懐懐舊釋教なとの軸もあるへし其時によつて夫々の心然るへし

祝の心詠らるへき題ならは祝の題ならすとも詠すへし祝の心詠かたき題にしゐて祝を讀んとするもかへつてわしくさやうの題は常の如く詠すへし

懐舊釋教なとは人の遠忌とふらひの會なるへけれは其人の挨拶になる心よし又遠忌なとには祝の軸もあるへしそれは打まかせて祝の心然るへし猶行末を祝ふこゝろなともあるへし總して卷頭には祝の心は詠かたき物なれはたゝ長高く詠すへし

軸には隨分祝の心を專にして一躰こまやかに詠へきことなり八重垣集

皮肉骨の事

骨はさひからみ細みさひしみ風雅の骨也
皮肉は匂ひひゝきしをり風情は風雅の皮肉也皮肉骨も句に
よりて皮肉の勝ものゝ骨の勝ものゝ骨直旨傳につさて
見るへし師說錄

骨のみにして皮肉なきもの皮肉のみにて骨なきものともに
病句なり所詮句作成就の上の論なれは句作成て三品滿足
せぬならは有りて益なし速に捨へし三つの物句ことに備
らすんは有へからす

皮　埋木に
荷に念入るゝおほはりのしゆく
木膳はいとそさうなるはたこにて

奇垣集に
芦の穗わたにほの字との字に
秋の部の亂曲揃くりかへし

雪の桑に
霰の玉をふるふ蠶の毛
とやこもる鵜飼の宿に冬の來て

肉　埋木に
普賢の前によめる法華經
蕊の聲はさくらのこちらにて

寄垣集に
たまれはたまる物てこそあれ
屑(スリクズ)の金屋いてとる古たゝみ

雪の桑に
ちまたの神に祈るかねこと
御供してわてなき我も忍ふらん

骨　埋木に
からり〳〵とからめきそする
山椒と胡椒と入てすりこはち

寄垣集に
又まくらゆふ二の丸の聲

都鳥富士はうしろに影黑き

雪の桑に
我手に脉を大事からるゝ
二度呼の内儀は今度屋敷から

皮肉骨と三つに分けたる體予芭蕉年來是を工夫するに一句々
々に皮肉骨瓠ふ物なり骨をせんと考へ皮をなさんと思ひ
肉をつけんとおもふは此道の大煩ひ也自然と滿足の俳諧
は調ひ未練の人に敎ても埒せぬ事也此境界修行すへし眞
草行も同斷なり師說錄

皮肉骨のこと野々口立圃の雜談に古きを以て師とせよとは
和歌の道ならしされと連歌も俳諧も時代に隨て替りめあ
り先つ付心を知り次に句からを思ふへし前句によらさる
は獨相撲をとり中よからぬ人々の坐敷に並ふ如し去年の
曆も見所にこそより候へけれと也是を思ひはかるに、書
體にも皮肉骨の三味といふ事を立て道風行成佐理を三跡
と定む、道風は骨を書、行成は肉を書、佐理は皮を書强
きは骨、愛あるは肉、やさしきは皮也三體の內には骨を
以て本體とすといへり寄垣集

序破急の事

芭蕉曰初表の句序の序同裏より二の折まて序三の折破名殘
の折急なり初折二の折位に三の折にてみたれて名殘の折
にてさら〳〵と申へし是百韻の法なり今時の旨俳初折に
けやけき事をいひ名殘の折にておもたくるしく位有事を

云ひ出して判を乞ふ長短の點を引まことに一盲衆盲を引とやいはん

同書に御傘はなひの說の外誰か所にてはこれを人倫にせすこれか他にては居所にせすなと丶まち〳〵のことをいふ其許し用るもの何者そ宗祇宗鑑貞德立圃なとのかすは、きをなめてひと丶なりし風俳ならすや連歌に於ては新式無言抄至寶抄なと俳諧にては御傘はなひ等の法度を能守るへしたとひ過ちありとも先師のこ丶ろへ有ことなるへしと思ひて私の見をなすへからす

三句の渡りのことおもうかろく花に實にして行へし行やうといふも長途の海になり山になり野になり里になりするか如し戀の句多く同し心になる故二句にて捨るかよし同し心ならぬは此限にあらす

神祇釋教無常哀傷三句まて續けとも一句にても苦しからぬは同句二句續きたる跡はしにく候三句へ歸ることをおそれてなり戀一句にて捨さるはやむめ戀とて不吉成故也見渡し留に同字せぬかよし浦山里水木草抔の類一二を擧て記す三句四句ほとにて手爾葉留見よし懷紙つらとて肝要なり

得手のなさやうにするかよし坐毎に同し言葉をいふこと耻しきことなり

發句いひたて手を込たる句ならは脇も其心得にて附へし

第三は風景なとにてすら〳〵と有へし大かた第三は其卷頭と心得へし以上俳諧寢覺古其他

一卷は面序の序裏序、二三の折破、名殘の折急也百韻裏うつり二句のうちは戀名所にすへてむつかしき句無く位をとりてすへし是古へ面十句の內なれは也一坐の外歌仙四十四等に至るまて序破急忘るへからす筆つむし

俳諧小鏡に去來曰表の句序の序、三の折破、名殘の折急也名殘の折にてさら〳〵と巾べし是百韻の法也云々小鏡

脇附方の事

抑々發句脇は一卷の天地にして父母なり此二句合體して百句千句を生す故に發句脇を離せは二つなれとも附る時は二句一體也故に外の平句と違ひ發句の餘光をかかけて第三へ洩さすす毛も心の殘らぬ樣に脇にて云ひ切り次へはこはぬやうにすること肝要なり脇は字留と定るも此意味有に依りて也字留にする時は自然に心の殘らぬ樣に調ふものなり故にてにをは留は留るや否やは初心の心に落着し難し云々俳諧師說錄

脇は發句に隨ひ時節時候違ひなき樣に打揃ふて附るへし文字にて留る也てにには留口傳餘りに一ふしの手たてを考ひて附るは脇句の本意にあらすすへて發句の餘情を考ふへし

相對附、打添附、違附、心附等の四躰あり俳諧獨步行

脇は發句縱の時は脇を横に仕立る也發句に顯れさる所を脇

に顯はし發句に違はぬ樣に仕立る也尤も同月の季を入るへし三月に亘たるものは別に心得あるへきこと中略總て發句は其情を十あるものを七つ顯はし餘れる三つにて脇を調ふる事よしとす同書

脇は發句に隨て時節を抱へ又主客のおしらひあるへし半松集

脇は發句にかいそひて句柄を丈高く物の名か何にても一字にて留るなりてにをはにていひ流し留ぬものなり紹巴法眼

又云本歌の發句の脇は發句の云殘したる詞を以て歌の末を云聞せる樣になすへし一ふしの手たてをなしたきよしを思ひてせんは脇の句の本意にたかひつるなり脇に於ては五つの格あり

一あいたひ附、二打添附、三違ひ附、四心附、五頃留の五格あり俳諧埋木

長頭丸云脇に對附、ひろひ附、大小の脇なと云ことわり季吟云ひろひ附とは發句の心を受てよく細やかに附おふせたるを云へり、心附といへる打そへ附なとのたくひに等しかるへし、對附は相對附と等しく大小の脇とは違ひ事なるへし全書

紹巴法眼云ひとからみと云こと脇の句にあり譬へは藤なとの發句に松を根さしてはひかゝる物なれは一句の內に松なとに取合はたゝ花を賞翫にて發句に無益の植物を取そへたる事更に入らぬ事也全書

脇は字眼を定めて後趣向を立へし字眼を礎に置古式なれと

句意とゝなふ時は上下の論なし俳諧寂栗

脇の留はいつまても字留然るへしと芭蕉も申されたり字留といふ事テニハの字はせぬ法と古より定りたるなり是守るへき事也眞の俳諧なとは別てなり眞の俳諧といふは神祇賀の事也テニハの脇といふ事能く習ふてすへし別て習と云事に口傳ありテニヲハの留脇は萬葉を濫觴とする也總論集

脇は發句に隨て時節を抱へ一篇さはやかに賓主のおしらひ有るへし紹巴法眼の云發句に添て句から丈高く何にても文字にて留るへしテニハ抔不留脇に五の品あり一に相對二に打添三に違附四に心附五に比留り是なり猶對附、ひろひ附、大小の脇とてありたとへは

雪なから衍山もとかすむ夕へかな　宗祇
行水遠く梅匂ふ里　肖柏

俳諧

もし去年の櫻ひろはん小笹原　信德
雪間に黑く篭のすて石　同

又ある人の興行に

餅搗にひとつ合點の閏ヲ月
年待つ花はやまふきの柴　鶯水

是らや打添附なるへき又

名か聲かほとゝきすとは時鳥
卯の花や雪雪や卯の花　立圃

是等を對附と云

猶述懐の發句等獨吟ならは同躰も可然歟述懐の句に他人の附たる時は述懐の脇然かるへからす

身やことし都を餘所の春霞

此脇宗祇旅行のあらまし老後なれはいつくの霞とりならんと思ひを述られたり

またき野山の花のあらまし

是は述懐の心を捨て花のあらましに取なされし也其外挨拶の句の脇古事本説寺の句の脇等樣々の習ひとも引句取用てと思へとおはやう此心を以てはかり知るへし以上俳諧寄垣集

五體の事

脇五躰

打添　枯枝に烏のとまりけり秋の暮

鍬かたけ行霧の遠里

傳曰枯枝に烏のとまりたる夕暮ならは遠里は霧立渡り農人の歸るへき頃也と時分を定めけしさを打添る也案し方五躰ともに離るへからす雪中庵蕉藤の卷

市中はものゝ匂ひや夏の月　凡兆

あつし〳〵と門〳〵の聲　芭蕉

五月雨をあつめて早し最上川　仝

岸に螢をつなく舟杭　一榮

是打添の脇也打添の脇とは家といふ句に軒垣窓柱なとつくるを云たとへは海と云句に舟岸なとを附るはよし舟といふ句に海川とは前句のうはさ也證句の趣を知るへし古式に云吉野山に花娘捨山に月と附るはよし花に吉野山月に娘捨山とはゐしゝ尤此趣脇のみに限らす平句にても同し心也俳諧寂寞

違附　月花の愚に針立ん寒の入

やゝ春近き市の人聲

傳曰發句は四時の風雅に愚なれは針立んと興したる閑人のさまなるをいそかしき師走のさまを云立て附るなり違附と云は白きに黑き長きに短き大に小と詞違て心通ひるか如し葛の卷

違附　須磨も明石も軍最中

松風にひとり念佛の聲澄て

是前句は源平兩家の戰なるを隱者の山居なとして亂世を避けたるさま是違附也同書

尤附（トカノ）　秋の暮行先〳〵に笘屋かな

萩に寢やうか萩に寢やうか

傳曰秋の夕暮の行先々も宿かるへきよすかも無けれは何れの草に枕せんと尤めて道理なるさまを云也三の朝

比附（ニロ）　秋に添て行はや末の小松川

垣根に虫の遠さかる頃

傳曰發句は秋もやゝ名殘り近く小松川と云名のおかしけれは分行んと云ひ立たる句也然は垣根の虫もかれ〳〵に

露も霜に置かはるへき比と定む全書

馬士の手に火をつかみけり秋の霜　野水

柿の柿の落つくす比　且藥

是比留の脇也頃留はかくの如く頃と云字を礎に置く古式也しかあれと發句の頃を定むるなれは上下の論なし三春三秋の趣を能辨へて附へし俳諧寂藥

對附　奈良七重七堂伽藍八重櫻

曙かすむ三笠旅笠

傳曰奈良七重八重櫻とけしきを數へたる發句なれは三笠旅笠と其所の名ところ其けしきを見渡したる旅かさを打添て心詞ともに對也當に好ましき句也全書

五脇は發句の餘情を盡す所なれは發句の心を沈吟すへし五七の聞えぬ所あれは作者へ篤と尋て花に蝶と愛し梅に鶯と附る也此所低句なれとも高句になる程にこめされは脇にはあらす先は發句を定る體よき也發句に場あれは情を請て發句に淋しき餘情あらは淋しきを受くへし面白き情あらは面白き體をは情に汲て挨拶すへし此故に發句は客の位にして脇は亭主の働へき所なり芭蕉後集

相對　忘るなよ虹に蟬なく峰の松

杉のしけみを歸る三日月

頃　市中は物の句ひや夏の月

〃　あつし〳〵と門々の聲

對　釣鐘は撞て降り行紅葉かな

蜂のから巣に蜚啼く

打副　空大豆の花咲にけり麥の綠

畫の水鷄の走る溝川

打着　椎の根に覗き出したる清水哉

ぬくふたやうな夏の青空

てには　霜月や鶴のつく〳〵並び居て

冬の朝日の哀れなりけり

脇の句習のこと抑、脇に五樣あり所謂打添附、くらへ附、面影附、大小の脇、頃留りなり

打添附と云は發句にすかりて面白く附るなり

白妙や動けは見ゆる雪の人

筏の掉にさはくあち鴫

是は雪ふりて四方も白妙に見ゆるなれは人の形も動かぬ時は見へかぬるなれは脇にも群居るあち鴫も夜るなれは筏の掉にさはかねは知れぬと夜の體面白くうつしたるなり是にて知るへきなり

くらへ付といふは

花咲はつけんといふや小短尺

御酒の餘興に鬻か琴引く

是は花か咲は思ひめくらして短尺をつけんとなれば酒もりの跡は淋しさうなれば鬻か琴にて餘興を催すとくらへたる也

又　情いかにあれ織女　牽牛

萩に露ちり荻かうなつく

如此なり樣々に風情をめくらすへし又是をは相對附拾ひ附ともいへり

面影附と云は二樣あり姿の面影心の面影也（俳附句の部を見るべし）

大小の事

大小の脇といふは

見渡せは花はかり也春や京

麥麺を敗く鄙の三月

彼の平句にて違ひ附といふ者に似て少しかはりあるなり

頃留と云は歌にも

春はたゝ霞むはかりの山の端に

曉かけて月の出る頃

と定家も申されしとかや

木隱れに蟬はかり動く夕へ哉

汗入かねて簾すく頃

平句と脇句とは少し替りある平句にては

麥蒔さして月を見る頃

花の下紐ときてぬる頃

兩袖しほる五月雨の頃

なとゝあり上の句の頃留りたまさか也所謂

姫御前か桃折に行雛の頃

如此いつれも口傳にいふ成るへし

脇てにをは留

脇をてにをはの字にて留る事是又習ひあり宗祇の連歌の句に

見るめかれおふてふ濱の雪の暮

松に氷れる月はかゝりて見ゆる

是は見ゆると字を云殘したれは實はて留にあらす俳諧には大坂宗因の句に

月のはしらに男たてして居る

如斯に留られたり是も居るといひ殘したる也さりなから右何れも一代一句の事也季吟か句に

今朝見れは軒端を染る時雨かな

歸花咲湯にや有らむ

是は全句を上下へ返して聞んさりなから皆好みてすへき体とも見えす上手一代一句の事也但千句萬句なとの時は卷のかざりに一句はかりは不苦や以上芭蕉後集

脇にてにをはの留をすること外幾品もあり或は發句の中の文字へ返す事あり又かけてにはにもすへしと芭蕉はいへりまた脇の句中へ返す事もあり我はかう覺てすましき事也と宗因もいへりとかや

青鳳曰宗因の金言妙感すへし是脇句のみにも限らす平句にても大事のてにをは秘傳なとをは能知りてせぬか能きなり未練の俳師未坐につらなりて物知りたてに珍

らしさてにをはを出して宗匠並一席の貴人をもとく事全なき事なりたしなむへしといふことしかり芭蕉後集

ひさこ　いろ〳〵の名も紛らはし春の草　珍碩

うたれて蝶の夢はさめぬる　芭蕉

是手には留の脇也脇は礎を文字になして留る也さるをかくの如く手にはにて留るは脇體備はりたる上の事なり自得の人ならては好む可らす寂楽

冬の日　霜月や鶴のつく〳〵ならひ居て　荷兮

冬の朝日の哀れなりけり　芭蕉

是もてには留の脇也同してにはなから是は又格を外したる也發句の手には留にまかせられし成るへし自得の人ならては好むへからす

春の日　蛙のみ聞てゆゝしき寢覺かな　野水

額にわたる春雨のもり　旦藥

是人情の脇也人情の脇は平句に落入やすし其心得あるへきこと也すへて脇は趣向の立過るをあしとすゝしゝといふは平句に紛れ安き故也

いつを昔　ひとつ松此ところより浦の雪　加生

鴫こす峯を入かたの月　其角

是てり合の脇也てり合の脇とは浦に峯、海に山なとおし並ひて云也よくてり合されて放れ〳〵になる脇也分別すへし

深川芭蕉庵を尋て

わら野　雁かねもしつかに聞はからひすや　越人

酒しゐならふこの頃の月　芭蕉

是贈答の脇也贈答の脇とは違附をゆるす格也たとへは客の自の句に亭主の自の句を附る故に違附也客發句亭主脇餞別を受る脇祝等の脇皆格也

芭蕉小文庫　新麥はわさとすゝめぬ首途かな　山居

又相蚊屋の空はるかなり　芭蕉

是餞別の句を受けられしや

新庄の歌仙　御尋に我宿せまし破れ蚊屋　風流

はしめて薫る風のたきもの　芭蕉

是亭主發句客脇さま也いつれも違附也是を時宜の法とも云也

笈日記　しるへして見せはや美濃の田植唄　如行

笠あらためん不破のさみたれ　芭蕉

是亭主發句客脇也美濃といふに其國の名所を附たる例也打添の心にして不破といふに美濃のと附るはあしゝと知るへし

冬の日　炭賣の已か妻こそ黑からめ　重五

人の粧ひを鋭磨寒　荷兮

いつを昔　鴫啼や弓矢を捨て十四年　去來

又ほそらぬ霜の小刀　嵐雪

深川集　年わすれ厄に桃の花かゝむ　酒堂

膝に置たる琵琶の木枯　素堂

是此體格を外したる也自得の人ならては好むへからす

雲ちるの卷　生船やさくら雪ちる魚氷室　藤匂

金沸の郡豐浦の春　千春

是揚句に似てあげ句に非らす文字留の脇也異體なれは爰に顯はして參考にのする自得の人ならては好むへからす

以上寂栞

脇手に葉留に

霜月や鶴のつく〳〵並ひ居て

冬の朝日のあはれなりけり

發句てには留なれは脇韻字留にせすといふ古法也大かた此の如きなから其法を知りてこれにかゝはるへからす其句にもよるへき事なり只てには留とはかりいふ時は、れ、けり、ん等の常にありかやうの句にも必脇をてには留にするといふにあらす元來懐紙、書留の見苦しからぬ爲にすること也又曰脇のてには留は全體草體也挨拶なとには必すせぬかよき也格別に耳立たるてに葉留の發句挨拶に出來たらは脇に其格もてする事非禮ならす右手に葉留等句脇の對する時は第三韵字にて留るといふも懐紙面の並はぬやうの心つかひなり何も芭蕉のおしへなり師說錄

挨拶にさへかくのことし故ある俳諧にはすましきこと推て知るへし

脇の句法　芭蕉曰脇の留を韻字といふは眞名文字にて留る故也聯句の脇は對也此格に倣ふて韻字留といふ脇體の事

五體三體なと姉小路殿傳紹巴昌琢宗祇の發明の說あれとも俳諧は其發句に對して體を定めす宜くすへし定れは古くなるなり唯の發句に旅の脇はせぬもの也第三苦しからす　全上

脇は發句出來たらは體の句か用の句か又有心か無心の句か大中小のはたはり時節等まて是を辨へて發句けしきならはけしきの脇人倫人事ならは脇もまた是に隨ふ或は大に或は中に或は小に姿情意味其發句の機嫌にかなふをよしとす　全上

芭蕉曰脇に五脇と云事宗祇の比より定まる事なれとも當流には發句の振によりて可然すへし定る體あれは古く成なりと敎へられし也世間此說を知るもの稀なるか必す五脇をもて敎とす初心の手かゝり暫く階梯ともなるへけれとも千差萬別の旨をしらは早く先師の敎に隨ふへし然ともかくいふのみにては初心の手かゝりなし其句のほとによるものなれは豫めいひ方たけの心へとするなり　全上

五脇の名目　芭蕉曰脇はひつとり付、心附、打添、違附、頃留也加樣の事は末細にするに不及俳諧成ぢなけれは益なし滿足すれは自然と濟むこと也

脇は大悟の收る所とは發句は大悟の立つ所脇は大悟の收る所故に脇は少しも跡へ心の殘る所なき樣云ひきる也聊か次へ運ふ心あるは脇に非す平句也芭蕉一大事の敎也　全上

下の句て留の事　古今抄

大抵はバと押て「てと留也

蟬の端山に花は殘りて

松にこぼれる月はかゝりて

俤はかり月は霞みて

如此の類なり但しヲハの字を上より十字目に置也

にて留をさへ字五つある事俳諧堀木

を、ハ、は、も、からぬ

水くさき心を人のならひにて

うたてきはをひ女房の客氣にて

よりそへは顔にせさる心にて

老たれとしふともなきも道理にて

しなたるゝ顔にくからぬ繼子にて

てと留らぬを「てと留る事全書

そ、か、よ

夜はひそとしるしにゆくも疑ひて

とゝろなる神かと聞けはうすひきて

さらはよとたんた一聲いひすてゝ

下の句つゝ留全書

下の句つゝ留りはさのみ習ひと云事も非す只上の句のつゝ留りと中に「なりとか「けりとか云詞ありてつゝと留むへきよし宗養の說なれともすへて近代好まさる事とかや下の句は

大盃を酌かはしつゝ

なと近くも長頭丸なと云給へり

見ゆ留全書

うくすつぬふむゆる

ほの〳〵月のひかり堂見ゆ

まいりせし鵜の波にうく見ゆ

右近の馬場に玉をうつ見ゆ

かく文章のつくろはぬ見ゆ

打ちはたかりて繩をなふ見ゆ

木すへにとゝかゑのみはむ見ゆ

むかひの山にところはる見ゆ

大方加樣にて見ゆと留り侍り又さなくて留りる例もあり

自らはかく覺へて人の事はとかめ聞ゆましきなり

一字はねとは押字なくてはねる也たとへは

なへ　せん　みんなと也全書

二字はなしとは前句押字或はやを受てはぬる事をいふなり全書

三字加へとは宗養三ヶ月に原と付老にその森句作る類也と宣へり俳諧に

手折て供にうたせぬる萩

大水も心かへらし玉まつり

四字不同とは宗養云松と藤とあり前句に風と浪と付る也と云々愚案に松に風は苦しからましげれと藤に浪は今の世の俳諧ならはうしろ付とやいはん夫も又句の仕立による

へきにや全書

かけてにはとは前の終の詞を當句のはしめに當て作る也とかや

連歌に

來る秋の心よりをく神の露
　かゝる夕部を荻のうは風

是を俳諧に

見玉ふと袖に流れしおんなみた
　おつる出家の心わりなし

きせてにはとは當句の韵の字を前句の頭の詞にことはらせたる也とそ

連歌に

詮方もなき秋の悲しさ
　霧くらき夕の山の雨やとり

俳諧に

めくるもやすき神の寶前
　みあかしも油さしたる御車

重ねてにはとは前句の終の詞を當句の頭に受て替りる事のとなへおなしき詞にて云出せるなりとかや全書

桐の葉にきれいにそゝく露の玉
　たまの家にや出す冷むき

當りてにはとは前句に取やすき詞あるにあたりて付る句也

俳諧に

又かきたつる窓のともし火
　古今集すめは後撰に筆を染め

又といふ詞に重又地又と云事あり

重又　また留守をして茶磨ひけとや

地又　又と逢ふそもしならねは名殘おし

加様のてにはを能心得て付侍るへきなりとかや

すへて八字の付所といふ事あり

さへ　なに　か　猶　こそ　は　誰　も

是ら也これらの心をしらて付侍る作者は目なし鳥のをしに道向ける類ひなるへし

すみのてにはの事

仲あかり覗く垣越し花ありて
　すんすりとしたる松かけ駒とめて

如此をくてにはに一句の長高くなるものなれは第三なとせんに此心はへ有りてよきそと返す〳〵ものたまひけるを今に小耳に狹みて忘れ難しけに〳〵と出る折〳〵只侍そかし後世これを見ん人必す〳〵ゆるかせに思ひなすへからす以上俳諧埋木

第三の事

第三に變化といはす一轉といふへし變化と心得て强て自然を失ふへからす當流の集々を見て味ふへし古法に杉形、太山振あり當流には是を用ひす、すみの手に葉をぬ

くといふ事あり昔より大切の事とせしか今は大方の人知れる樣になりたり此テニハをぬく時は先第三の位を得るもの也初心の階梯也

すみのテニハといふは上五七の間下七五の間のテニハ也、又やすみの上翌五七五の間の休み字といふ事也、留はいつとても留にすへし若しさし合時は「もなし「なれや「らん「になとにて留るへし但哉留の發句「にて留の第三すへからす「にては哉に通ふ故也、脇テニハ留の時は第三韻字留にするといふ古法あり、芭蕉曰第三の韻字留は用體のあるものにて五文字のものにて留るなる貞室瀧の月と留たり奇異のためし也是にて格あるへし

又除字テニハとての字にて留る事ありたとへはきよめてのと留るは清めてなり

韻字留心得の事

韻字留に二樣あり古例に一種蕉門にて起りたる例一種冬の日の　樫檜山家の體を木葉降　是は古例の字留の例に非らす蕉門にての例也外にもある也口傳

芭蕉曰「もなし留の事たとへは馬に角もなしと眞にいふ是發句のもなし也牛に角もなしと一轉したらは第三のもなしなり以上師說錄

第三は前二句とは違へり二句の間より一物なり出ると知るへし附ぬやうにと云說覺悟なり移句ひ奇位等尤微意なり

第三に限り附るといはぬもの也第三を致すといふ也脇に附るにあらされはなり

第三の一轉とは發句人倫人事ならは脇も然り其時は氣色なり發句脇景曲ならば第三人情にて作るへし發句脇大ならは第三中より小餘は是に效へ都て三句均しからさる始なり以上直旨傳

春の卷頭に第三までに花出ても出すとても不苦素春にも植物は出すかたよしといふ說あれともなくても亦苦しからす其場の宜きに隨ふべし

秋は第三までに月を出す也星月夜は月にならぬ也其時は句のあつかひ大切の心得あり三月盡九月盡はいかやうにもすへし九月盡は脇にも月をする事なし第三に月を出せは季戻りして宜からす習ひなきうちは九月盡の發句立ぬかよき也直旨傳

第三は詩に起請轉合あり俳諧また斯の如く發句あり相對して脇あり是を陰陽天地に比す其天地より人を生し人より四民に分るか如にして第三は發句脇を二句からみ前句と見て其場其人時分時節等時々宜きをあしらふへし一轉の場なれは附方も平句と違ひ前句を微細に捌す大やうに附へし句作また習ひあり、て留にならぬて留といふ事あり是ら口傳を受くへし三の朝

第三は發句に相對して脇あり是陰陽天地に比す天地より人

を生し四民にわたるか如し第三は一轉の場なれは平句と逆ひ微細に不捌脇よりは丈高くを本意とす留はてとめ定とす發句脇にニテ文字折合たる時は「に「らん」もなしなとの内にて留へし發句哉留の時「にて留はせぬかよき也尤哉に通ふ「にてならねは苦しからす治定の哉惣て「にてに通ふ也其角堂獨歩行

第三杉形（スギナリ）　むら雀日和定まる聲立て

杉形は句の姿也聲は杉の本末細く中ふくらにすら〳〵と立伸たる心句法はむら雀聲立てと句の心濟やうに作りて日和定ると七文字かふる也是一句の姿平句に紛れす丈高きか故也雪中庵三の初其角堂獨歩行

太山振（クイサンフリ）　松の風鍛冶の衒の通ひ來て

太山は泰山をゆりすへたる如く作せよといふ教へ也句作は鍛冶の衒の通ひ來てと作り後に松の風と冠る也又松風にと體は句意かしこく聲は雜兵のはたらくか如し是平句第三の分ち也芭蕉嵐雪其角其外古人の第三を味ふへし全上

第三の句作　芭蕉曰第三は大附にても轉して長高くすへし古法には留りの沙汰なかりしを宗祇心敬の比より今の格式は立り疑の發句の時は第三はね字に留めすうたかひの句は二句去ゆへなり又曰古書にいはく脇句テニハなれは第三文字留といふも懐紙に假名の並はさるやうの書法より定りたり如是の事は功者達人の業也初心は常の留りをよしとす直旨傳

第三は二句の間より出るやうの心にて脇を附るにあらす寄る也移をとる也但哉留の發句「にて留の第三古へは嫌ひ侍れとも今は嫌はす（哉に通はさる「にて留の事也）初春の發句に初春の第三はあるへからす他これに倣ふ全香傳に曰脇手に葉留の時は第三字留にする事ありたはいへ差合なきにて留の場を物好に餘の留を求ることなかれ「なれや留は五文字の下にかゝえ字あるへし字留は五文字一名といふ事あり口傳發句にて遣ふ「もの字を第三には「をといふ「をの字をもはとつゝける事習ひ也、らん留の中の「や哉留の言捨は古式に誤れるの口訣あり哉留にはかならす句中に抱字あるへし、傳に曰第三は心輕く其調重し一句長高く轉を專として發句に心詞の戻らぬをよしとす春秋は季あり夏冬は雜也發句二月の季に正月の季を用る事悪しゝ順の季を用へしとそ、芭蕉曰第三一字韵字は哉にかきらす一字韻にて留へし暮春の發句に暮春の菜三もあるへからす逆氣は常のところにもせす師說錄

第三振といふ事あり此振りを知らぬ人みたりにテ留外なるへし初心の人に教へて振りのつく留りを撰みて「て留「らん留「に留なとすれは第三ふり自然と備る故に定めたるもの也其ふりと云ものは巧者ならては確に知りかたし荒増し下の五文字にて發りたるもの也又すみのテニハといふ事習ひ也秘藻集

すみのてにはの連歌に

松立る奥の山本日はさして
越て行せきの山風袖さして

是山本山風中の七文字の留りにテニハを持たせたるもの也又上の五文字と中の七文字と緑の切れぬ句作也第三に此心專一也全書

第三字留の事　先すみのテニハにてさら〳〵と五七を續け下の五文字にて起す

春の風　菊の花　冬の月

加様なるもの丶名か季節の題の詞かにて留る但テニハの字は留につかす

第三の韻字留は用體の有物にて五文字のものにて留る也貞室瀧の月と留られたり奇異の例し也是にて格あるへし、一字韻字は哉に限らす一字韻字にて留るへし、第三に「のと留る奇異の事のやうに傳來れと除字「てにをはといふほの〳〵の歌の體也たとへは「さよめての」と留るはきよめて」なり「のは除字のテニハ也各准之全書

第三韻字留　前句の五文字にか丶らす長高くして一句慥にとまる同第三の「てにて留中す内わるへは「らんらんは常の事のやうに候へとも口傳あり又もなし留「に留前句のあひしらひによるへし眞澄鏡

第三にて留の事「にて留にする時は先發句の哉を能味ひ「にてに通ふか通はぬかを吟味すへし「にてに通ふとはいへはえにいはねは花の盛かな

此哉はにて也花のさかりにてといふを哉と留たり加様の時「にて留の第三はしかたし然れとも詞の續やうに寄也譬は「かすかにて「長閑にて「はるかにて抔と仕立ては苦しからす其故はかすか哉長閑かな遙か哉とはいはれぬ詞也此心を以て味ひ知るへし秘蘊集

發句に哉留「にてと通ひたる句

梅遠く香を遣水のなかれかな
水殘く根はふる芹の野澤かな

右の流れかな、野澤かなと治定したる句也加様の發句の題にては第三に「にて留せぬもの也又發句のからにより「たくひ哉ともわらはたくひかと疑ひたる心なり是にては「にて留苦しからす能々發句吟味第三肝要也全書

第三にての事　哉留の發句の第三に「にて留せぬといふ事は發句哉「にてに通へはせぬ事也口傳「にてに通ふ哉とは發句のうちにお、は、も、か、ら、ぬ、はの押へ字あらは第三にて留せぬ事也たとへは

ほと丶きす今一聲を寐酒かな

此發句の第三「にて留せぬ事也

ほと丶きす一聲聞て寐酒かな

是にては第三「にて留苦しからす是は「にてに返らさる故也芭蕉後集

第三に留の事

打なひき糸ゆふ葬の永き日に

くれなゐのやゝ見えそ衒める山の端に

是第三の「に留は此の如く句意上下廻る樣に作るへし是極秘也山の端にくれなゐのやゝ見え初る又永き日に糸ゆふ暮の打なひきと廻る也此心を以て作るへし三の朝

新疊敗ならへたる月かけに

に留は下五文字よりよみかへさるゝやうに作るへし

馬時の過てさひしき牧の野に

是「に留也に留第三は下よりよみかへさるゝやうに作るへしたとへは

月かけに敗並へたる新疊

牧の野に馬時の過てさひしき

かく作るへし

萬歳の長きはかまを春毎に

なとゝいふ句は兎にも角にもよみかへされぬやよく〳〵分別すへし俳諧寂栄

第三振　友雀の句に　月見んと汐引のぼる船留て

傳に曰第三心輕く其詞重し聲へは他家の如し脇の下に心をふみ一句長高く轉るといふは詩の轉の心と場となり發句に心詞場所のもとらぬをよしとす

春秋は季あり夏冬は雜なり春秋三月に亘たるものは能々心得へし、二月の發句に睦月の第三等を綴る事宜しからす太郎月の發句に彌生の第三は輕し樣にて苦しからす、脇てには留の時は第三を字留にすることもあり本式十百韻に十體の格ありて一卷いひ捨の俳諧にも其例を引あて「て留に求る事なかれ、十體の格にも「もなし「らん留とは「かな返し句「に留「けり留等は言葉わけて吟味すへし「なれや留は五文字の下に抱へ字を置き七文字にて押へ其言葉輕からさる樣に仕立るへし字留は外に口傳あり

朧月　杜若　金衣鳥　郭公

加樣の景物にて留る也五文字一名といひ傳へてあはひに手に葉のなきものを坐の句とする也

行く舟はこゝろに芦の隈もなし

鹿の音はまへの山よりはとゝまず

我家と思ひは空の廣からん

狹みはこ持せす聲をふるふとは

分別の落るところは椿かな

鳴からに轡もすゝも松むしも

放さるゝ鳥は小田かる頃なれや

右第三留手に葉の事は數多にして一樣に定められす豫めテニハの取合、押、抱　六ヶ敗体は古式と新式の譯を記す一句の面ふり發句にてつかふ

「もの字を第三には「をといひ「をの字を「もはとつゝる事第一也「らん留のや哉留のいひ捨は古式に誤るの口傳あり以上有也無也の闕

第三はね字留の事

第三はね字は發句無心體の時すへし有心體の時はすへからす堅く先哲の敎也其意は無心の發句は風景なと云立て句意輕きをいふはね字の第三は句の姿詞ともに重き物なれは無心體の發句の時は是をせよとなり有心の發句は

象潟の雨や西施か合歡の花

此の如く姿も心も眞也仍て句重し故にはね字の重きを嫌ふ大むね三句の轉を知しめん爲也雪中庵三の朝

第三刎字留は發句無心體の時すへし有心體の句は重きものなれはなり口傳　句作は上にうたのひの字を嘗くへし　其角堂傳書

第三もなし留のこと

木葉散る分入る山の道もなし

是は有のまゝに云下す也發句の「もなしは意中の輕重あり此境を考ふへし此句木の葉ちりとせは平句也ちると切たる處大やうにして太山の句法也

「もなし留は發句にはたとへは馬に角もなしと眞にいふを發句のもなしなり第三は牛に角もなしと轉したる心にて第三のもなしなり古今抄

山からの笠に縫ふへき草もなし

是「もなし留也「なれや留「もなし留別に子細なしたた句のたけ句のおさまりを見るへし發句の十分の位脇五分の位第三七分の位也と其心得にていつれの留にもせよ長高く第三體に作るへし深川集

山からの笠に縫ふへき草もなし

句意有りのまゝに言下すへし發句の「もなしとは輕重の境ひあり口傳　此外韻字留異體第三の事は師に就て學へし　其角堂傳書

第三異體の事

鳴からに鈴も興も松むしも

春の未天下に名ある時鳥

雲雀鳴小田に土持頃なれや

銚子取花も紅葉もなかりけり

世に韻字留の第三とて糸櫻初紅葉机等のテニハ入らぬ五文字を下に置て韻字留め傳授とす蕉門にて曾て取らす是は初心への敎也

都て第三の大意は「前句脇と云切たる場なれは一轉に物を起す句作也」是に仍て古人「て留に定む「て留は前句へなしみ跡へ及はすテニハ也故にて文字差合たる時は「二留「もなし留「らん留等の跡へ及はす留にて押て知るへし此意を能味ふへし然る時は「て留「に留に限らす第三の姿あきらか也右の異體深く味ふへし悉く及はすテニハ也されとも此一條は深秘にして曾て初心の人にゆるすへからす返す〳〵も「て留を重んすへし俳諧獨歩行

第三らん留の事

藤袴たか窮屈にめてつらん　芭蕉

すり川歌仙　水せきて盡寢の石や直すらむ　曾良

是らん留也らん留は上に疑ひのことはを置くへし左なくは留らす疑の詞は「や「いつ「いつれ「いかに「いく「たれ「たそ「かは「なそ「何是らの詞を上に置くへし

あら野　夕かすみ染物とりて歸るらむ　冬文

此句上に疑ひの詞なし染物とりてやと「やの文字を句中にこめたる也

久かたのひかりのとけき春の日に
しつこゝろなく花のちるらん

しつこゝろなくいかて花のちるらんと「いかての詞をこめたる歌なりと歌書の傳にも見へたりしかあれと上に疑の詞をつかふに子細なし

さるみの　雲雀啼小田に土持頃なれや　芭蕉

是や留り也以上俳諧寂技折

第三五文字假名留の事

冬の日　花蘇馬骨の霜に咲かへり　杜國

是五文字假名の第三也五文字假名の第三はいつれ上下の五文字にてテニハなきものを居る也「假御殿「門柱　是等の類は假の御殿「門の柱とテニハ入る也テニハ入るのはあしゝ「時鳥「机「簟なとの類ひはテニハ入さる文字を置くへし

ひさご　嘴太のわやくに啼し春の空　瑚碩

はしめよりかくテニハの入るはよしいつれも句たけ一句のおさまりを思ふへし寂技折

第三仕樣の事　惣別第三は句を三段に聞ゆるやうにせよといへり先隅のテニハと云は

延上り覗く垣越し花有て
行當る森より先に道見えて

此の如く脇に取寄薄ともたしかに長高く句の心ゆるやかなれはよき也是等の句皆五文字を後に置たる也先いかやうにも上の五文字を云て一句を作り立又後に能〻案して置直すなり然は長高くゆるやかにゆゝしく聞ゆる也平句にても其心得肝要にて是を隅のテニハといふ箱をさし候も先大體に隅寸を定め置て後に打付る時能く極に寄りて之をいへり又長け高くいかめしき句體なれは圭角さつと立たる故にいふか又切繼テニハといふは中の七文字を後に置たる也

松むしの歌乞垣根聲更て

是は松虫の聲更てとまわして聞へし又下の五文字を後に添たるなり

時鳥待し雨夜の鐘更て

是を打敗テニハと云則下の五文字を後に置たるなり又留りに文字を用て則テニヲハ留にせさる事あり是又一體也

風高し春また殘る浪の花
宵啼をゆるして待は不如歸

右の二句「にてと添て聞へし又一體なり

聲立て聞人を呼きり〳〵す

是は上五文字と下五文字とを澄かへて聞なり

折れて瓶に咲し卯の花

姿でも餘所に主なき山櫻

と芭蕉の附られし是はかけてには也又近代不角獨吟して芭蕉に伺ひし其第三に

はつし澄柱たまつて歸る雁

と致して見せしに芭蕉曰歸る雁たまつてと返したるかとはかり申されてさして難せらし事もなく然は如此に一句の中へも返すへき事ならん第三の體いか樣に變するとも先は此數體に過さす又第三の留に

秋高し南高鍬隱れ里

しはし砧のやむ殿隣

月更ぬ鷄鐘聞も我宿の

此の如く口傳あり又平句にも宗因の

夢にもと社むかし男の

口傳あることなり以上芭蕉後集

第三て留然るへし諸書に出る所同前いく度も「て留宜し夫故脇の腰に「て文字せぬ法也されと貴人なとの句たま〳〵ある時は第三「に留「らん留なるへし字留の事習ひあり習ひ知りたりとも常の俳諧には無用たるへし歳旦、三つ物ならは「て留はかりもならぬ「らん留「に留「も

なし留「捨やなとの中にも字留あるへし第三とまりの事口傳といふは何にて留ても苦しからす第三ふりといふ事を知るへし祕藻集

第三に手に葉の事　第三の留りに文字の定りたる事は一句のさま發句のやうなれとも下のとまらぬ所にて次の句へ及すへき爲なり此理をしる時は「にの字「ての字にも限らすとしるへしされとも此句は第三のさま成ると百句の中にても撰む出すほとに第三の樣をしらされはやはり定りたる留りしかるへし世に句字留に傳授ありとてあるいはは つ櫻あるいは郭公なと押字抱字の沙汰あるは知らぬ人の推量なり

かうろきも未た定らぬ　鳴所

いつれの時か我も此第三ありしか一坐をいましめて他聞を免さす發句と平句なとのさかい此第三の句字にても知るへしされと尋常の留りにて事欠くましき事也二十五ヶ條

第三脇にこま〳〵と不附とも一句のからを長高く大やうにさはくと有るへし去なから脇に一向付さるも又不宜平句なとの詞入ては句よはく成るもの也いふ度も「て留然るへく若また發句哉と留たる第三に「にてと留る事別外有るへし「長閑にて「遙かにて「幽かにてなとの類こそは自然留る事有へし又發句中にはね又句にて「はね脇にこしの「てあらは第三に「にて留「はね字す衍へからす口訣發句の體によりて第三かはりめ有へしたとへは云立て

たる發句の第三は景色成へし第三を三假にて云事あり連歌に

小男鹿のゐる野のたちと聲ふけて　宗長

俳諧　龍のはる秋の雨そら水まさて　立圃

第三に「らん留「もなし留「に留等は習ひありいつともいはるゝ限りは「て留するか本式也但發句脇「疑ひか「未來か「不知の心有る時によりて右三の留可然此外に字留りの第三とてありたとへは

よふこ鳥又おもしろふよふこ鳥

と信德のせられし也猶工夫あるへき也寄垣集

賀の仕樣第三たけ高き句よろし「櫻花「梅柳「松竹「花を待「開く「王すたれ「まきの屋此外色々可然ものなり是は別段の脇の心也未練成就の味ひ子細に不及其内祝儀の發句に忘れても「千とせ「千代なとゝかきたる句惡しく多くある事也祕蘊集

四句目五句目等の事

四句目　芭蕉曰四句目にて春秋の季をつゝけ月花の句を附る事必すあるましきなり四句目心得あり

四句目は輕くすへしといふ事昔よりの敎なりさるを心得違てやり句する樣に覺たるは誤なり蕉門の說には四句目を變化のはしめとす大切の場也すら〳〵とするは作のこゝろなり此故に「なり留にするか宜しなともいへり其旨を知らは何そかゝはる所あらん猿蓑に狸をおとす篠張の弓といふ句もあり發句脇景曲の時は第三人事の句大かた出來ゆへに四句目に力らなけれは第三はかり離ものゝやうになる也かゝる時は大方人事を附る也以上直旨傳

四句目傳曰平句のはしめ也古式は初心の場とす蕉門に於ては功者の場とす句作輕くはしりを專要とす「言葉のはしり「心のはしり「附のはしりあり三つのうち必す其一つを心懸けて作るへし

第三に打添ふをよしとす附起すは惡し狸をおとすの付事を起したる句作に似たれとも第三によく〳〵打添て一句はしれり故に波たつ事なし妙也以上師說錄

四句目は脇の姿より引さけてやす〳〵と付るを四句目ふりと云也但留りは「也とか「けりとかいふやうに兎角輕きをよしと云り

面八句の内にても六句の内にても四句目は初心のすへき所也と知るへし寄垣集

四句目をは脇の句より引上けてやす〳〵と付るを四句目ふりと云留りは「なり「けりなといひ流し可然埋木

四句目より輕々しきやうにすへし

古人の名神祇釋敎戀無常述懷同字此分嫌ふ世の字柴の戸絕へて住なとの述懷めきたる事嫌ふ淺芽生つれくなとも然へからす親子の沙汰述懷に用ひさる故面八句の中にも不嫌貞德老丁は八句の内にも人の名出され候よしゑひす

なとも句體によりゆるされた事多し勿論世の字つれ〳〵等の詞苦しからす縦へよきと云詞にても句作によりなに〻もなるへき物也總て耳に立つ言葉を用すとあり　はなひ大全

四句目はいかにもすら〳〵と仕立脇句よりも引さけて輕く作るを四句目ふりといふ也留は「けり「なりなといひ流したるはよろし亦文字にても留る

附合下の句に二五、三四、五二、四三といふ事いかにも覺へねはならぬ事也

二五、三四とは

まさにしくれを「さく「さくら花

待たる君に「來たる「あつかき

五二、四三とは

橋翻り「ほと〻きす「啼く

峰の旅人の「行衞も「しらす

二五、五二別條なし三四心よく四三よろしからす好さる也然とも千句なとには場に任すへし直言傳

下の句に二五、三四、五二、四三といふ事しらすはあるへからぬ習ひ也

二五、三四とは

かい日のくれに「なく「ほこりきす

山ほと〻きす「きなく「晩景

五二、四三とは

うそくらかりに「ほと〻きす「なく

晩かたのほと「ときすと「なけり

同し作意をとさまかうさまに思ひめくらして其うちにとなへんに耳にもたゝすきゝよろしきやうに仕立待るへしすへて三四をよきに定め四三をあしきに定めたり二五と五二とは其句によるへきにや埋木

五句目は第三の句をかたとり長高くいささよくすへし留りは「はね字なともよし左なくは云ひ流したるかよし直德說

若三の仙なとならは月の坐也但歌仙たりとも發句脇第三なとに月出たらはすへからす又發句秋の句なりば脇か第三に月をするかよき也それも時宜によるへし若し發句脇第三までに月出さる時は爰を月の坐とす歌仙する時其心得有るへし爰に月の句出たらは六句目と裏移り秋の句たるへし寄垣集

五句目は第三の句をかたとり長高く沙汰あるへく韻は「らんなとはねて然るへし左なくは云ひ流したるへし梅の鎖

五句目可然すへしふしくれたゝぬやうにと心得へしは句表の時は此二句五句目六句目無役の場にて仕にくき所なりやゝもすれは表ならぬ句の出來るものなり直言垣

五句目を筆わきと云ふ六句目を筆句と云執筆の致す所なれは也寄垣集○衍印歌仙の時

五句目より位も引さけて次第〳〵に句輕き作をよしとす　獨歩行

六句目歌仙の時は六句目を面の限りとす五月目月あらは是非ともに爰も秋の句すへし歌仙の時は筆句と云執筆の致す所なれはなり

六句目は面八句の内にても六句の内にても初心のすへき所也と知るへし以上寄垣集

六句目可然すへしふしくれたゝぬやうに心得へしは句表の時は此二句五句目六句目無役の場にて仕にくき所なりやゝもすれは表ならぬ句の出來るものなり直旨傳

七句目より句からを安〳〵と風景風情はかりにて澄くへし尤もたけ高く有るへし但百韻五十韻四十四ならは月の坐也

總して月の坐花の坐といふ事獨吟なとに其沙汰なし大事の景物にて歌道第一に賞翫の雪月花なる故一坐の人々互に時宜してむさと月花等の句をせす既に七句目共至る時是非と望まれて先輩の功者達のせらるゝ所也むさと初心の云くたすましき事を見はかりよく知りてあなかち五句目七句目を坐とかたきるへからす

百韻五十韻四十四等にては筆わきと云歌仙の時は五句目を云百韻等の時は八句目を筆句と云執筆の致す所なれは也以上寄垣集

七句目月を出す時は論なし秋の發句の時は爰に他の季の句を出すへし歌仙は一季にても苦しからす名號の俳諧は大かた式によるかたよろしき也

七句目を他の季にて月あるへしとは九月盡の發句の時は月なくとも可然也七句目他の季にて月あるへし直旨傳

七句目は五句目より句からをやす〳〵と風景風情はかりにて可然梅の鉢

月の坐の句亦一位ありて他の平句と同しからさること但第三の次に立はとの位を持へし師說錄

八句目は詞につまる何となく輕くと幽玄體をもて付るを八句目ふりと云埋木

八句目は若七句目に子細ありて月なき事有る時自然に月をもする也是を飜れ月と云也寄垣集

八句目は面八句の内にても六句の内にても四句目八句目は初心のすへき所なりと知るへし

面八句の内神祇釋教戀無常述懷懷舊哀傷の詞人の名名所同字はすへからす但發句にはいかやうの事もすへし八句目を筆句と云執筆の致す所なれは也七句目を筆わきと云以上寄垣集

折はし裏移心得の事

折はしの句やり句するやうに覺るは誤なり尤表の折端は聊か心遣ひもあるへし卷中に至ては其卷面の折端毎に安き句の附ては後の句附出すへき力なき故に却て卷中惡くなる然とも折はしふりといふ事なきにしもあらす心得てするまてなり都て附句は一句立やうにてひとり立たす趣殘

るやうになるか后の手かゝりと成て面白き事の出來るもの也是を句の運ひと云ふなり直旨傳

九句目は殊につまり行もの故前句のテニヲハにそとおたり付らるへく去なから懐紙のうつりの事におれは句丈引立られやう肝要なり梅の鎖

九句目を裏移りと云是より神祇釋教何にても苦しからす百韻五十韻四十四の時爰を裏移りと云歌仙の時は七句目を云也寄垣集

裏移りに戀を附る事待兼戀とて世に嫌へり待兼戀と名付て制するは何事そや其故を問はゝひしとつまるへし祝詞なとの俳諧に釋の句先荷ひ出さんより遙か增るへし句ひの花揚句までも戀の句をする事苦しからす返て祝義なりと芭蕉も申されしにて知るへし

前句は覺へす言捨の俳諧に「雙六の恨を伯母の書盡し」と芭蕉の句あれされと其席の宗匠是を制せは背くへからすすへて面にせさる物は裏うつり二句まて昔制し侍るにや當流には其沙汰なし

裏うつり三四句猶初裏のうちは事もなくすへしなといふ說も百韻或は席ふりの俳諧の心得そかし草體は是にかゝはるへからす表よりの運ひにも寄る事なから大かた裏うつりは起請なり（こは句數にいふ起請にあらす附方の上の起請也）力を持せん爲なり表の折はし大かたやすらかにする故也

面うら二句目其起請に應してしかと附る也三四句故に六ケ敷し捌のはしめとするなり此三句目大事也風景なとにて逃附にあしらひなとすれは俳諧骨折る事はいらす附にくき所はいつも逃句するやうになるへし

此三句目〳〵の變化を學ひとする事也其三句の別か手に入れは千句万句も自在也といへり

俳諧の稽古は附寄る意味と三句の別との二句此中に千差萬別の體出來る也四句五句或は見渡しの計ひは運ひの扱ひ也

偖右裏移の三句目も捌けて付たらは四句目は逃んとする也更に氣色に移りかたくは半延の句とて半無用のことはをあしらいて句を作る五句の人心得て人情を拔て氣色言語にて附延す也しかしなからかくいへはとて格式のやうに覺へて是にからまれ偏屈におち入へからす

附合は前よりの運ひによる物なれはかく心を得へし上に變體自在なるへしかくて人事を五句も運ふへく風景の句は二句に過へからす、無情の句多く續けは卷中力を失ひ弱くなる也仍て無情の景曲二句も續かは、三句目は必す附起して人情を出すへし爰に人事人情を盡して附責る事上手の業なり、初心のうちは人情三四句も續け得さるもの也とむへき所にて人を拔ときは忽力らぬけて一卷の疵となる逃るへき所は自然と出來る也

是を見る事に功者の眼なくては難し其事盡さすして手の

ひかれさる所は何句にても附責るは當流の力なり是尤も自然の境なり、然るを世間の俳諧は三四句も人の上を綴けれはうるさしとて必す無理に逃句を附るなりいはれなき事そかし、

惣して運ひもて行く所大かた始終同し調子なり、附けといふ場と地にて運ふ境のわいためなしかくては一卷の眼と見るへき所なく力なきなり、轉變不變の變今日の上に當て了簡すへき事そかしいかゝ定あらんや付へき程に前句か附けよ〳〵と來るなり遁るへき場も亦其心得也事定り盡るもみな自然也以上直旨啓

初裏の初に戀を嫌ひ又二句目までは表の句位を持續て附るなといふ事は其故は本式十句表を畧して百韵の八句表を製せしより起れると也本式十句のうち八句を表に殘し餘りの二句を裏へ折かへしたる故表の内二句か裏の内へ來てある心なる故のたしなみなるよし歌仙又百韵表八句を畧して六句表とし句はうらへ送りたる故百韵と同義なりと也芭蕉是をいはれなき事也とて用ひ給はさりし故蕉門にはこれを取らす他門は今も是を用ゆると也師說錄

十句の内といふて面も同し事なれは百韵歌仙とも裏うつりすくに戀及ひけやけきものを出すを不好獨步行

初裏の三句目捌のはしめ聊か氣を改て附起すへし沈むへからすさはかしかるへかす師說錄

十一句目（初裏三句目云）より心を回らし思案專要也風姿をつつけ詞をかさり風體をたしなみ遊はしよき前句に付候はんとて面をすり句毎に後れ前句受られぬ所にて付候へは必す一句もふし立つかぬものなり先に懐紙移りには二句三句の内を心かけやす〳〵と付られ其うらに思ひより句出來ならは夫にて一ふし仕候へは連歌も花やかにて心致されす候て存分より外の句を初心にて願ひ句毎に後れもて行やり句をさい〳〵なす事也是等の心得肝要也埋木

裏の十句目から移りより一句二句と數へて十句目に高き植物せす花に嫌ふ、若十句目に春の句出たる時は十一句目にも花を引上けてすへし是を呼出しの花といふ也初裏十三句目花定坐　但し歌仙ならは花の座也歌仙なれは七句目より秋の句を出し月は十句目を定とする也、百韵五十韵四十四なとならは月の坐也十句目を月秋とし爰にて月の句をする也乍去自然これより前に仙歌のときは花百韵五十句四十四なとの時は月來たらは其沙汰有るへからす前に云如くあかちに月花の定坐とて爰まてせぬ物といふ事には非らす只大事の景物とて互に時宜する習ひなれは前にも秀逸の句をさへ附そへは苦しからす今集

名殘の裏の事

芭蕉曰名殘の裏は句の事を捨ていかにもすら〳〵と句作すへし不深切にやり句するやうにせよとにはあらす今更事をもとめ耳立やうの事を慎むへき也又句並を追ふるにも

及はす揚句は附かぬやうにといふ古説も一句に成て一坐退窟し興醒る故にかくいふ也又兼て按し置ともいへりものに著すへき俳諧なとは跡にて付直すへし揚句は發句の主又は亭主のする所にあらす始の一順の終に執事の句なくは執筆すへし發句にある文字を用ひす相傳は如是なりといへとも賀莚追善なと曠の會には其坐其卷の摸樣によりて發句主に名殘の花を所望する事もありさる事あれは揚句も亭主にさすることもあり加樣の事は例にはなき事なり所以ある俳諧には發句に心の通ふやうの名殘の花有るへし揚句も亦自然と其こゝろはへ也營へは客來て其日の事を述て先より雜談時をうつし歸る時に至りて又其日の事を云事禮を盡して罷歸るか如し但發句に同意にせよといふには非らす句ひの花とは本式會に稱すへし常には名殘の花といふへし直旨傳

名殘の裏　紹巴曰名殘の裏なとに事かましき詞なとゆめ〳〵せぬ物也前句にひかれ節立ものにて候へは付句にてやす〳〵とする事功者の心得なるへし

季吟曰俳諧は兎にも角にも能付たるをもてはやし侍れは名殘の裏にてもたゝおはつきならさらん樣にたしなむへし流石に俳諧は連歌よりも廣き道にて侍る云々、長頭丸もさのみよくのたまひしか去とて前句に詮なき事なと一句を飾ん爲にこと多く仕たらんはあやなきわさにこそ又無文にてあまりにぬるき樣ならんも聞所なきなれは其程のさしはからひたゝ其人の心得なるへし埋木

名殘の折とは百韻第四の折を云

歌仙四十四五十韻の時は三の折を云

名殘の裏八句第四の折の裏也月すへからす昔の懷紙には月有るもあれともせぬかよき也寄垣集

名殘裏七句目花の句すへし、にほひの花とて殊に賞翫する也初心の人はすへからす心得も有ること也散るかしける等又は傍題等の心すへからす

八句目揚句と云々不付とも輕く早くすへし全集

名殘の表三句目猶其心得あるへし、初裏の三句目よりも一際起して附改むへし、初裏の三句目の捌のはしめ也聊か氣を改て附起すへし沈むへからすさはかしかるへからす師説錄

揚句の事

儀式の席に舉句の事　我家に舉句の掟といふ月次の如き坐俳諧には論なし或は祝言の會といひ或は哀傷の席といふ時はおほむね宗匠の發句なれは名殘の花をも宗匠に望む事也然れは舉句も常ならす其花をわしらふへけれは或は一坐の老人か或は親族の功者に望むへしさるは一卷の始終を調ふる意也然るを今の俳席には揚句を無下の場所と覺へて身にしみて我を案せす人も其坐を立さはきて果は筆句にもいひ捨れとさるは一坐の俳諧にて公式の論には

及はすといふへしそもや儀式の俳諧といふは執筆は一順の終りにありて名乘の肩に執筆と書へし無名に筆とも執筆とも書けるは略義にして論せす然れは祝言哀傷の發句に祝言哀傷の名殘の花は本より躰用の心得なれは揚句も發句の脇にかゝはらす其花の用を整ふへき也或は貴賓高客を請して晴かましき一坐の俳諧に發句は其日の挨拶ありて名殘の花はよのつねならんにも揚句は一坐の首尾なれはさして前句の附意になすまゝす前にさし合はぬ當季を案し直て治國齋家の時宜によるへき也ある年湖南の新靈山に遊ひて

七浦や一字の題を一字つゝ
　霞の刷毛にわかる八景

されは其時の評論に此發句は殊に衆議あるへし本より我門の式となせる名所に雜の發句にも似なから是には當季の脇をつけて四季格ともいふへきやと其日の脇は蕊に定りしか名殘の花に至りては發句のぬしより支配すへきにあらねは例のよのつねの散花なりきされと舉句の衆議には此卷頭の當ならぬには揚句も一ふしの心得あらんかと霞の一字を以て七浦のあしらひともさるは定家の一字の題に霞鶯の發語をかれは也此外に揚句の事を其卷〳〵の變通なから有用無用の二品には過さらん

俳諧は今人倫の花さきて
　面白頬白目白さえつる

鄰へも知らせす娘をつれて來て
　屏風の陰に見ゆる菓子盆

此二連は有用無用也前は難陣二百韻に眞草のあらそひ有て草の百韻の舉句なるかさるは我家の宗とせし人倫の俳諧こそ面白けれといふ意を目白頬白の拍子にかけたる爰に一卷の用ありと云へし後は彼いふ炭俵集に變化の中の曲節にして名殘の花をも引あけたれは爰にはよのつねの附合をもてあとの留らぬを興とすれはその一卷には用なしといふへし然れは揚句は千變なから詮する深く案し入て一坐の首尾を屈すへからす會後に其卷の用あらは幾度も案しへき所也古今抄

あら野　花の頃談義參りも浦山し　越人
　田にし喰て腥き口　芭蕉
熱田三歌仙　常盤山常盤之助か花咲て　桐葉
　霞に殘る連歌師の松　叩端

是文字留の揚句也揚句は都て一卷の終りなれは容易に附「る事なから發句の意脇の意を齟齬せさる樣にすへしさりやとて同事を附へからす祝賀の卷ならは祝賀の意の範るやうに作るへし、追悼の俳諧ならは追善の意を述へし揚句にも揚句の體あり能々考へ見るへし當時の俳諧揚句を疎略につくるは誤り也卷軸なれは忽かに作るへうらす

春の日　見付たり二十九日の月寒き　荷兮
　君のつとめに氷ふみわけ　羽翌

是はてには留の揚句也

山中の卷　鐘撞てあそばむ花も散かゝり　芭蕉
　　醉狂人と彌生くれ行　執筆

是は北枝曾良芭蕉と山中の温泉に遊ひし時の吟の揚句也心得へし

浪花の技折　舌うちもまた霞也ほと、きす　野童
　　鬼貫亭を馬樂堂といふ　瓢界

是は鬼貫新亭の賀のわけ句也

一ッ星　廂まつる幣に胡蝶のやとりして
　　調幽か母の齡ひ遲き日

是は調幽か母の年賀の卷の揚句也

翁草集　蘆ものに咽かはかする花盛　乙州
　　奈良はやつはり八重櫻かな　沾圓

是は發句哉留にてなき時はかく揚句に哉留をも附らるゝ也

連歌には櫻に花をも附る俳諧にては花に櫻を附るはよし櫻に花を附るは惡しゝとて許さす花に櫻を附るも必得なくては附き難し貞德曰前句の正花めかさるには花に櫻を附る也と有況や櫻に花附ましき事也俳諧寂寞

月花定坐の事

月花の事、去來云花に定坐なしと先師はせを翁いひ給ふ當流にはこれを用ふ花を引上るに三品あり

一は一坐に賞翫すへき人ありて其人に花を望むとき其人の句前に至り春季を出して花を望なり是を呼ひ出しの花と云、

一は貴人功者の人他に讓るへき人もなけれは呼出しを待たす花を作る又兩吟の時互に二本つゝの句主なれは辭退に及はす引上けて作るなりさて故もなく呼出すは呼出す者の過ちにして花主の罪には非らす略月花は一卷の飾りにして定りたる坐あるには非らす附合の辭義に讓り〳〵て後れたる時賞翫の月花を折端へは飜されぬ故折端の高句をもて定坐とす例に其故を知るときは月花の坐を必らすとせす一卷の變化は自在ならん但し月は折端へ飜せる例あれと是は前の月の障りありてやむ事を得されはなり花は飜せる例たえてなし歲時記

月花の句は一卷の陰陽なりなくてならぬ道理を知て前々の俤ある句なりとも居て一卷を調ふへしと二十五條にありされ共其前句によりて只月の花とあしらひては附かぬ句あり是又附句に季を結か如く月花を句の用になして働くへし此頃或人の句に

　　婆々に渡せは赤子泣やむ
　　爰元は花の彌生も蟬の月

斯く附待れは一句の趣向は囉乳にして月と花とは句作の用也赤子のせはりたるに蚊のあしらひ餘情限りなし

　　狂歌も一首出來て名月

鋤鍬に荒れても花の都あと

附は舊都なり花は句作の用也花前に至てかゝる傍若無人の前句を出せるを乙兒か只何となく附わたして席上皆舌を吐り

隣者か遠くて間にわはぬ也

菅笠に花の都と書てあり

是も花前の難則也附は前句の煩人を都人と見出して花の一字は用也句作也尾城の巴靜か席上の人に涙を礁させし附句也

枕もふたつ惣菜にならへる

浮舟をまはす花の瀬月の淀

浮舟は戀の應答(アンラヒ)にして趣向は舟遊遙也月と花とは句作也

籾臼の唄聞なから我餅

月をほしたるほら貝の酒

附は山伏の假枕にて月は句作なり

堪忍ならぬ七夕の照

名月の間にわはせたる芋島

前句七夕の照とわれは眞雲の句なり依て附は芋島にして月は句作也

曠野の百合に涙かけつゝ

狼の番して明る夏の月

附は番人月は應答なり

はら〳〵と錢落したる石の上

酒て乞食に成やすき月

附は乞食月は應答也

日は赤う出る二月朔日

初花に伊勢の蛔のとれ初て

附は伊勢の海にして花は應答也

曲突焚付ける妻の尻輕

花の露月の鏡もそれなから

附は櫛笥也月花は用髮結さして立働く姿明らかなり又月花の句は前句の作者に功者不功者あり功者の人前句へ廻る時は程よき應答を出して附句に骨を失ぬ也三吟未來記初折の花前秋の三句目なるを庵の雜水をすゝる小男鹿と翁の附られたりされは此鹿は妻乞秋にもあらす奈良わたりの鹿にして一句放しては雜也依て秋季に花を附るむつかしみもなくすら〳〵と逆ひ侍り名人の心つかひ後學の作者思ふへし附合小鏡

三吟未來記

ふたゝひ暮るゝ霧の明方　嵐雪

見霊して蚊屋へ這入る月の友　其角

庵の雜水をすゝる小男鹿　芭蕉

一通り彼岸の花の咲ちりて　嵐雪

月の座の事

芭蕉曰月の定坐をこはす事五十句うちにはあるへからす奥

に至りて三折も過ては少興にもなるものなれは稀に飜す事もあり是も定例にてはなし歌仙には苦しからす元來畧式なる故也月の坐に月の字も有明の字もさし合たる時は異名にてすへし月は上の句を賞翫とす落月無月はつゝしむへし法にはあらす

星月夜は秋季にて賞翫の月にはあらす若發句に出る時は素秋にして他の季の有明なとの附句致すへし

月といふ字は五句隔つと新式に有り月二句裏に稀にあり此時は月數八つ也名殘の裏はまれにもなし直旨傳

表の月の座の句亦一位ある事他の平句と同しからさる事但し第三の次にたつほとの位を持つへし、

傳曰落月無月の句もし付たる時の心得あり口傳但し月の字有明の字なと近き時定坐に月の字を出す事法外の變格あれとも初心のすへき所にあらす必らす宗匠功者にまかすへし

素秋は先せぬ事なれともなさて叶はぬ場にはなさすんはあるへからす古式ありとも當流に之を用ひす別に當流の法あり口傳師說傳

秋は第三までに月を出す也星月夜は月にならぬなり其時は句のあつかひ大切の心得あり三月盡、九月盡はいかやうにもすへし九月盡は脇にも月をする事なし第三に月を出せは季戻して宜からす習ひなさうちは九月盡の發句立ぬかよきなり直旨傳

星月夜の月を持たる變例　春と秋集名殘の表

うたれてかへる中の戸の翠簾

柊に目をさす程の星月夜　芭蕉

次谷の梟と附け名殘の裏引返し冬籠と付三句にわたして冬月としたり異なる例也師說錄

月の句異名にするはよからす無據する事也月前是を制して月の字出すへからすと芭蕉も申されし尤も時にもよるへし法には非すと也百句も三十六句も悉雜の句なる旨をさとらは月の扱ひいかやうにもありて異名の論かゝはりなかるへし

折端に目を飜せる稀にはあり故ある事と心得て猥にすへからすすへての變格子細も知らすみたりになすものあり變格を格式にとるは不學の誤なり月花を引上け或は飜しなとする事も會釋ある席には其理なくては失禮なり常の席無名の俳諧兩吟等にはともかくもあるへし實に道をあきらめ自然に師とも仰かるゝ輩其坐其時の運ひ變化物好にて古になき變格をもなす事もあるへし是は其坐限りの事にて又すへくもあらす去來糸櫻をもて花にかへたるも古傳ありとはいへと珍らしき物好なり是等をもても思ふへし直旨傳

月並の月二句隔て月の字出さぬ法にはあらす句作りのふりによるへし但有明の外十六夜亥中まつ宵の類もあまりなるへきたけ異名にてはせぬ方よし正風にては大方異名に

てはせぬなり古集にも少きにて知るへし師說錄

月の字は面の内是非とも可詠こと百韵は七句目歌仙は五句目也附渡りにより輕重の捌あるへし獨歩行

月の傳、月花は一卷の的にして尤も重し其坐の宗匠功者又は貴人等のする事也月は一表に一つゝ七月也引わくること子細なし百韻に一ヶ所は飜す事をゆるせとも極りたる事には非らす、初裏の月は決してこはすへからす、月花を一所に仕立る時は五分〳〵に聞ゆる樣にすへし是は月の坐を略して一所にする故也甲乙ありては月花引題して宜しからすさはいへ月に秋を結ふといふには非らす、月短句にてはそろへす長句はかりは苦しからす、秋の卷には脇第三までに必す月あるへし月無きを素秋とて室内の外には用ることを許さす、月前に據るなく雨の句なと出たる時は待月過たる月ともを拵へ用ること然るへし、打越に時刻ある句には月の座は晝夜の文字を用ふることなかれ、夏冬期の月にはのゝ字を入るへし、月に戀を結ひ名所を結ひたる句は一卷に一ヶ所と知るへし以上幻住庵傳

飜れ月の事

こはれ月の事　世に傳ふ俳諧の式には月の坐に指合ありて次の低句に月を讓る時は月を飜すといひ習はして其句に附方の子細はなけれとそも月の座と云は連歌の家の式なれは二句三句の以前よりその指合は遠慮すへし然れとも貴賓少人の句を強てとかむるは時宜に非らす或は宗匠の稱美せし句も或は執筆の聞もらせる句をも己に懐紙に載する時は二句も三句もけつりかたく其時は今の附方をもて次の句に月を飜すへき也是をも今の附方に二品の式目をわけて前句より月をいひかくると月より前句にもたるゝと畢章は例の二句一意にして前の高句より月をふくめは其坐の月と同し意也さて前句より月をいひてゝかくるとは

掃地日の隙より所作のうかれ初
玉のすたれの高臺寺前
あらかねの芋は〳〵と賣ありき
今宵の月の名はかくれなし

去れは前句より云ひかくる月は前に趣向を立るに及はす凡て前句の噂にして月はやすらかにすへき也或は前句より云ひ掛けなから月に趣向を立る時は

蹈わけて出たる男鹿の山の端に
月も嬉しとおぼしめすらん

此月は歌仙の四句目に飜して是また附方の一體也彼いふ前句の全體より月をいひかくる句法にはあらす男鹿のふりは其前に用ありてをのか當句の趣向なから山の端の古語をかりて次の月にはいひかけたり爰に此句の附意は嬉しとは見る人毎に思ふらん山の端出る秋の夜の月とよめる其歌の裁入なから月よりこなたを嬉しとは是を飜轉の

句法にして二句の間に力らを入たる附意の死活を稱すへし

干物を忘れて露をぬらしけり
門は豉かと思ふ月の夜

此附方は姿情の兩用にして干物と豉との繋きを見るへし惣して飜れ月の附方はいひかへるもたるゝも二句の間の道理なれは多くは情のはこひならめとこれらは姿の證句と云へし以上古今抄

飜れ月の事

巻の日

松風にたふれぬ程の酒の醉　羽笠
賣殘したる虫はなつ月　執筆

炭俵

黍の穗は殘らす風に吹たふれ　野坡
馬場の喧嘩の跡にすむ月　嵐雪

是れ飜れ月の古式也飜れ月は折端に月をする事也月といふ字をかくの如く礎に置く也雲はなる月「小夜ふくる月なとゝ詞の月に緣の續きたるは惡しゝ虫はなつ月橋を行く月なとゝ詞に月の字の緣をたちて心に緣を續きて月といふ字を礎に置くこと也寂莱

さるみの

此夏も要をくゝる破わふき
醬油ねさせて暫し月見る

古集にかくの如くの飜れ月もわれと古式を守るにしくはなし全上

月は百句に七つなれとも若し貴人高人杯の御句に月ありて宜き句なと出來る時は名殘の裏に月をして入つにするなり又至て貴人か花の本の宿老かなれは名殘の裏の花を月花にする事也左なければいつも裏には月なきと心得たるか能きなり又表にても裏にても終の句にても月をはこはれ月といふ百韵にてもたまさかに一つはかりは不苦にや併し好まさることか千句には有る事也必らすすへしと芭蕉は申されし也芭蕉後集

月に日と星の事　前略先哲の句をわけて當時の扱を知らしめんとす爰に月の坐に至りては故翁は隱見の句作あり

宵闇はあらふる神の宮遷し
北より萩の風そよきたつ

此宵闇は世に傳へて故翁に高名の汲也是は歌仙の七句目にて例の月秋を斷れは此遷宮の秋季を出せしに十六七の宵闇にして唯今の月の附方けれは爰には神の威靈をよせて萩は句並をのはすへき其時の會釋也されと宵闇の打越に月のわしらひの殊に六ヶ敷くさはとて十句目に月を飜さは歌仙の秋季もやかましく花前の月も無念ならんと爰に隱見の句法を用ひて

八月は旅おもしろき小幅綿

といふ句はかの中秋の名によせて此卷の見渡しに月の一字をあらはさひか爲也詮する所は宵闇の萩に唯今の月の面影を響せて月といふ字に古法を捨さる遠くは歌仙の二花二月の先非と衍いひ近くは當坐の妙用といふへき也然

れとも此等の汲は故翁に例の變通ならんに我門の學者に一人りふたりは聞あやまりて宵闇をいつも月なりといへる師道の興廢はたゝ門人にありて百世におそるへきは遺訓の沙汰也

六月や峰に雲をくゝらし山

是は嵯峨の落柿舍にて名所三歌仙の發句也此の卷の五句月に至りて異名の月は何々ならんと月次日次の名類を尋ぬるに此時に其名の評論ありされは連俳の古式より有明は論に及はす或は既望をまつといひ或は三日に影を結ふに盃の影をもて月となせるは俳諧の狂言にして今の用にわらす然るを古式の汲にも彌生師走といふ類には打越を嫌ひて附句を嫌はすとやさるは日、星の例ともちかひて理をとかめぬは寛制といふへし畢竟はたゝ姿の論にして五月雨（サツキヤミ）に八月を嫌へとも五月雨（サミダレ）には嫌はすといへる耳目の變としるへきやしからは卯月とも菊月とも訓にいふ時は嫌へく二月とも八月とも音といふ時は月のひゝきなしそれをも嫌はぬ筌なれは執筆の法にいへは「さみたれ」と假名にかく故に執筆の働あれと二月八月とは假名にかゝれす月といふ字の姿をおそれよとそ「次に音訓の評論あり今いふ發句の五もしは六月と音に吟すへし人もし「みな月と訓に唱へは語勢に炎天のひゝきなからんとそこれらは音訓の妙用といふへき也「次に異名の次第をもて星月夜の評論あり古抄は星月夜の名をあけてたゝ秋なりとはかりいひ捨て月に去嫌の論なけれとも是は秋にして月にわらす發句脇第三までに此名目ある時は其三句は素秋にして七句目の月の坐に他の季にて異名をすへしこれらは例の埒なりとそ從上の評論はすへては故翁の遺訓也

隱見の事

月の一字に隱見の事　此の格は前に題なし飜れ月の類なから或は夜分の指合か或は天象の去嫌にて月の噂をいふ事なり畢竟は月といふ字を隱すと見はすとの二品也隱見の法は漢家より出て詩家の家の名目なりさて月をかくすといふは

秋たつや朔日汐の星しらみ
はら〳〵松の岡に稲の香
姨捨の歌には誰も袖ぬれて

爰に云發句脇第三は歌仙の表合也されは朔日の脇に臨みて月は尤も六ヶ敷第三はまして星しらみに指合さはとて六句の表に四句まて月を飜すへきにあらねは爰に姨捨の名をかりて月の俤をふくめる也さりや芳野を花といひ更科を月といはむに誰か月花に非らすといひ增して前句を田毎に見なしたる山田の形容を稱せさらんや去なからいつとても芳野と更科といひて月花を隱すに論なけれと前句のうつるとうつらぬとに作者の眼力を知るへき也　以上

古今抄

月の名所花の事

更科や曇るといふは花のこと

月の名所に到る人春は花なとにて作る人多し實に大事なり長頭丸の片帆傳にも委く其場を辨へ花にて月を稱美する躰にすへき事とそ更科は月の本名にして風雨の爲には曇るへからす彌生の花の霞より月の朧と變化して聊か光の薄き事もとなり一卷に仕立る時は初表の月の坐には正月あるへからず

夜の綿　かつら男　常娥

等の粧ひを以て作り裏の月は苦しからす花は發句體と月の爲めにいひ得る躰にて中の花ともに用捨なき事也 有也無也の闕

花の事

芭蕉曰花四本のうち下の句一句はかりはありまれにも定坐を飜す事なし或は賞翫の花の句前句への附意か又其句の心か其實は梅菊牡丹なとを下心として仕立正花となしたるは其草木にたかひ季を定むへき歟或問正月に花は陽春美名なれは子細なし九月に花咲なとは大に誤也なき事也名木を隱して花といふ句はあるへし花は櫻のことなから都て春の花をいふ是等を正花に立すしては花の句多く出る故に却て賞翫輕し宗祇時代までは百韻に花三本雨一とつ也宗長の時に至りて肇の花一本雨一とつ　勅許を蒙り度旨奏聞せられて花四本雨二つには極りはへる直旨傳

芭蕉曰匂ひの花といふ事千句と夢想にいふ事にて當の會に申さる事未練の次第也意想は千句滿坐に香を炷により匂ひの花といふ今は名號の俳諧には何にても炷なり

此名號の俳諧とは神納法樂祝言餞別追悼追善懷舊等都て名號の俳諧其事によりて發句に應して宜くすへし但比論もて句作るなり

名號の俳諧には其事によりて詞に可忌事古式に數々あり加樣の格を正しくする事は名號の俳諧の時はかり也 以上師說錄

匂ひの花根元の起りは後柏原院御宇久我家の黑方梅花の薫物兼々望給ひしを牡丹花進上申されし時何にて衍も御褒美かつけ給はれと勅し給ひしに此花の事申されしかはやさしく思召て　勅許を蒙りけるより匂ひの花の稱出來たるなり依て連の席及ひ俳の席にても此花の句作る時必す黑方の薫炷事古實とはなれり全上 但俳席に於て今は此花吟聲の時炷なり香主の習あり口傳

傳曰それ花は万物の花にして櫻に非らす又櫻になきにしも非す曰櫻は花なり花は櫻なり

名殘の花と稱する當の事也匂ひの花とは本式に揚句はひた〳〵と付て仕舞ふかよき也直旨傳

揚句の花宗祇の神祇の卷にせられし事は常には無き事也 全上

花の句の事定坐に花とはかりする事は勿論子細なし變格の扱は殊の外子細あり先引上る方はくるしからす稀にも飜す事はあるへからす櫻を正花にする事も祕事也猥にあらせましき爲なり句作尤習ひあり 全上

花の事　花の句尤も正花をいふ百韻に四つ可詠也元花の句一折の内定坐はなけれとも賞翫の景物なれは初心は遠慮すへし功者は麁句無念と思ふ故におくれたる時は「十三句め歌仙にては「十一句目定坐とする也定坐にて詠時は句さしてよからすとも子細なし

花前に上の句して又花の句を撰はれてする其次に又出勝にも句前にも當てする事少しも苦しからす長句短句のつゝきたるなといはぬ事也こゝろに差別するまての事也ひかし慈照院殿大原野の花見の時宗碩一巡より下の句六句つゝけ裡一順にて長句一切あり是は公家武家十八人の句並を揃んか爲なりの事也直旨傳

花前に植物差合時は似せものゝ花をする習也其時は其一句は雜にて前の植物にかまはねとも其句に春を附て正花に扱ふ故に後をは植物定式の去嫌にする法也此格ありとゝへとも花前に心なく植物を出す事双なき無禮也急と制して其句を戻すへし面々愼てすへからす只貴人なとの風と植物を出し給ふを返し侍ん事いかゝなれは其時の用に扱ふへき爲の用也事もなきに好て似せものゝ花せん事おかしからぬ心得をしるへしいつとても正花正月をもて遊ふこそ風流なれ 全上

花の句發句脇第三の外表にせさる法なり、波の花、潮の花正花にあらすされと扱へは正花なりと先師申されし也雪の花、霜の花扱ふて正花にもなるへきか本意は雪霜を賞翫していへる花の字なれは前條とは違へりと也師說錄

花紅葉とつゝけて正花なり雜なり二季兼たる名なれは也尤句によりて其強きかたに季を立て後を附る也花のふゝき植物にあらす花の雪同前花の雲植物也

花の波水邊也植物の花の雲は花を雲とも雲を花とも見る體なるへし句によりて分別すへし花の波は散て浮たるをいふ

花の都正花也花皿正花也其故は榊は常なから其時節〳〵の花を手向るものなれはなり直旨傳

花櫻の事

花櫻の論　芭蕉曰花と櫻の事細川玄旨法印より祕して花咲先生へ口決し給ふ正傳ありといへとも其後更に用るものなし門人去來予の猿蓑の卷に末の花を略して彼傳を顯すことあり愚して櫻一本の時は咲開く或は苔なといふ字を置へき也是正花に立る習なり

櫻三品といふ事は　山さくら　さくら花　花さくら

山櫻は散るけしきを賞翫とすさくら花は峯も麓も滿山の花爛熳たるをいふ花櫻は咲散る交々の體をいふ只其わかちある事をしりて又强ちにかゝはるへからす全七

花櫻といふ事本歌にすへき習ひあり一山一繩手なと平一面に花を見渡したる時の事也師說錄

花櫻の事　みち〳〵や道にひろけて花さくら

右は櫻は花也花は櫻也唐土大和の引合に牡丹はあなたの花也されは我嶋根の花にして花櫻といへるは花花櫻櫻といふ心なるへしさるを花櫻と用る事本歌に深き緣ありて一山一繩手となと花を見渡したる時の事也幻住庵五花の口譯

花に櫻付る事　むかしは花衣、花の袖なとやうの物には誠の櫻を付誠の花には櫻鯛櫻人の如きものを付たれと當流は是を用ひす花は花櫻は櫻と分明に附るを習ひとす

辛崎の松は花より朧にて

山はさくらをしほる春雨

櫻の句に花を附るへからす花にさくらは苦しからす吉野に花は附へし花に吉野は附へからす櫻も同し心へ也他の花の名所も是に准す句の仕立やう心得あり於芭門櫻に花を附花に吉野をつけ其外花に名所を附ることあり別義なくして此例の表裏なり古式を取てとらす取らすしてとるの意趣なり直旨傳

さくらをこほす市のあさけり

大和路へ入る日はけふも花曇　翁

世に花といふは櫻の事なりといふ人も有れと花とは萬物の心の花なりたとへは花賀、花娶の類茶の出花染物の花やかなるもそのもろ〳〵の正花なれは花と賞翫の二字にさたまりぬいつれの花にても春の季にして植物に三句去るへし花は春の發生する物なれは也古より花に櫻を附る事傳授あると初心にはゆるさす或は櫻鯛の類なと前の花にあらさる櫻ならはあきらかにして附へきなり花前の植物とても此類にて知るへし但花は櫻にあらす櫻にあらさるにもあらすといふ事我家の傳受と知るへし二十五條中

唐崎の松は花より朧にて

山は櫻をしほる春雨

右花にさくら付る事前粧ひの花、花賀、花嫁、花かつほ等ならは家櫻、山櫻の類を作り其正花の時は櫻貝、櫻鯛櫻人なとゝ作する也櫻に花も亦同し有や無也

花に櫻、櫻に花の附樣の事は花と櫻と二本に仕立るなりといへるは宗祇の說なりといえり但古傳に似せものゝ花には眞の櫻を附け眞の花には似せものゝ櫻を附るといふ事は皆々知りたる事也然れとも是には二本になりかたき事ある也但似せものゝ花には似せ物の櫻を付け眞の花には眞の櫻を付て心を格別に仕立るなりと翁の申されし其證句には

花ちる庭にはかてたゝすむ

遠山の櫻や雲にまかふらん

宿のさくらに青葉見へけり

四方山の落花に春も驚きて

是眞の花櫻に眞の花櫻を付て二木に仕立る也また

花笠をかつく乙女の顏白く

雪氣の衣伊達櫻色

若衆を餌に釣さくら鯛

宮船は花の帽子を印にて

是似せ物を並へたる也又連歌にも

花ははやちりて淋しき四方の山

といふ句に宗祇の

歳木にまさる櫻見る袖

と附らしとかや是等をかよはして知るへし芭蕉後集

花に櫻を一句の内に結ふ事は是も花と櫻を別々に成樣にして又花も賞翫の心有へし

花を左さくらを右に植ませて

花は眞櫻は軒の下草に

櫻ちる跡まて花はさかりにて

是にて能々可心得事又吉野に花立田に紅葉附ぬと申人あり是非也用ゆへからすと知るへし故いかんとなれは是を押す時はいかはとも有へし廣澤に月三吉野に雁なと也加樣に云はんには付合有へからす故に不用と翁申されし也同上

花に櫻の事　抑も風雅に月花の事は四季に春秋の景物といひ其坐に其卷の飾なれは世法の五節になそらへて舊例の辭義を調るか如く其句に新奇を求むへからすとは本より白馬の遺訓なる也然に連俳の古法より花に櫻を附る事は櫻子とも櫻鯛とも異名か異躰の物をもて花と櫻の差別となせれとをの〳〵其跡を師とするのみ下畧

辛崎の松は花より朧にて

山は櫻をしはる春雨

此發句は湖南の春望にして今はた句意を註するに及はす然るに此脇の山櫻は其時の衆評にも崎には松を花といひ山には雨の櫻といへる花と櫻との別樣をしれとそ但いはむ此の櫻はむかし長等の山櫻と見るへし

詠とて花にもいたし首の骨

かたけて歸る山さくら人

此二句は檀林の俳諧也然るを中古の證句とし其比の俳抄に書傳へたれ其例の古風のいひかけなれは今の俳諧の論に及はす但いはむ櫻人は催馬樂の名目なから其人を花にたゝふれは花と櫻の心得もあらんか總して花に櫻の事は不祕の祕訣といふへき也

發句　木のもとは汁も鱠もさくらかな

花の座　千部よむ花の盛の一身田

前句　しよろ〳〵水に雨のそよくらん

花の座　糸さくら腹一はいに咲にけり

此四句は故翁の遺訓也前の櫻は瓠集の發句にして初折の

花の坐に正花あり後の櫻は猿蓑集の附合にして初折には正花ありて今の糸櫻は名殘の曲節也或日木曾寺の舊草にありて茶話に此二集の模樣を尋しに故翁は例の笑ひ〳〵聞すや我家の正花論に花は櫻に非らざるにもあらずとは言語不到の師授にして口に理をいふは祕訣に非らず二三子なを察せざるや將に知るへし我家の俳諧集は天和の比に濫觴せしか冬の日春の日は論に不及姿情は凡そ瓠集に分れて花實は將に猿蓑集にとゝなふはさるを此比の炭俵集は變化の中の曲節にして俳諧はかく三變と知るへし然は猿蓑の大任なる糸櫻の卷を一部の卷軸といひ其集の撰者の句ならんには爰に名殘の曲節をもて一部の虛實を扱かはさらんや糸櫻は例の祕訣にしてすへては文章の優游なりとぞ

發句　もろこしの芳野は岩に牡丹哉
花の座　我國の遠山さくら咲にけり

此發句は狩野の某か穴あき岩に牡丹を畫たる掛物の畫賛也さるを新宅の賀となして其日の俳諧は興行せしに初折の花の坐に至りて遠山櫻の三字を用ゆ其扱如何となれは和漢に花王のあらそひありて大和の歌には櫻をよみ諸越の詩には牡丹を作れは其いふ唐の芳野には櫻はなくて牡丹哉と岩の一字に姿情を分けたるは全く花王の爭なるや然らは花坐に至りて我國の櫻を稱せさらんや是らは風雅の意地にして畢竟は牡丹といひ櫻といふ心詞の花を知るへき也但いふ諸越には牡丹はすへて春にして百花の終りに咲けるより其名ありとそいへりける

發句　曇りとは櫻に伊達の憂名かな
花の座　入逢も聞かす尾上の歸り花

是は外山の霞といふ和歌にならへる隱し題にて五文字の曇りには花をも隱せる也然るに其卷の花の坐に至りて例の衆評を窺ふに櫻に花は論なけれとも爰に曇りといふ詞は花にありて櫻にはなし然らは發句に花を含みたらん此時は其櫻の歸花をすへきにやと其坐の衆評は一決せり但いはむ尾上の二字は江師の歌の意を摘めりこれらは連歌の俳諧といふへし

發句　雉子啼て岩根に赤き花咲ぬ

此發句は山中の即事也さて其卷の花坐に至りて例の衆評を窺ふに岩根に赤き花といへは決して木瓜つゝしと見ゆれと例の名をさゝぬ花なれは爰には櫻やしからんと子細なき櫻の一字を用ゆ但いはむ擬寵のことき櫻の名をさす時もあらためと其句は其坐の品によるへし

前句　茶の湯といふも是迄の事
附句　屑衣に花も咲ねば世を捨て

此附句は越の新潟にて鑑亭の七里と三吟せし歌仙也されは歌の三吟は二折の花ともに前句も附句も同作の句順なれは名殘の裏にのそむ時に例に花の坐をかはらんといふに亭の主の物數にて强て同作の花を望む爰に其いふ謂れ

を問ふに今年邂逅（タマサカ）に此席を設て鑑亭に百世の俤をとめむとす今や句順の事を得て同しく亭主の前句をもて同しく我師の花あらんは今の教ゆる變通ならすや予曰其故ありされとも二花の同作には必らす同作の謂れ有るへし其謂れ有らは句主とならんさしもあらすは無用の沙汰といひ法を蔑ふ罪逭しと其の花の前句を待に

前句　其關ひろく火鉢なかむる

附句　肩衣にふたゝひ花の咲はこそ

斯て此の二花の即評に百韻は本より四折にして祝言衰傷の儀式には發句の作者に名殘の花と望むさるは其事の始終なれはたとへ發句に花あり櫻ありとも名殘の花は遠慮すましけれと是は一坐の俳諧といひ增して歌仙の二折なるには此例は心得もあるへけむ此故に今の案する所は同し肩衣をもて二句一意となして花は一本といふへけれは例の罪をも逭へしとそ

發句　花に寄る胡蝶や夢の魂まつり

句花　花に寄る胡蝶を花にけふの客

此扱は越の井波にて夢占といふ集を撰らひ十餘輩の亡名をあけて一題〳〵に魂をまつれる卷軸の百韻にあされは發句は魂まつりにて正しく秋の花なれは句ひの花に至りては其夢の胡蝶をまねて此花の客となせり後の花は全く春といふへし然れは花に寄る胡蝶は二句一意の格に似なから是は其花の詞かりて此花をいはむ爲なれは胡蝶の花の無用なる客の花の有用なる秋と春との差別を見るへし爰に思へは法式の沙汰は彼いふ千例万格にして此外の指令去嫌も其坐に其時の用を見て豫め此扱によらは有方も無方も例の變通なるへし古今抄

打越花の事

みよし野は當の花さへ春の色

右定坐の一二句前水仙、山茶花、花野、櫻等の句ありては花の字植物花の坐にさはる故に宗匠執筆の許さゝる也然れとも其人高位正客なとの句强て返すに及はす其時此句作の例を用ゆ此體を味とりて作はいかやうにもあるへしかくて次に春の句を附へし是素より芭蕉の教なり師錄

みよし野は當の雲さへ春の色

右附合花の定坐の一二句前さかん花、野の花、野梅等の句ありて花顯れたる時は定坐の花にさはる故多く花前とて執筆の許さゝる所なり併し貴人高位の據なく句作出來すれは返句に及ふこと能はさるなり其時は證句の如く綴て花脇にも春の句を附へし幻住庵二書

他の季の花短句花櫻の事

句解　稻妻を木の間の花の心はせ　舉白

稻妻　秋季にて花を附るに月に花を結ひて付るか又は一卷の趣によりて他の季の花を附る也他の季の花とは夏秋冬の内にて正花なるへきを附る證句の如し又雜の花といふもあ

るとは聞けと元錄の正風に見あたらす故に爰にもらす古哲のなさるゝ事を好て成すへからす浪波の技折に

花火たつるも水の仇こと　一札

是は短句の秋の花也心得へし熱田三歌仙に

こからしにかちけて花の二ッ三ッ　荷兮

是は冬の花也心得へし前に云如くみたりに附へからすまた繼尾花に

花に符をさる坊の酒藏　芭蕉

是は短句の花也花の坐よりは前へはつみて附る也花は飜れ花と云はなき事也炭俵集に

此島の餓鬼も手をする月と花　仝

是は長句にて月花を結ひたる也深川集に

踏まよふ落花の雪の朝月夜　岱水

冬の日に

旅衣笛に落花をうち拂ひ　羽笠

是は花といはす落花と漢語を用ひし也是等も心得へき事也猿みのに

糸さくら腹一はいに咲にけり　去來

句解百韻に　三度蹈む吉野の櫻よしの山　仙化

此二句は花といふへき場を櫻と附たる也尤も花は櫻櫻は花と云なれとも先はなき格也と知るへし自得の人は格別花と附るかた然るへし他の季の花短句の花さへ古人も多くせさる也心得へき事也寂栗集

一本櫻の事　糸櫻腹一はいに咲にけり

右附合一本櫻の事は細川法印より祕して花咲先生に口訣し給ふ正傳有と云へ共其後更に用るものなし門人去來予は猿蓑の卷に末の花を略して彼傳を顯はす事あり總して櫻一本の時には咲く、開く、或は苔むといふ字を置くへき也是正歌に立事習也有也無也の闕

○（雜の花の事）

からさきの鮫は花より見事にて
行列といふものは何にやら

右雜の花は秋うつりなとに有へき事也歌仙に八句目より月秋を句作るときは十一句目の花春に及かたしさるは冬季を待たぬ故也同上

其卷には雜の句花を出し花より三句去て素春をする事習ひなり雜の花とは異名なり又は花嫁花智も稱美の事なれは皆是雜正花なり春を付行く時は見立花と云ふ也同書

○

面に花の出る事　發句脇第三に限るへし裏うつりよりはいつれに出ても苦しからす月は飜しても不苦花は飜すへからすとある古式の事、花は飜さすとは百韻十三句め歌仙十一句目か限りなれは也俳諧獨歩行

花のある面に櫻を嫌ふ連歌の說也俳諧には七句去てすへし然れとも歌仙なとには模樣いかゝはへらん或書

○

呼出し花といふ事　一坐の貴人或は賞翫の人に花の句を乞んため春を引上て出すをいふ也

是非に花の句すへき所の前句に春をする事なりよからぬ事なり私曰是むかしよりはなき名目なり月花の定坐といふ事中頃より云出したる俗説ある故によりて呼出の名目も出たりしかしなから花の句あるへき所ならは春をせぬかよきなり裏の十二句めに立さりかたき春の木の本といふ句せしに其折にいまた花出さりけれは花の句なりかたきよし云て句を戻したりとなりそれはとになくても春をするはわろしとなり俳諧名目抄

戀句附合の事

戀の句は昔より二句附されは捨す昔の句は兼日に戀の詞を集め置て心の戀の涙をは不問也戀は別て大切也作意安からす宿昔宗砌宗祇の頃までは一二句にて止事あれは其例にならひ此後門弟子議して一句にても置へきか其趣は前句戀とも戀ならすともさためかたき句あるを必戀の句附て前句ともに戀に取なすへし左様の時は其句のみにして其次に戀の句附るに及へからす新式にも其沙汰あり然れとも議する所は其坐の宗匠にまかすへし直旨傳

戀は月花よりも大切のものにて扱は春秋の季節同様の位也此故に句數も春秋と同しくつゝく也都て季節と同し扱にて季節の代にも立る物也月花の代にも遣ふ春秋のはしめ

句に若し戀あらは其季につれて三句なから戀をわたすへし若し春秋二句前に戀出なは四句戀をつゝけ春秋の三句目に戀出たらは一句春秋を附のへて春秋の戀をすへしこれ又口傳の一つなり

同季は五句去れとも季と季との間に他の季ある時は四句にてゆるす例也又季と季の間に戀ある時も四句にてゆるす例なり是れ則戀を季節同様に扱ふ故なれはなり師説錄

戀の句二句目骨折也詞にて附捨て置は無念なり一句にてさしおく事のあるは付て前句に心かよひ二句の間に戀を含る故也當流詞の戀をとらす心の戀を戀とする所なり　直旨傳

戀の句の事は古式を用ひす其故は嫁、むすめ抔野郎、傾城の文字名目にて戀といはす只當句の心に戀あらは文字にかゝはらす戀を附くへし此故に他門より戀を一句にて捨るといへるよし戀は風雅の花實なれは二句より五句に到るといへとも先は陰陽の道理を定たるなり是は我家の發明にして他門に向ひて穿鑿すへからす二十五ヶ條

戀の句いにしへは戀の句數定らす漸宗祇宗長の頃より今の式に定む五句去なり俳には三句去とあれと百韻一折に一ヶ所つゝ歌仙には二ヶ所と思ふへし俳諧獨歩行

戀句の事　冬の日に

床ふけて語れはいとこなる男　荷兮

縁さまたけの恨殘りし　芭蕉

さるみのに

大膽に思ひ名のれぬ戀をして　半殘

身は濡淺のとり處なき　土芳

炭たはらに

うは置の千菜刻むもうはの空　野坡

馬に出ぬ日は内て戀する　芭蕉

あら野に

きぬ〳〵やあまりかほそくあてやかに　芭蕉

風ひきたまふ聲の美〳〵し　越人

はるの日に

顔ふとところに梓聞居る　雨桐

黑髪をたはぬる程に切殘し　荷兮

是らの趣にて知るへし二句の間を情のもて戀とする詞のみ戀なりとも其戀こもらさるは一句にて捨るなり故に女娘なと出ても句體によりて戀句とせす是戀の句の捌き也

寂栗

戀句からの事

何者のひりちらしたる床の屎

是は花つみ集の句也古人の集といへとも一覽のときよく〳〵分別して見るへし必す誰なりとも古人の名に恐るへからすかゝる拙き句はたれにもあしゝと思ふへし

早乙女の雇はれわる〳〵管禦

口すはれたる人の眞中

是は東都にて蕉流と唱ふるものゝ集中にあり戀の句いゝ出さんとて「口すはれたるとはあまりなる事なり親子兄弟君臣の間にて咄されぬ言葉なり且風流といふ事露はともなし、深川集に

掛乞に戀のこゝろを持たせはや　芭蕉

かくいはんには戀の情も風流もあり又句のからも自ら能差合もくるへからす氷清玉潤といふへし戀の句はあはれにも深切にもいふへし尤も戀の句にも限らす一句の上の風流二句の間の風流を專らとすへし

行水の時面目をうしなひて

我等か瘤は殿も御存知

是らの句四十年前(文化九年より)美濃尾張にて流行せし句也と云餘りなる二句の間也當時美濃尾張に此句の體をいふもの一人もなきは曉臺士朗なと出て元祿の昔に復せし故也芭蕉翁の忠臣といふへし

百姓寺へ伯母の藪入

なとゝいふ句作やけく聞ゆ百姓寺作寺なとゝつかふましきといふにはあらねと元祿の俳風ならは

一と夜かる宿は馬かふ寺なれや

此句にて知るへし

さま〳〵に品かはりたる戀をして

百夜のうちに雪の少將

と其角の附られしに人も稱し其身も附たりなとおもはれ

けるよと其後伊賀の上野にて同し前句

さゝ〳〵に品かはりたる戀をして
うき世の果はみな小町なり

と附られたるよし誠に名人の句作安らかに云下して餘情深しと其角前非を悔ひられたると白雄夜話にかたりぬ寂栞補

戀に結ひたる神祇句去の事　芭蕉曰神祇、釋教戀の習わりいつれも連歌に殊更秘し傳へる大事也予世の中の宗匠を考るに此重秘を知らす露沽公へ傳へ侍りし外他言せす戀に結ひたる神祇は神祇の句に二句去なりこれを三句去と覺へ捌くこと未練也釋尤も同意也神祇と神祇三句去なり戀の情の神祇格別なり以上師說錄

戀の句本意を背く事

かならつと云つる人のけふは來て
我をや人の思ひ出らん
おもふかと別れに暫しやすらひて

戀の本意とは別れをしたひ訪はぬを恨みまつ暮にうき事をかなしみ名の立ことをいとひ種々に心を盡すか本意也人に思はれ顏なるは本意に非らす分別すあるへき也　はなひ大全聞書

戀の詞　貞享式我家には詞をもて戀とせすまして文字にかゝはらぬは古抄に女の一字より嫁とも娘ともいへ野郎、傾城の名目とても當局に戀の姿情なき時は例の詞を戀とせす此故に他門より戀を一句にて捨るといふ方外の沙法あるよし戀は陰陽の道理なれは三句より五句は時に隨ひて戀を一句にて捨ましき故也支考云戀の一條は今式の大事にして戀は一句にて捨ましき陰陽の理のみをいひて其外は未然に定めかたからん其いかんとなれは詞の戀は字にあれと心の戀は句にある故に其句其時にむかは句情は兼てさはき難し譬へは此頃の附句に

普請場の飯も一度に起そろひ
箒の先にそりやと手拭

といふ附句は普請場の臺所に只今膳を居んとてそこらの埃りを掃おろすにあとより起出る人もあれは折釘の手拭を箒にかけて及ひ越しにさし出したる大工木挽の立さはきて物の世話しきさまなるを三句目の作者戀を知りて打趣のはこひを轉せんと起請の附めを案して

思へはや思はぬ振りのつれなくて

とは傍輩中の忍ひ寢に床の下なる牽や川のいさしらぬ貞見てあいなからめ然れは前句の作者には嘗て戀の心はなけれとも後の眼力にさてはと戀の姿情を見附たれは彼と我との二句となりて戀は決して二句といふへし

青藍云　蕉門には戀の詞とて定りあるにはあらす心の詞の働きにて戀ならぬものも戀句に取りなすを作者の働きとすれは强ち戀の詞になつみて句作すへからす許六云晋子か句に

物さしに狂ふ男のたゝかれて
　灸とは嫌ひ餅につきやくふ

と云は戀の詞一字もなし全く蹈込たる戀の句也近年俳書に戀の詞を扱へ置くは其人の胸中狹き事知れたり云々戀の詞は戀の技折に多く集めたれは彼に讓りて爰には荒增を記し聊か註釋を加へて初心の便とす云々歳時記

戀に上中下の事

戀は貴となく賤となく只一情なから和歌にも逢戀わはぬ戀逢てわはさる戀なと趣さま〳〵なり俳諧の附合とても上中下初中後なきにしもあらす

上品　來へき宵とてゆふかほの蜘
　うしろから鋭の機嫌なくさめて

上蔦の人待給ふ夕化粧なり我せこか來へき宵也さゝかに
の蜘のふるまひかねてしるしもと右近の君なとのなくさめ申たる夕貝の宿の風情もわらん歟

中品　頃は出口の柳拈く
　嘘かりに來る手に筆を持ながら

川竹の風情也此文の返事いかにとわね女郎なとに呼たる年波の有樣ならん僞のうちに誠有て中品の戀といはん歟

下品　田植に色の白き雇人
　居風呂に水さす戀と焚戀と

君はをだまき麻の糸思ひ合せてよるはかりと麥搗唄の鄙ふり戀なを衰ふかしやもめ女の雇人見る心地せらる馬に出ぬ日は内て戀するといへる附句も此わたり歟

初戀　押やられてもはてぬ初戀
　虫干の摸樣も鶯のをしへ鳥

はつくさのねよけなからわかめたるわたなき戀也中たち初る女もさゝめきたる虫干のかいまきれと附たり

父母愛少女　女是聰明子
生不識鶯蕊　繡出鶯蕊是

是等の余情歟

中戀　裂て捨るかなを起請なり
　吉原をこちらの髪に梳直し

きのふの綾羅の仇なるよりけふの紬の實ならんこそとはしめ終を含て中の戀ともいはんか

後戀　枕の文を解てなくさむ
　髪結ふた幽靈ひとりなつかしく

楊貴妃かへつて唐帝の思ひ李夫人去て漢皇の情けとあり し雨月のつれ〳〵ならはかの反魂の薫もわらまはしき歟 猶戀の姿情此六種に盡し難しよつて爰に諸集のうちより拔萃す是を讀て工夫すへし

前句　樣々に品かはりたる戀をして
附　浮世の果は皆小町なり
前句　うは澄の干菜きさむもうはの空

附　馬に出ぬ日は内て戀する
前句　藥をはこふ籠中の秋
附　此戀は兄か合點を待はかり
前句　それそこへそよく被の迦陵頻
附　眼鏡へかはる戀もはる〳〵
前句　我物おもひ浮世一人
附　此戀をいはんとすれは吃にて
前句　泣てしまふた跡は寢られす
附　下紐の結ひめ高きわすれ草
前句　我年にあはねと娘盗出し
附　戀にかならす變の友達
前句　長女使の御返事を待
附　かくし題思ふ方にもよみまさん
前句　口紅粉凄き石佛の顏
附　啞の戀涙こぼして見せにけり
前句　傾城とのを御客あしらひ
附　疱瘡神のけふは髮梳もの好み
前句　しとやかに朽葉鹿子の古狐
附　封もそのまゝ師直か文

戀句は前句の情を動してつくれは前句則ち戀となり待れは一句にても捨よとの玉ひけるとそ是戀句を猥りにせさるの謂なり只情を專らとすへしされと當時傾城、女房、後家容儀の善惡衣類の伊達遊所の名等心に戀なきも戀の詞道具をもてあしらい盈是とても戀の大切成るか故也此境を勘へ知るへし先は陰陽の道理なれは二句はあしらふへし古人五句まて續くといふ說あれとも蕉門には用ひす以上附合小鏡

戀の辨　蕉門に戀句の論有て戀を一句に捨す二句より五句に至るへし他門はひたすら戀の詞寄ありてむつかし古抄は娘女房、後家の類野郎、傾城の名目を戀と定められと心の戀なくは戀にはあらす百年のつくも髮もわりなき面影にはたへぬへし女戀ならは男も　なるへし娘戀ならはむすこも戀ならん娘とは親に知らせて仲人のいひしろへて樽肴に定證たれは何のやるかたなき戀ならん人は淺芽が宿に云忍ひて雲井のよそに思ひやりて跡なき袂に戀佗ぬされは戀の附句いへは現か夢か思そ恨て附たらんに附かぬ事あるましこの境を見立て情の戀といふ事骨皮なり

月花に昔小袖の袖狹く
常のなさけを出代りに泣
八朔も九月も酒はさたはかり
朝寐夕寐に年寄のつて

前章は戀にはあらすされと附句戀ならは二句の戀ならんに出代りといへは戀にはあらす後章は節句に小袖を傍りて遊はんと思ひたるに酒はさたはかりにて夕寐朝寐の淋しき心のゆかん所ありて此妻は若き後家と見るへし
なるもならすも言て見るなり

無筆にはいかに生れて美しき
湯漬の膳に涙こぼるゝ
傾城の人待うちを隠し合
枕二つを誰そと咎むる

枕二つを咎むる人誰ならんと其人を定むるに傾城の身仕廻に口舌と見て此句の身仕廻るといわされは枕ふたつのよるへき坐敷の際なしされは身仕廻の跡淋しく禿なと引寄てたはむれたる枕也或は肝盤の二膳箸も身仕廻に間屋のほし鱈もかゝる細微の情をもらさす傾城野郎の坐敷といふとも知て遊はんは高し不知遊はさるは低し然は我門の戀句とならは釋迦も達磨も覺束なし

物さしに狂ふ男の叩かれて
炙とはきらひ餅につきやくふ

縫針の眞中へ來て戯れし姿見るやうなれは面白し是れ戀句の辨芭蕉後集

平句戀句の事

平句は姿より一作心得てよし戀句は姿より情から入込めは殊更むつかし戀句を姿より入込て噂に聞へわしく是を平句戀句の傳とて連歌にも大事の心得なり全集

夾戀（にさみこひ）　平秋春の句に戀の春秋付て又平春秋付なるを嫌ふことなり

戀句（こひのく）　こひくといふはわろし戀の句とのゝ字入るへしとなり

戀つまり　戀五句に至りたるなり

戀春戀秋秋に戀をむすひ春に戀を結ひたるなり以上俳諧各目抄

俤附句の事

俤と云は古人の名を出すに限らす二句の中に是は西行是は頓阿なとゝ匂ひに見ゆるを俤と云ふへし附句も左の如し今時楠の辨慶のといへるたくひは多く軍書を讀やうにて俳諧なしたとへ人名を出すとも俳諧の心を忘るへからす

草庵に暫く居ては打破り　芭蕉
命嬉しき撰集の沙汰　去來
代〳〵に居風呂の月
辨慶か笈の中より蕃椒

俤の句はかくの如く前を西行能因の境界と見て附る也直に西行能因と附るは手強くならんたゝ俤にて附るへし又人を定めていふのみにもあらす雪中庵雪の枝折

發心のはしめに越ゆる鈴鹿山
内藏頭かと呼聲は誰

いかさま誰そか俤ならん又或席にて宗祇老人、悲莫悲兮生別離、樂莫樂兮新相知此心をとりて

旅のこゝろを何にたとへむ

ならひとて長き別れは慰むに　宗　祇

かはかりのかたき事を打和けて道はりたりすへて故事古歌とり等それと聞へぬやうに幽ませて作る事なり俳諧小鏡

あら野に

うらみたる涙まふたにとゝまりて　越人

靜御前に舞をすゝむる　其　角

冬の日集に

翌は敵へ首おくりせむ　重　五

小三太に盃とらせ一とつ颯ひ　芭　蕉

さるみの集に

發心のはしめに越ゆる鈴鹿山　仝

内藏頭かとよふ聲はたれ

冬の日に

豆腐つくりて母の喪に入　野　水

元政か草の袂もやれぬへし　芭　蕉

春の日に

咲わけの菊にはおしき白露そ　越　人

秋の和名にかゝる順　且　楽

深川集に

頻あてをはつして月を打詠め　山　翠

惡七兵衛景清か秋酒堂

俳の句月日定まりたるあり前句附句ともに其心得あるへしたとへは秋季に曾我の夜討冬季に長篠の陳なと附てはつかぬ也尤も雜の句に附るは子細なし附句も生田の合戰に秋季なと附ては附かさる也寂栄

脇五様の中に面影付と云は二様あり姿の面影、心の面影也

先姿の俳と云は

池水に蛙飛込む夕部哉

片袖重くかさす春雨

又前句の發句に和流先生か此の如くに付ては心の面影と申にてや候はんと尋ねしかは尤なりと先師答られし句

和歌にやはらく春雨の空

是にて心得へし又是を心付ともいへりと也芭蕉後集

附味は景色推量俳此三つに極る色々の事有之といへとも兎角此三つを能工夫すへしかくの如く並へて附るには非らす景色に景色、推量に俳とも付るに二句ゝは苦しからす

推量　衛士のかゝり火立る黄昏

采女招す玉の御簾の打崩れ

俳　草庵に暫く居ては打破れ

いのち嬉しき撰集の沙汰

右附句は往古より三變也昔は附もの專一中古は心附（俳のこと）元祿此かたは句、ひゝき、撓なとよしとす云々其角堂説

俳の事　古事古詩古歌古語なとを取て作るには三つの習ひあり和歌は證歌を取てよむ故に能因の白河頼政の白川

なと同しやうなるも聞ゆれとも俳諧にては人の句を取て作らぬ事也新意を吐こそ俳諧の誠なり芭蕉も一句の主とは成難しと云はれたり必す人の句を取るこそ無用なり

蕉門の教へに古きを用ひて唯一二字のてにはの新らしみに遊ふと云は古き詞を用ひて心の新らしみにてにはを盡すと云事也人の句を取て一二字のてにはを換へて作る事には非らす中略人の仕たる趣向を奪ひ口先の手つまに心を寄せる事有まし卑劣第一成るへし耳底記

他門の古歌古事を取るは其歌の詞をとり其歌にすかりて其題に吟する也故にあるは糟粕或は講釋となるなり蕉門の古事古歌を取るや本歌本説を傍に置て眼となるへき詞を二三字取て別義別題に詠する也故に古人の心を取て古人の力をからす俳力の俳士古事古歌取と云事を見出し得す師説錄

古歌を取る事和歌にては二句或は二句半取へきか三句とる事過分と申す也發句には一句半まて取るへし發句は上の句のものなるか故に二句とつては我句とすへき所なし此覺悟なくして古歌古事を二句取躰の句見へはへるは學さる故か猶大切の覺悟侍る也直旨傳

俳附に死活ある事

草庵に暫く居ては打やふれ　芭蕉

前句に「ゆかみて盞のわはぬ米櫃と凡兆の句あり其米櫃のある家は一所不住の世捨人の草庵也と人の見出しにて又一句を風流に作りたる也

命嬉しき撰集のさた　去來

去來抄に曰く初は和歌の奥義をしらす西行と附たり先師云前を西行能因の境界と見らるゝはよしされと直に西行と付んは手筒ならんたゝ俳にて付へしと直し給ひぬいかさま西行能因の俳ならんと云々草庵の人を定めたる付にして廣く西行能因なとのうへにあるへくやと思はるゝ所を附る事芭蕉附合幽玄の場にして一人に人を定めす見ん人の西行とも能因とも定むへきは心〳〵にあるへくと其俳にて附よと教へ給ふ所後學の者沈思して味ふへし直に其人を出して附るときは死物になりて跡の附窺屈也俳にて附る時は千差万別たり爰に死活の附句といへるある事にして一句窺屈たる時は一卷の調子とゝのふはす第一難たるへし初心の心得違ひある所なれはよく工夫して蕉翁の俳腸を探るへし先輩西行の俳也と定て鎌倉より撰集の沙汰を聞て昇られたる俳也又は高野山におはせし時千載集の撰ひあるを聞て俊成卿へ申遣はしたる俳也又撰集抄のより所もありてたしかに西行也なと極むる説あれともそは芭蕉のおかしく思ひ給ひ又歎き給ふらんと思はるゝ論にして蕉門の俳諧を覺へる人のいふへき説にあらす既に去來か云へる如く西行能因の俳ならんと廣く見るへき事肝要たるへし別に蛇足の説を設るに及はす猿みのさかし

面影付問答の事　杜年曰面影にて附ると云はいかゝ去來曰うつり、ひゝき、匂ひは附やうの鹽梅也おもかけは付やうの事也昔は多くは其事を直くに附たりそれを面影にて附るといふは

草庵に暫く居ては打やふれ
命嬉しき撰集の沙汰

初は和歌の奥義はしらす候と付たり

先師曰前を西行能因なとの境界を見たるかよしされと直に西行と付んは手つゝならむたゝ面影にて附へしとてかく直し給ひぬいかさま西行能因の面影ならひとなり又人を定ていふのみにもあらすたとへは

發心のはしめに越ゆる鈴鹿山
内藏の頭かと呼ふ聲は誰そ

誰そか俤ならんとなり面影のこと支考も書置たり見合すへし去來抄

古人の名面に出す事句作心得あり古人を體とせす用に遣ふ例也其名は噂にして別の事をいふ句作り也わしらひにする也又古人たりとも二十年此方の名は用ひぬ例なり願くは表に古人の名等出さぬ方宜しく芭蕉日頃の給ひしよしなり師說錄

名所附の事

名所付と云は所の名なとにてかつて取寄のなき所なとを取合付るなり富士に武藏野、嵯峨に鎌倉なとを付るを變對と云其名所の近所を付るを常對と云變對に二樣あり古歌對古事對也私に云武藏野に富士を付るは名所か國を隔てたりといへとも古歌に讀たる類也又名所によみたるものあり或は富士に時鳥花雪煙又武藏野に草隱れ茂み月なとやうの事也是は皆々名歌等の名所集によみ來れり昔より名高き名所には古人の歌か名句なと無き事は何の書に有とても付來らさる也近代の名所の名物等を用附ることは沙汰の外なれは此類にはあらさる也去なから能々心を付て仕へき事也よしまた作意にてくらへ付たる事もあり所謂嵯峨に鎌倉を付る事は何れも隱者の名所なれは似たるを見立て付る也是又一體也心得へきこと也古事も右に同し事也いつれも證句引に及さること也芭蕉後集

深川集に

深草は女はかりの下やしき　酒堂
伏見の戀を入相にきく　曲翠

是れ深草に伏見と押並へて附たる也

宇院法師に

此度は母の願ひの身延山　許六
底倉の温泉を下に見おろす　李由

是は旅中のさまにして附たる也行へき方の道すからの名所地名を何にても附らるゝ也

深川集に

初花に伊勢のゐはひのとれ初て　芭蕉
久ぬき若やく宮川の上　嵐蘭

是れ伊勢といふに其國の名所を附たる也

賣若菜に
いさり不便や姨捨の月　芭蕉
散る花に垣根を穿つ鼠石　嵐雪

是は同國の名所に同國の地名を附たる也此外にも思ひやりたる句は打越のこともいはるゝ也すへて名所に名所を附る事は此を味ひて附るへし俳諧寂莱

名所國名地名等の發句には句もさるへき名所に對する法なり

しるへして見せはや美のゝ田植唄
笠あらためん不破の五月雨

古法かくの如しといへとも對ならてもすへし芭蕉に格外あまたあり師說錄

名所發句作の事

名所は其の季を用ゆるに及はす直に名所をさして云かよし何の爲に季を用へんと沙汰しけれは其時の季をつかふには名所の賞翫薄くならんと思ふことそや名所は隨分景色にはまり面白き趣向を思ひ遣り侍る事なれは俳諧にかけらす詩歌とても同し事なりされと季を用る事も一作の出來にまかすへし芭蕉後集

名所をつかふ句作の事

五月雨に隱れぬものや瀨田の橋　芭蕉
下京や雪積むうへの夜の雨　凡兆
木母寺に歌の會ありけふの月　其角

斯の如く名所に聊かも遣はるゝこと勿れ名所を遣ふ事と知るへしたとはゝ花の雨を案るに吉野初瀨をかり用ひ月の句を案るに姨捨石山をかり用るは詮なき案し方也五月雨にかくれぬ橋を瀨田に定め雪のうへに夜の雨を下京に定め江戸の歌よむへき所を木母寺に定めたる是例の俳諧のちからなるへし或書

名所を思ひ合する事

口切に堺の底そなつかしき　芭蕉
喰つみや木曾の匂ひの檜もの　岱水
積る雪越の友人朝寢せむ　素牛

是らは思ひ合せたる句なり其所に至らすして名所の句案するには必す思合すへし芭蕉及古哲の句々を考るに武江にありて花落の句をいひ出せるといふ事なし

古人曰東海道の一筋も知らさる人宇治川の螢住吉の汐干正にいひ出したらんは興さめぬへし能く分別すへし

行春を近江の人とおしみける　芭蕉

猿蓑集に望湖水惜春とはし書あり或集に送別とはし書あり一時の誤のみにあらす後世の人を惑はす一盲衆盲を引の罪輕からすたゝ知らさるをしらさるとせはかくそれにいはれまし

名所に望みて句作の事

菊の香や奈良には古き佛達　芭蕉

朝櫻よし野深しや夕櫻　去來

武藏野やいく處にも見るしくれ　舟泉

似合しき器子のひとへや須磨の里　文草

まさに其姿を得へし吉野にも泊瀨にも紛るゝ案し方は詮なきことなり

芭蕉曰名所に望みて句をいひ出さんには其日其夜の其心にまかすへし

高野山にて

父母のしきりに戀し雉子の聲　芭蕉

角田川にて

いさのはれ嵯峨の鮎喰に都鳥　貞室

鎌倉山にて

眼に青葉山ほとゝきす初松魚　素堂

當摩寺の曼陀羅をおかみて

更衣みつから織らぬ罪深し　園女

八島にて

海人か家に聖よい込む彌生かな　千閣

伏見の夜船

ほんのくぼに雁落かゝる霜夜哉　路通

黑塚にて

つかの間や鬼こもるとも一凉　維舟

瀨田にて

我駒の沓あらためん橋の雪　湖春

是等は皆其所に至りて其名を顯はさて案したる也其姿情はもとより景物を一句に結ひて案るも一法なり益他の名所に紛きれさる樣に心得へし

名所に望みて古歌或は古き思ひあはする句作の事

躰にはまた如月の嵐かな　芭蕉

增賀聖の大悟を思ひあはされし句なりはし書にも西行の泪をしたひ增賀の信を感すとあり

猶見たし花に明行神の顏　仝

岩はしの夜のちきりもたへぬへしあくるはひしきかつらきの神」かつらきの神は夜のみ出て晝はかくれ給ふよし

白川の關越るとて

卯の花をかさしに關の曙着かな　曾良

古人冠を正すとあるを思ひあはせしなるへし

五條の橋の上にて

橋すゝみ千人切の噺せむ　桂士

和歌の浦にて

たつ鶴を相圖に戻れ汐干狩　鳥酔

和歌の浚に汐みちくれはかたをなみ芦邊をさして田鶴啼わたる此歌の心あり

名所に望みて雜の句作の事

かちならは杖突坂を落馬かな　芭蕉

光廣卿紀行くたひれてかちより通る旅人はみな杖突の里

とこそ見れ

是名所の雜の歌なり

歌書より軍書に悲し吉野山　支考

ひそかにいふ名所の雜の句い丶出さんには春の句中に春をこむへし秋は句中に淋しみ自然と秋なるやうにすへし尤好みてする事にはわらす古人もいふまれなり以上寂栗其他諸集

はし書ありて句意を深くする句作の事

さくらをはなと寢所にせぬそ花に寢ぬ

春の鳥のおゝろよ

花に寢ぬ是もたくひか鼠の巣　芭蕉

富貴なる酒屋に遊ひて文君か爪音も

醉の紛れに思ひ出らるゝに

酒部屋に琴の音せよ窓の花　惟然

僧にわかるゝとて

ちるときの心安さよけしの花　越人

去來曰墨薬の一體の句としていひおはせたり餞別となして獨見所あり

按するに端書ありて慥かなる比の體なるへし比は物をとゝてそれによれる詞によせていふと長頭丸も申されし也

其罪をにくんで其人を惡ます

蚊に酒をすはせん夜半の蝸の月　白雄

是らは僅かなる端書にて意を增すの趣を知るへし

兩國の橋にて郭公を聞侍りて

兩國の橋にて聞やほとゝきす

かくはし書も發句も同し事を述るは詮なき事也さりやとて無用の文もまた書へからす證句の趣きを味ひ知るへし以上寂栗

凡端かきの事は一句の光りを添るなり又は一句聞え兼たる又は何故に一句は成りたるかの時なるへしはし書なくても濟むへき句には無用なり端書と發句を離れ〳〵ならひは猶うたてかるへし七部集大鏡

名所に望みて詞書の句作

崑崙は遠く聞て蓬萊方丈は仙の地也まのあたり士峰地を拔て蒼天をさゝへ日月のために雲門をひらくかとむかふ處皆表にして美景千變す詩人も句を盡さす方士文人も言をたち畫工も筆を捨て走る貌姑射の山の神人有て其繪をよくせん歟

雲霧の暫時十景を盡しけり　芭蕉

山中の溫泉にての吟なり

白雲峰に重り煙雨谷を埋みて山殿の家處々に小さく西に木を伐る音東にひゝき院々の鐘の

聲こゝろの底にこたふ寒雲繼石といふ句に思ひよせて

高取の城の寒さよよしの山　其角

よし野の吟なり

芭蕉の奥の細道許六か風俗文選等を熟覽すへし而して後實に居て虚に遊ふ趣を書くへし文飾するかよきとて虚より虚に走るへからす又俗中の俗言鄙言の交りたらんは龍頭蛇尾とて見くるしきもの也今の文を見るに多くは剽襲にしてたゝよく繼合せたるまて也證に出せし文章をよく味ふへし俳諧集

名所に名所を作る事

加茂川や胡摩千代まつり稍近く　荷兮

岩くらの聖なつかしのころ　重五

是は思ひ合せし句也思ひ合する時は日の本の名所に唐土の名所も付らるゝと知るへし

京に名高き瘤の咒ひ　桐葉

富士の根を笠きて草鞋はきなから　芭蕉

是は旅のさま也道すからの事は何にても作にとりて付るなり

鳥紙に都の連歌書つけて　芭蕉

暮るゝ大津に三井の鐘聞　叩端

是はおしなへて付たる也眼前見るやうにすへし

しるへして見せはやみのゝ田植唄　如行

笠あらためん不破のさみたれ　芭蕉

是は國名の其國の名所を付たる也名所に國名をは付けす心あるへし俳諧道の便

旅躰の句作　旅は風雅のやつれなれは旅の情見ることかたからん偶々風雅のやつれたる已か觀想の情に落入て一句の姿しつ玉に近し我ひよろ〳〵と暮して露けしといへとも足も縱横に伊達の大木戸を越兼て世は樂しむへし怨むへしと知たらは或は細かに純子の夜具に逢ふて年忘れの酒に醉へし一枚の蒲を身にまとひ花の春をいわひありく是を世にある自在の人と云へし只旅はうき物と見て面白きは其日の德と思ふ事旅のみにかきらぬと先旅と云ふ字の見ゆれは馬籠渡し場の舟と計りおもひ寄せて虫藥の附合も耳にありておかしからす煮豆麥焦は順禮の時の附合と覺ゆられ去れは旅と云一字に付て其外寒暖風雨貴賤貧福の境を見定す何を何に付たるとも山川往來のすへて旅にあらさる物なし此故に戀と旅とは中に有て骨折るへき事

初旅に先雨のふる不仕合
男戀しう城て年寄る
機嫌よふ旅にたゝする親こゝろ
富士を眞向に乘つて行馬
元服に猶奉公の面白しく
風呂敷を片よせて置く窓の下

旅寢は寒き老僧の咳
風呂敷を拵て置窓の下
異見をすれは小便に立

旅中の句はおのつから淋しきをよしとす古郷を思ふなと

旅の本情なり芭蕉後集俳諧寂楽

名所地名違附の事

鼻紙に都の連歌書つけて
暮るゝ大津に三井の鐘聞く
いせの音頭も忘れかちなる
難波江に風ひくまてを月の舟

附かたは大かたこんな物しや、とちらそひとつは噂ひとつは現在也手引草

本式十句表の時五句目に極て名所を出すへき法となり名所と〳〵五句去るへし一本に二句もつゝく三句去るへしとあり

前向附の事

當時前句附といへるもの別種に行ふ人あり是をいやしき俳諧なりと思ふ人も少からす是俳諧古學にうとき人の言はしめけるとそ思ふ上古より宗鑑までは近世の樣に百員つらぬる事多からす只前句に後句作るのみにて貞德時分までかく有し俳諧のみにて連歌も上古かくのことし前句附は古風の傳へたるものなり付合初心の稽古は今もかくありたきものなり付方の本意を知らさる初學の時より百員

連ぬること何の益かある所詮付かさる句をなか〳〵と聯綿せるより一句にても付合すことを句作せは餘は是に準して知るなれは付句樣の導には大に益あるへし後世前句附の外に折句といへる名目あり其樣を聞けは一句の上五文字を判者のかたより出し中七文字五文字を作者より繼せいふなるへし伊勢物語曰かきつはたといへることを句の上に置て

からころもきつゝなれにしつまにしあれは
はる〳〵きぬるたひをしそおもふ

如斯當意即妙有しこれは一字つゝ一句〳〵の上に置ける一躰なり加樣な例より後世思ひ付くものと見えたり

笠付は初五一句の上にさせる故此名目出來しと也是は俳句の古風に例なきことゝ覺ゆ此前句附笠附とて後世の俳士野鄙なることさたみるもより所あり前句付笠附とて判者よりはうひと號し道具或は瀬戸物なとさま〳〵の器物を調ひ數多集りたる句の中にて一番勝には何二番勝には何、卷軸には何と句の善惡にて次第を立かのはうひを贈る由誠や春臺先生獨語に打たる如く畢竟は勝負事なりケ樣に卑劣なる取捌ゆへ先年官家より御制禁ありける此徒に交らさる俳士わしくのゝしる成へし只かけ物なしに前句附をなすは古風を慕ふなるへし然れ共いつとなく前句付といへる徒に入ると只句柄も勝れす成行よし予は俳諧初發心の時より今いふ前句附といふもの終に一句も作配

したる事なきゆへ只世人の咄に聞傳たり前句附笠付の外後世樣々の句躰の名目繁多に成たるよし句々の貴賤は俳諧に遊ふ人々發明して隨分邪路に赴さる樣に用心すへし　俳論

指合の事

指合の沙汰といへるは連歌新式の外は其家々の丁簡さまざま替り有て一決し難し先此事に付て五の品有るへし功と分別と用捨と斟酌を丁簡なるへし殊に俳諧にいたりては猶いろ〳〵の言語にわかれていよ〳〵其さかひ分ちかたかるへく貞德は連歌一座に四つのものは五といひ立圃は四つあるは八つにて然るへしなと夫〳〵の趣いつかたもおかしく云ひなして斷りは立ぬへし畢竟指合は其座の詞論をやめん爲の掟とそ席に至りてよしあしもなく句數を多くするを手柄とのみ思ふ人に向ひてはさのみ制すへき程の事に有間敷をもかへすは是時のよろしきなり又たしなみ深き人は句作今少し何とそと思ふうちに每々人に取られて句前をのかせは終に句遠になる故にはからぬ句なりともわれかしと思ふ樣の所か又は貴人少人初心なとの句は少々の指合はありとも折節のさま能く捌くへき事此道の肝要にこそ侍る可けれ　獨稽古

指合の事　俳諧と云は俗談と雖もいやしからさるやうに一作書たるかよし俗談と雖も所々に用る事の知れかぬる言葉もあれは聞合すへし中略發句を出し脇をうけ三十一文字になる是を發句の姿情を受て脇をする法也時に歌仙行にあそはれぬを第三とて先句の情を起して「テの字「ニの字のとまらぬ「テニヲハを用ゆれは四句目も其テの字の留らぬより一作思ひ出し及はすなり一奏には三句四句五句程には先句の情を起し云侍るへし弱き句も强き句にてそたて强き句を弱き句にて和らけ高き句をいやしき句にてさけいやしき句を高き句にてそたてたる法なり是をさし合と云ふこと也

一卷にあやかしと云句あり是はむつかしき句を云からめてにけ難き附合の續きたるに用ゆる事也其用ゆるには少し前句をからめておかしき事を作意するかよしとするなり　芭蕉後集

指合とはテニヲハの同字なり夫もてとでとの清濁は咎めす讀む時耳にかゝらぬ故也數字も送字も舊式より輕したとへは一盃に山一つの如き語路の拍子の耳にかゝらぬは二句以下は決してとかむ可らすと　貞享式

指合の事　俳諧に指合の事はなひ草の類に隨ふへし少しつゝの新古の事ありされと一座の丁簡を以て初心には隨分許すへし一句の好惡を論して指合は後の詮義なるへしさし合は變化の道理なりと先其故を知るへし變化の不自在なるより世に指合の掟あり萬物の法式は此境にて知るへし　二十五ヶ條